彼らが求むは不可触の黄金

スエルテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼らが求むは不可触の黄金

【Ｎコード】
Ｎ５３４７Ｍ

【作者名】
スエルテ

【あらすじ】
寂れた故郷のために、かつて師から聞いた『黄金の溢れる理想郷』を捜す商人の青年。彼は、その理想郷の住人と思われる四人の旅芸人達と出会う。自分も行動を共にしたいと願い出る青年に出された条件は、『馬車に乗せる代わりに、共に演奏に参加すること』というもので――。◆◇◆完全シリアスです◆◇◆

プロローグ（前書き）

初めまして、もしくは、いつも拙作に目を通して下さり、ありがとうございます（＾＾）
この作品は、一年ほど前に別タイトルでアップしていたものです。
タイトルは、『黄金』と書いて『きん』と読みます。
ラストまで執筆済みですので、更新停止という心配だけはありません（笑）
感想や、気になった部分へのツッコミなどを頂けると嬉しいです。
よろしくお願いします。

プロローグ

鋭い悲鳴が響き渡る。

広い、贅を尽くされたその空間の床に、じわりと赤い血が流れた。倒れた初老の男に縋ろうとした娘の腕を、もう一人の男が無造作に掴み、己に引き寄せる。

咄嗟の出来事に息を呑み、その暗い眼窩を見上げ――娘はもう一度、細い喉の奥から声を上げた。激しくもつれ合い、そのまま床に倒れ込む。

そこで男が求めているものが自分の命ではなく、自分そのものだということを悟る。殺されることとはまた別の、計り知れない恐怖が娘を襲う。相手に対してあまりにも力の弱い彼女は、しかし、それでも必死に抗う。両腕を突き出し、覆いかぶさる男の胸を押し退けようと精一杯もがく。

ふと、その細い指が、固い金属質なものに触れた。がむしゃらにそれを掴んだ。ブツリと鎖の切れる音がしたが、男はそれに気付かない。

必死に首を振ると、既に息をしていない父親の顔が娘の目に飛び込んだ。

手を伸ばす。

あとわずかでその体に触れようかというところで、肌に直接骨ばった手の感触を覚え、身を凍らせた。

瞬間、息を止め、絶望に目を見開く。

その時、娘の脳裏に浮かんだのは倒れた父親ではなかった。

彼女の帰りを待つ一人の青年。

何も考えられなかった。

ただ無意識に、その名を叫んだ――

第1章　行商人と旅芸人…　（1）

賑やかな音楽が良く晴れた空に響き渡る。
リウノと呼ばれる街の広場。
そこは普段は静寂に満ちた憩いの場であったが、その日は違った。旅芸人の一座が来ているのだ。
その知らせは、瞬く間に街全体に広がったようだ。広場はめったにない賑わいを見せていた。その空間の端まで人々が列を成し、その光景を一目でも見ようと身を乗り出す。

その中央には四人の旅芸人の姿があった。
縦笛を吹く者に弦楽器を弾く者、そして太鼓を打ち鳴らす者。

一人の男と二人の青年が持つ楽器は、この辺りでは珍しいものだった。木や動物の皮など自然の物により作られていて、柔らかい、素朴な音がする。だがそれに反し、演奏そのものは速さがあり、力強さもある。その一風変わった音が紡ぐ耳慣れない曲に、人々は興味深々の様子で顔を輝かせている。

そして、その賑やかで陽気な演奏に合わせ。

ふわり、と、少女が舞う。

まだ大人にはなりきらない、子供らしさが見え隠れする面立ちの少女だ。しかし踊りの為に見せる表情は凛としていて、瞳には強い光を宿している。
露出度は高くないが、どこと無くエキゾチックな雰囲気をたたえた衣装。彼女の動きに合わせ、袖の白い薄手のレースが、帯飾りが、軽やかに揺れる。

始めはゆったりと、そして徐々にペースを上げる軽快な曲の流れに合わせ。
軽やかなステップを踏みつつ、長い、踝までを覆う闇色のスカートの上に巻いていた鮮やかな布を両手いっぱいに広げ、頭上に翳した。

空の青を、幾度となく切り裂く赤。

深い小麦色のまっすぐな長い髪を、自身が纏う風になびかせる。

くるり、と向きを変えたその一瞬、場を取り巻いていた人々の一人、赤毛の青年と視線が重なった。お互いにしか分からない程度に、かすかに、だがしっかりと、彼女は微笑む。

弦楽器の賑やかな掻き鳴らしが止み、縦笛の風のような綺麗な音が、ひときわ高く響き渡った。曲の終わりだ。

ぴたり、と、頭を下げ、赤い布を身体に巻きつけた状態で動きを止める踊り子。
わずかな間の後、取り巻いていた人々から、割れんばかりの拍手喝采が上がった。

「ありがとう、ありがとうございます！　お代はこちらへ！」

見事な笛の音を披露した楽団の中心人物らしき男が、自ら帽子を持って客の間を回る。
そこに数枚の硬貨を投げ入れ、彼は、誰にも聞こえない声で呟いた。

「やっと見つけた」と。

＊＊＊＊＊＊

「マディカ、今日も好調だったね、お疲れ様」

彼らの移動手段でもあり、生活の場でもある馬車の入り口に腰掛けた彼女に、先ほど楽団で演奏を披露していた青年の一人が声をかける。それに弾かれたように顔を上げ、マディカと呼ばれた少女は大きな青い目を細めた。

「ザカリアも、お疲れ様」

「この街は大きくて、人が集まりやすいようだな。スライは喜んでいた」

隣に腰掛け、ザカリアと呼ばれた彼は手の中の弦楽器に目を落とした。どことなく浮かない表情で、指によく馴染んだそれを軽く撫でる。

「そう言えばザカリアは、大きな街が嫌いだったわね」

「ああ、正直なところ苦手かな。静かな故郷が時々懐かしくなるよ」

素直に認め、苦笑する。人目を惹く整った容貌の彼は、それすらも様になるのだが、本人には全く自覚はないようだ。

そんな彼に、屈託のない笑みを見せ。

「私は大きな街も好きだわ。今までに無い、新しい物事を知ることができるもの。それはとても楽しいことだわ」

マディカは姿勢を正し、胸を張って言う。その様子が微笑ましく、ザカリアはつられて微笑した。
それに気付いてか気付かないでか、ふと視線を落とし、つい先程とは打って変わった口調で、マディカが小さく続ける。でも――と。

「私も故郷を一番、想ってる。どんな街よりも」

刹那的に郷愁の色を浮かばせた彼女の肩を、軽く、慰めるようにザカリアは抱き寄せた。それに素直に身を預け、視線を落とすと、少女の目に見慣れた鮮やかな色が映った。深い緑、青年の腰に巻かれた帯だ。

彼らは、普段は旅に向いた軽装でいるが、公演の時は違った。彼らの土地の伝統である衣服を身に纏う。色合いは白や黒で質素だが、襟や袖に細かな刺繍が施されている。そして腰には、鮮やかで複雑な模様を織り成した帯をし、それが一際美しく人目を惹いた。

演奏される音楽もまた、古くから伝わる伝承曲だった。それも陽気で賑やかなものが多く、自然と人々の気持ちを明るくさせるような不思議な効果があるらしい。そのため、いつも客が多く集まり賑わった。

「今日もご苦労さん、けっこうな額を稼げたぞ」

馬車に寄り掛かり、その日の実入りを勘定していた大柄の男が、二人に労いの言葉をかける。

「それにこんな旨そうな差し入れまで貰ったしなぁ」

嬉しそうに持ち上げられたその手には、熟した果実がぎっしりと詰まった布袋が下がっていた。目の前に差し出された袋の口を二人が覗くと、甘い匂いがふんわりと漂う。

「うわぁ、いい匂い！」

その中の一つを手に、マディカがはしゃいだ声を上げた。先ほどの踊りの時とは違って、無邪気な少女の様子に、男――スライは微笑む。

「カーチスも来てみろよ」

それから少し離れた場にいたもう一人の青年に声をかけた、その時。

「なぁ、あんたら旅芸人だろう？」

幌馬車の陰から突如現れた赤毛の青年が、何の前置きも無く、無遠慮に尋ねた。人の良さそうな笑顔を、若干、日に焼けた顔に浮かべている。

その顔にうっすらと見覚えがあり、マディカは軽く首を傾げた。

――ああ、そうだ、先程の踊りの時に目が合ったあの……。

「君は？」

誰かが彼の質問に答えるより先に、警戒心の強いザカリアが訊ねる。

「ああ、これは失礼。俺はマシュウ、行商人だ」

「行商人？」

マシュウと名乗った彼は、大きく頷く。

「頼みがあるんだ。俺も馬車に乗せて欲しい。実は、俺の荷馬車が先日、運の悪いことに盗難に遭ってね。残ったのは必要最低限の貴重品のみで、この街で足止めを食らって困っているところなんだ」

大袈裟とも言える動作で肩をすくめた人物の所持品らしき物は、確かに肩にかけた粗末な袋一つだけしか見当たらない。

「それは気の毒ね」

素直に同情し、マディカは眉根を寄せる。しかし、ザカリアは未だ目の前の青年を信用することができない様子だ。

「ああ、同情するよ。だけど、馬と荷は、行商人にとってはきっと命と同等に大切な物だろう？　それをなぜ、全て失うなんてことに？」

「あんた、痛いところを衝いてくれるなぁ。そうだ、俺のこれまでの十九年の人生で最大のドジだ。この前に寄った町で仕入れた品物が、この街じゃ予想外の高値で売れてさ。それまでは慎重になっていたんだけど、たまには贅沢もいいだろうってことで、酒場に行って……まぁ、その、何つーか。少しばかり羽目を外し過ぎたと言うか……ははは」

開き直ったかのように頭に手をやり笑い、それからがくりと脱力し、地面に向かって首をゆっくりと振る。

「つまり、酔いつぶれて、その間に盗まれたと」

それまで静かに仲間と見知らぬ相手のやり取りに耳を傾けていたスライが、ずばりと核心を衝く。マシュウの力ない笑みは渋面に変わり、またしても大きく首を頷かせた。
決してその災難を笑うわけではなく、スライの口元が緩む。

「ふーん……。まぁ、いいだろう。好きな所まで、いくらでも乗って行けばいい。広さに大して余裕はないが、少しなら行商の荷を運んだって構わないさ」

「スライ！」

ずいぶんと気前の良いその一言に、ザカリアが抗議の声を上げる。これまで一度たりとも、他人を乗せたことなどないのだ。それも、初対面の、誰とも分からぬ素性の知らぬ者を。
仲間の不安も十分に理解しているスライは、若干ではあるが語気を強め、「ただし」と続けた。

「もちろん条件がある。まずは、お前さんが行商人であるという証拠を見せて欲しい」

もっともな条件に、マシュウは芝居がかったように肩をすくめた。

「そりゃあもちろん、当然の話だよな。あんた達だって、どこの馬の骨とも分からない人間を乗せたくはないだろう」

大袈裟に同意しながら、唯一の所持品の袋に手を突っ込み、中を引っ掻き回す。そして取り出したのは一枚の、両手の平ほどの大きさの羊皮紙。

「これでどうだろう、この街での交易許可証だ。行商ってのは、誰でも好きにやっていいものではないんだ。ちゃんとその町ごとの商人ギルドの許可がいる。売り上げの一部を納めるっていう義務もあるんだぜ。荷物を運んでもいいのなら、あんた達にも謝礼として利益のいくらかを払ったっていい。それが商売人の道理ってものさ」

おもむろに広げられたそれに、一同は注意深く目を通す。

「マシュウ……だったな、疑うようなことを言ってすまないな」

書類を一通り確認した後に、スライが満足気にニヤリと笑った。

「それから、もう一つ。謝礼などは必要ない。しかし行動を共にする以上、お前さんも、我々の一員として参加すること。これが芸人の道理ってもんだ」

「なんだって！？」

さすがにその提案には驚き、マシュウは思わず素っ頓狂な声を上げる。半分まで丸めていた許可証を取り落としそうになり、慌てて地面近くで受け止めた。

驚いたのはマシュウだけではない。事の成り行きを見守っていた、ザカリア、マディカ、それにいまだ少し離れた位置から様子を窺っていた青年、カーチス。彼らもだ。

「待て待て待て、俺は商売は得意だが、音楽なんて物には縁がなくて」

「今から覚えればいい。もちろん一人でやれなんてことは言わない、皆で教えよう」

「いや、けど、そんな簡単にできるようなものではないだろ？　俺

には才能はないと思うぞ！」
「才能なんて関係ない、気の持ちようだ」
「いやいや、だけど！　人前でやれるようになんてとても……そうだ、俺なんかが加わったら、あまりの下手っぷりに客が逃げるッ！」

そこで、さも愉快そうにスライが笑い出した。口元まで出掛かっていた、更なる否定の言葉の数々を、マシュウは思わず呑み下す。

「そんなことは気にしないでいい、俺たちはな、一座を仲間として、いやそれ以上に家族として見なす。どんな音だって、それはその人物の持ち味なんだよ、あとは、努力できるかどうかだ」
「……う」

努力、と言われてしまうと、ぐうの音も出ない。

「まぁ、どうしても嫌だって言うのなら、無理はしないでいい。他を当たってくれれば良いだけの話だ」

豪快に笑いながらも、さらりと、マシュウにとっては酷なこと言うスライ。

「……分かった、できる限りやってみるから、乗せてくれ。荷まで乗せてもいいって言ってもらえることなんて、他ではまずないことだもんな」
「よし、決まりだ！」

目の前に差し出された大きな手を、半ば困惑したような笑みでマシュウは握った。

……（2）

何だか計算外で面倒なことになったと、揺れる馬車の上、マシュウは声には出さずに唸っていた。
彼には、心に抱くある計画があった。

――黄金（きん）の溢れる理想郷。

かつて行動を共にしていた師から一度だけ話に聞いた地。それを見つけ出すことだ。
マシュウが求めるものは、一握りの黄金ではない。遠くに残してきた、生れ育った小さな、これといって特徴のない寂れた村――そこに豊かな富をもたらす特産品となる何かだった。

（理想郷とまで言われる土地になら、価値のある品物や、利益を産みだす新たな技術があるかもしれない）

それが彼の思惑だった。
しかし。

（どこをどう探せばいいんだか……）

決心したのはいいが、いきなり行き詰ったのだった。師は、肝心の場所については頑なに口を噤んだ。

この大陸には、いくつかの国がある。マシュウが行商を行う拠点にしているのは、エシエントという国の首都である港街だ。ここからはたくさんの船が外の世界を目指して出港する。

この広い世界では、未だにほとんどの人々に知られていない未知の土地も数多残っている。マシュウが探すその土地も、おそらく、そのような中のひとつなのだろう。まるで広大な砂漠に落ちた一粒の雨水を探すような、途方も無い計画かもしれない。しかしそれは、もしあることを知らなければ、の話だ。

師は、その場所こそは語らなかったが、その村に住むという人々の特徴を話していた。

――そこでは皆、揃いの色である長い髪と目を持ち、服装もその村の伝統のものを纏っている。

そのことを、マシュウは忘れてはいなかった。そして、その頃の師は、この大陸から出たことはなかったと記憶している。と言うことはつまり、外洋に比べれば比較的近隣にある場所だ、と考えて間違いないはずだ。

そのことからマシュウは、行商を続けながらも、行く先々でそういう特徴の者を見たことはないか、と訊いて回っていた。なぜと尋ねられれば、適当に理由を付けた。下手にこの話を広めるのは考え物だ。

価値のある土地が新たに発見された時にはそれを巡って、多くの血が流れることも珍しくはない。国同士の大きな争いに発展することすらある。その場合に最大の被害を被るのは、何よりもその土地に住む人々なのだろうということは、容易に想像がつく。

土地を荒らされ、たくさんの人々が傷付けられる――マシュウは、それを避けたかった。そんなことは望んではいない。ましてや、誰かの命など。

けれども、いくらこの大陸での話であったとしても、やはりそう簡単に見つかるはずもなく。訊いて回るのにも舌が乾き始めた頃に、その情報を得たのだった。

「そう言やぁ、そんな感じの旅芸人を先日見たっけな。今はここにはいないよ、確か、次はリウノに行くって言ってたかな」

その言葉を頼りに、マシュウもリウノへと急いだ。もちろん、それが本当にその理想郷の住人であるという確証はない。しかしそれでも、やっとで掴んだ手がかりだ。わずかな望みを賭け、確認のためにもその旅芸人に近付いてみるつもりだった。

そして見つけたのだ、その街で演奏する彼らの姿を。
特徴的な衣服や、明るさも色合いも同じ髪や目の色――マシュウは一目で確信した。

＊＊＊＊＊＊

「……で、こっちの栗毛がロホ、あっちの黒毛がネグロよ」

幌馬車の中、マシュウの計画を知る由もない少女が、後方を行くもう一台の馬車を指差す。
マシュウを新たな一員として迎え入れ、彼らは次の街へと移動していた。二台ある馬車の先頭には、スライ、マディカ、マシュウが乗り込み、覆いのない後方の馬車には、ザカリアとカーチスという組み合わせだ。

マシュウが加わることにマディカは驚き、ザカリアとカーチスは難色すら示したが、反対することもしなかった。一座のリーダーであるスライの決断には全幅の信頼を寄せているということらしい。

先ほどまでさんざん手元の縦笛と奮闘していたマシュウは、マディカに不思議な香りのする茶を差し出されたところで、一息つくことにしたのだった。

「がっしりしてて、丈夫そうな馬だよなぁ」

もったいぶるように少しずつ、木の器に満たされた茶を啜る。さっぱりした果物のような酸味に、ほのかに蜜の甘さが広がる。試すのも初めてのものだが、風味豊かで悪くない。喉が渇いていたマシュウは、おかわりと言いたくなるほどだ。

向かいに座り、マディカも器に口を付ける。その背後の一段高い御者台にはスライの広い背中があった。その中ほどまで伸びた小麦色の髪の細い束が、馬車の動きに合わせて時折り揺れる。

「俺たちの故郷では一般的な馬だけどな。険しい山道にも耐えるように、足が太い。ここらの街で見かける馬は足も身体も細くて、早く走るにはそっちの方が向いてるんだろうな」

軽く後ろに目をやり、スライがマシュウの呟きに答える。

「あんた達の故郷か。俺には珍しいものばかりだ、馬にこの茶に、商売の時の衣装、それに」

つ、と目を落とす。

「その笛は、ヴィエントって言うの」

マシュウの視線を追い、マディカ。

「どう、調子は？」

「どうもこうも……音すら出ない」

一見、簡単そうに見えるのに、意外だった。厚みのある木を刳り貫いて作られた笛だ。息を吹き込めば、音など出るものだと思っていた。

ところが、だ。吹けども吹けども、音など出ない。顔を真っ赤にして吹いても、擦れるような情けない空気が漏れるだけだった。

「肺で呼吸していたらダメだ、腹からだ」と言うスライの指導を受け、それなりに頑張ってはいる。しかし、やはり思い通りには操れない。

「難しいもんなんだなぁ」

ヴィエントと呼ばれるそれを片手に、辟易する。

「マシュウは、これまではずっと行商を？」

少しでも目の前の人物のことを理解しようとしてか、マディカが問う。

「うん？　ああ、そうだな、交易をしながら、街を行ったり来たりだ。許可証を得ている所じゃないと売買ができないから、行ける範囲は限られるんだけどね。少しずつ儲けを増やして、行動範囲も広

げてるとこだ」
「許可証は、どうやって手に入れるの？」
「だいたいは、ギルドに金を払って発行してもらう。けど、金さえあれば誰でもってわけじゃあない。ちゃんと財政状況やら何やらも報告しないといけない。それを基準に、いくら納めるか決められるんだ。けっこう面倒なことも多い世界なんだぜ」

口調とは裏腹に、歯を出してニカリ、と笑うマシュウにマディカもつられ、思わず破顔してしまう。その笑顔は、踊る時に見せるものとは違い、実に素朴だ。

（周りに保護者がいなけりゃ、口説き文句の一つでも言うのに）

胸中でこっそり呟いたりもしたが、微塵も顔には出さない。

保護者と言えば……と、ふと後方に続く馬車に首を巡らす。馬三頭分ほど離れた先の御者台にザカリアの姿。カーチスは荷台に乗っているのだろう、時折、彼ら揃いの深い小麦色の頭が、御者台の後ろから覗く。

「家族か何かなのか？」

ふと、そんな疑問が口を衝いて出た。唐突な質問に、マディカは目を瞬かせる。

「えーと、ほら、全員同じ色だろ？」

自分の赤い前髪を指先で軽く摘み、マシュウ。それを見て、ああ、と彼女は頷いた。
彼らがマシュウの探す村の人々で間違いないならば、家族ではな

くとも、皆同じ色であるはずだ。それを改めて確認しようと意図しての質問ではなかったのだが、返ってきた答えは、マシュウにとっては幸先の良いものだった。

「私達の村では、全員が同じなの。でも、そうね、スライと私は従兄弟同士よ。私は十六でスライは三十だから、歳はだいぶ離れているけど」

「親子ほどではないけどな」

マディカの答えに、件のスライが前を向いたまま一言添える。

「ザカリアとカーチスは村の仲間よ。二人は幼馴染同士で、私より七つ上で。血の繋がりはないけど、私にとっては二人の兄がいるみたいな感じなの。私は生まれてからずっと皆の音を聴いて育ったのよ」

遥か彼方の故郷や昔を懐かしんでか、ふと、目を細めて笑う。

「そう言やぁマディカはよく二人の後を追っかけて歩いてたよなぁ。服の端を握り締めて離さなくて。で、たまに見失うと大泣きして、慌ててザカリアが飛んで戻ったなんてこともあったっけな」

「そ、それは本当に小さい時の話だわ」

スライの思い出話に、マディカは恥ずかしさから口の中で小さく呟く。

「ザカリアは真面目で優しい人よ。初対面の相手にはちょっと気難しく思えるかもしれないけど、打ち解ければそんなことはないって分かるわ。カーチスは他人と話すのがあまり得意じゃないんだけど、でも誰よりも友達想いなの」

ゆっくり会話をする機会が無いままだった二人は、マシュウにとっては未だ知らぬ相手も同然だった。
がっしりした体躯を持ち、豪快でいつも人をからかうような笑みを浮かべているスライや、小柄で可愛らしく、人当たりが良いマディカに比べ、彼らは何処と無く近付き難いような気がしていた。

背筋をすっと伸ばし、几帳面に束ねた腰近くまでの髪を、ゆったりと肩に流したザカリア。見目は穏やかでかなりの美男子の部類に入るのだろうが、仲間以外の他人に対しては警戒心が人一倍強いらしい。

対して、鼻の周りに、若干のそばかすがあるカーチス。細かいことは気にしないであろう様子が、無造作に後頭部でまとめられたパサパサの髪などから窺い知れる。悪い人物ではなさそうだ、と言う雰囲気ではあるのだが、マディカの言う通りに口数が極端に少ない。

（なるほどね。ザカリアは、下手に馴れ馴れしくするときっと逆効果だろう。カーチスは、今まで関わったことのないタイプだから難しいな）

マディカの説明に相槌を打ちながら、件の、後ろの馬車の二人にちらりと視線を送る。
普段のマシュウであれば、それ程は周りの人間のことを気にしたりはしない。商売をしている為に培われた、相手を見抜く観察力にはそれなりに自信はある。更には、それぞれの性格に合わせる話術なども心得ているつもりだった。

しかし、それは人との調和とは違う。マシュウのそれはあくまでも、取引を少しでも有利にするための駆け引きだ。決して相手と打

解けているわけではない。

そして今回の相手は、どちらかが優位な立場となる商売相手とは違うのだ。自分の目指すもののためにも、彼らにできる限り馴染み、信頼を得てゆくしかない。そうして彼らといれば、いつかその村へ共に行けるはずだ。そう考えた。

その後、しばらくの間はそれぞれが思い思いの作業に熱中し、ゴトゴトという車輪の音のみが心地よく辺りに響いていた。

マシュウの持つ木製の笛ヴィエントは、相も変わらず、うんともすんとも言わないのである――

……（3）

一行はよく整備された街道を順調に辿り、二日後の夕刻には新たな町へと到着した。先日に発ったばかりの街と比べ、規模はかなり小さい。

石造りの簡素な教会を町の最奥に据え、その周囲に群がるように民家が、そしてそこから若干離れた位置に、町の規模からして不自然な数の宿屋や酒場が集中して建っていた。

これといった特産品もなく、作物も育ちにくい痩せた土地ではあるが、街道の真横に位置する為、そこを旅する人々の宿場町として栄えているようだ。

スライが手綱を引き、町の入り口に幌馬車を停める。少し遅れて、後方の馬車もその横に並んだ。

「ここで宿を取るのか？」

馬車から降りずに、ザカリアがスライに問う。それに短く、ああ、と応え、スライはその大柄の身体に似合わず軽い動作で御者台から降り立った。足元の乾いた土が、一筋の細い風に流される。

「俺たちは何日も野営が続こうが一向に構わないが、マディカはちゃんとした所で休ませてやりたい」

一つ大きく伸びをし、ゴリゴリと肩の骨を鳴らしながらのスライの言葉に、ザカリアは表情を和らげる。同意の印しだ。カーチスは無言でスライに目をやっただけだったが、二人には、彼の言いたい

ことは分かっていた。「同じく賛成だ」と。

「私だって野営でも平気よ」

幌馬車の後ろから顔を覗かせたマディカが、屈託のない笑顔を仲間に向ける。

「でも、ロホとネグロも、ちゃんとした藁の上で休ませてあげたいわ。いつも重い馬車を引っ張ってくれているんですものね」

その言葉を理解しているかのように、二頭の馬は揃って鼻を鳴らした。

馬車を降りるマディカに手を貸し、マシュウもそれに続く。ずっと硬い馬車の床に座ったままだったので、固まった体が悲鳴を上げる。

「……腰が痛ぇ」

痛みが瞬間的に走った部位に手をやり、思わず呻く。

「ここは、カドスか」

そしてぐるりと一通り見渡すと、記憶にある町並みが広がっていた。以前も行商の折に立ち寄ったことがあるのだ。もっとも、この規模の町では品物の取引をするような場もなく、一晩の宿を求めてのことだったが。

「何だ、来たことがあるのか、マシュウ？」

手綱をマディカに託し、適当な宿を決めるために歩き出しながら

スライ。

「ああ、やっぱり宿を取るためにね」
「そうか。じゃあ、いい宿を知っているなら教えてくれ」
「そうだなぁ。前に泊まった宿は飯も旨くて良かったな」

しばらくした後、彼らは町の端にある宿に部屋を取ることにした。狭いながらも、一階は食堂兼酒場になっている。
この町でも小さめの宿ではあったが、部屋も寝具も清潔で、何よりも宿の主人が好感を持てる人物だったので、マシュウは迷わずこの宿を推した。

馬を厩に休ませ、それぞれが決められた部屋へと向かう。マシュウは、カーチスと相室だった。
そのカーチスはと言えば、先程からベッドの上で黙々と楽器の手入れを行っている。その手の中のものは、この辺りでは一般的な弦楽器のリュートのように見える。しかしそれとは違い、大きさも少しばかり小さく、弦の数も少ないようだ。

「それはリュートじゃないよな？　よく似てるけど」

マシュウの問いかけに、カーチスは一瞬、顔を上げる。そしてすぐにまた手元に視線を落とし、短く答えた。

「……これはオラだ」
「オラ？　初めて聞く名前だな。それの音ってさ、何と言うか、深みがあるっての？　良い音だしよく響くしで、初めて聴いた時は驚いたよ。それに笛の音に太鼓の音もな！　身体にまで振動が伝わってさ」
「……そうか」

「うん。あんた達の持ってる物って、なんか色々と珍しいよな」
「……」
「えーっと……」

――会話が続かない。

暇を持て余す上にどことなく息苦しさを感じ、マシュウは外へ出てみることにした。その旨をカーチスに一言伝え、結果は分かっていたものの「一緒に行かないか」と誘ってみた。すると驚いたことに、若干の間の後「ああ……」と小さい声での返事があった。しかしすぐ「いや、僕は遠慮する」と早口に言い、また手元の作業に没頭してしまう。

その後ろ姿に肩をすくめ、一人、通りに足を踏み出した。もうすっかり日は傾いている。軒を連ねた宿屋に、人工の明りが灯され始めていた。

「さすがにちょっと寒いな」

吹き付ける風に身震いし、羽織った長い外套の上からしっかりと両腕を身体に巻き付ける。

「さて、どこへ行こう」

散策するにしても、大した見所のある場所でもない。ふと目に入った、厩の隣りに置いた幌馬車を覗く。もちろんそこには誰もいない。貴重な荷は、全て部屋へと運び込んである。

井戸で作業していた宿の厩番と軽い会話をして別れ、ひとつ思案した後、この町で一番大きな建物へと足を進めた。教会だ。

旅人姿の人々が行き交う宿屋の密集した通りを抜けて、民家のある一帯に入る。とたんに目を焼く松明の炎も人々のざわめきも消え、静まり返った暗く細い道が、目の前に姿を現した。家族で団欒をしているのだろう家々から漏れるわずかな明りが、かろうじてその在りかを示している。

そしてその先に見えるのは、石造りの建物の屋根。

足早に歩を進め、やがて教会の前に申し訳程度にしつらえられた広場に出る。空を仰ぎ見ると、幾千もの星が暗闇を彩るように無造作に散らばっていた。

教会の大きめの扉を音もなく開ける。隙間から身を滑り込ませるようにして中に入る。薄暗い中は蝋燭が灯され、ほのかな柔らかい光が空間を包んでいた。

祭壇の前に簡素な木製の長椅子がいくつも並んでいる。誰もいないと思っていたマシュウの目の端に、見覚えのある小麦色が引っかかった。微量の光の中でもそれは明るく目を引くものだった。

人の気配に気付いたのだろう、その髪の持ち主が立ち上がり、振り返る。

――ザカリアだった。

「邪魔したか？」

先に口を開いたのはマシュウだ。一瞬、驚いたように目を大きくしたザカリアだが、すぐにいつもの落ち着いた表情に戻る。

「……いや、そんなことはない」

そしてまた静かに椅子に腰を落ち着かせ、組んだ両手に顎を乗せて前を見据える。何かを逃がすまいとするかのように。
通路を挟んだ隣の席に、マシュウも緩慢な動作で落ち着く。

「神を信じてるのか？」

ややあって、マシュウが呟くように問うた。
唐突な、それでいて教会での会話にしては不謹慎な一言に、ザカリアは眉根を寄せてマシュウを見た。赤い髪と対を成したような、しかしそれよりも深い赤の瞳に、蝋燭の放つわずかな光が揺れている。

「信じていない、と言ったら？　君は怒るのか？　愚か者と罵るか、それとも、神の存在を宗教的な熱心さで説くか？」

一気にそう言い放つと、ザカリアは再び正面に向き直る。
カーチスと同じく、突然加わった他人を警戒しているのだろうか。その声には若干の棘があった。マシュウは慎重に、しかし、相手に媚びるための嘘ではなく本音を口にする。

「そんなことはしないね。なぜなら、俺もよく分からないからさ」
「神がいるのか、ということを？」
「自分が神を信じてるかどうかを、だ」

再びザカリアは隣りの青年のほうに顔を向ける。マシュウは唇の端を微かに上げた。今度はしっかりと笑っている赤い双眸に、青いそれがぶつかる。

「遥か昔、地上を支配していた欲望にまみれた人々を一掃し、慎ましく欲の無い人々にのみ生きる世界を与えたという神。それが今、

この大陸で信じ祭られている神だ」

祭壇の上の神像を、マシュウは腕を大きく振って示す。それは、穏やかな笑みを浮かべた初老の男性の姿をしている。しかしザカリアの視線は、マシュウを捉えたままだ。

「けど俺は、そんな変な話ってないと思うんだよなぁ。人間、欲があってこそだ。欲があるから、必死に生きていく努力をする。欲があるから、誰かを愛して、幸せにする。それで、自分も幸せになる。それって、悪いことか？」

マシュウの言葉に、刹那、驚いたような狼狽したような複雑な面持ちをし。

「同感だ」

ザカリアも柔らかく微笑する。

そして、若干ではあるが安堵の色を浮かべ、長く息を吐くと背凭れに深く身を沈めた。

「試すようなことを言って悪かった。わたし達には、わたし達の信じるものがある。だけどそれは、一歩外に出てしまえば異教と罵られる」

「人は自分とは違う物事に関しては、どうしても排他的になるものだからな」

頭の後ろに手を組み、マシュウは笑った。歯を出して、得意の満面の笑みだ。

「まぁ、随分とカッコつけたこと言っちまったが、俺の欲しい物っ

て言ったら、とりあえずは失くした馬車だけどな。それから、将来的にはデカい行商隊。それを率いるカッコイイ俺！　夢だよなぁ～」

手を組んだままの姿勢で一人、うんうんと満足気に頷く。

「で、あんた……ザカリアの欲しい物は何だ？　やっぱり、楽器とか？」

――しばしの沈黙。

どこからか入り込んできた夜風が細い炎を強く揺らした時、囁くような声が答えた。

「故郷だ」

「故郷？　あるんだろう？　どこかは知らないが、察するに良さそうな所みたいじゃないか」

マシュウの問いに、ザカリアは一瞬、目を伏せて俯いた。

「何でもない、忘れてくれ」

……（3）（後書き）

楽器や馬などの名前に、スペイン語を使っています。
「ロホ」は栗毛だから（それに近い）「赤」、「ネグロ」は黒毛だから「黒」。そのままの意味です（笑）
楽器名は、自然を現す単語です。「オラ」は挨拶の「Ｈｏｌａ」ではありません（＾＾；）

……（4）

夜も更け、一段と冷えた空気が肌を刺す。
マシュウとザカリアは、教会を背に宿へと向かう。帰り道は、お互いに静寂を保ったままだった。二つの足音だけが響く中、宿が近くなる。すると。

「なぁおい、何か様子が変だぞ」

それに気付いたのはマシュウだった。いや、ザカリアも気付きはしていたらしい。しかし、別に驚く様子もない。

通常であれば、儲け時のはずの酒場が軒並み開店休業状態だ。どこの店内にも、数える程度しか客がいない。その代わり、ある一つの店から、全ての店の喧騒を合わせたような音が響いてくる。

「あれって、俺たちの宿の酒場じゃないか？」

ほぼ店の前まで近付くと、人々の活気に空気が震えた。外まで漏れる明り。狭い店内に密集する人々。笑い声。そして、その中央には――。

「スライ！　カーチス！」

既に酒に酔っているのか、もしくは人々の熱気に酔っているのか。顔をわずかに上気させた二人が、それぞれの楽器を手に熱演している。
その周りを取り囲む人々の輪。しかも、ただ聴いているだけではない。皆でいくつもの輪をなし、踊っている。まるで何かの行事だ。

「ザカリア、マシュウ！」

輪の中から、小麦色の髪の少女が飛び出した。

「一緒だったのね、二人を待ってたのよ」

入口に立つ二人の姿を認め、弾いている弦楽器、オラの手を休めることなくスライが呼びかける。

「よぉザカリア、オラを代わってくれ！　マシュウ、踊れ！」

「踊れって、これは一体おぅわ！」

最後まで言い終わらないうちに、酔っ払った客の一人に力ずくで輪に引き込まれる。皆、踊りながらも笑い、飲み、騒ぐ。

わけが分からぬまま目を回すマシュウ。気付くと、演奏によく響くヴィエントの音も加わった。そして先ほどのスライのものよりも、だいぶ慣れた様子の弾き方である弦の音。スライからオラを引き継いだザカリアだ。その隣りではカーチスが早さも強さも乱さず、彼らがトルエノと呼んでいる樽型の太鼓を打ち鳴らす。

それぞれの得意分野に代わり本領発揮といった感じか、一層盛り上がる演奏に負けじと盛り上がる聴衆。

こんな騒ぎは、初めてだった。

通常、酒場で聴く演奏と言えば、吟遊詩人などが奏でるリュートや歌などだった。それも店の定まった場所でのことが多い。客側もじっくりと聞き入る者もいれば、まるでその音は空気であるかのように、同行者との会話を楽しんだり、飲み食いしたりと我が事に集

中する者もいる。
マシュウも幾度となく、彼らの演奏や歌声に耳を傾けたことはあった。
しかし。
「目、目が回るーッ！」
今まさに体験しているのは、一体何なのか。演奏する側もじっくり腰を据えて、なんてものではなく、軽く足で拍子を取りながらであるし、聴衆も凄まじいほどの盛り上がりようだ。
瞬く間に息が上がり、店の隅に追いやられたテーブルにしがみつく。目の前にあった、誰の物とも分からない酒の満たされた銅製の器をとっさに煽る。既に温(ぬる)くなっていたそれだが、火照った身体にじわりと行き渡った。
口元を袖で拭い、改めて場の状況を確認する。
店の隅に山と寄せられたテーブルや椅子。そこで酒を飲む者もいるが、大抵は今の自分のように小休憩と言った様子だ。
目前に迫る、人々の群れ。ほとんどがこの町に宿を求めた旅人だった。独り旅らしき男や若い夫婦など、様々だ。紡がれる早いテンポの曲に合わせ、勝手に身体が動いているらしい。それぞれが好きに跳ね、回る。その動きに、決まった順序や形などない。
人々の輪の中央にいる、旅芸人。今に比べると街中での演奏は、客の目を意識しての緊張したものであった気がしてしまう。周りの反応などおかまいなしに、勢いに任せ、演奏そのものを芯から楽しんでいる。
あのカーチスですら口元を緩め、仲間や見知らぬ踊り手達と笑み

を交し合っていた。

「マシュウ、大丈夫？」

器を片手に呆然とする彼の元に、マディカが人の間を縫ってやって来た。その声に、弾かれたように息を呑む。

「ああ、ちょっと……何ていうかその、驚いて」

「驚いて？」

「ああ、うん、いや……大丈夫だ」

自分を気遣い見上げる大きな目と会い、マシュウは苦笑した。

と、そこで一度、音が途切れた。どっと歓声が上がる。

「マディカ……」

いつもこうなのか？　と訊こうと口を開いたが、声に出して問う前に、再び軽快な、しかし身体の奥にまで振動が伝わる音楽が始まる。

「私、この曲好きだわ」

「！」

気付くとマディカに手を引かれ、二人で向き合う形で踊りの中心にいた。踊りなど全くの素人であるマシュウは、かなりぎこちない動きだ。対するマディカは、呼吸するかのように自然に、流れる動作で足を運び全身でしなやかにリズムを刻む。

マシュウを上手くリードしつつも、傍目にはマシュウが彼女をリードしているかのように見せていた。既に頭が真っ白なマシュウは、

されるがままだ。
その騒ぎは、皆が心地よい疲れを覚え、店の酒樽が空になるまで続いたのだった。

＊＊＊＊＊

「……全身が痛ぇ」

揺れる馬車の上でマシュウが呻く。
翌日は早々に宿を引き払い、次の目的地を目指して発った。前夜の彼らの功績により思わぬ利益を得た宿の主人は、宿代を無料にしてくれた上に、ほくほく顔で見送ってくれた。それほどの儲けがあったのだろう。

「私が無理させちゃったのかしら、ごめんなさい」
「ははは、体が相当なまっていたんだな」

硬い床に仰向けに伸びるマシュウを前にして、同じく騒いでいたはずの二人は、いつもと全く変わらない。疲れてすらいない様子だ。
馬車の車輪が石や溝の上を越える度に、身体を鈍い痛みが走り、顔を歪める。

「いつもああなのか？」

唸りながらも、昨夜言いかけてそのままだった一言を、喉の奥から絞り出した。

「いつもと言うわけでもないんだけどな。昨日はカーチスと呑んで

いたら、気付いたらああなっていた」
「気付いたらって……」
「でも、楽しかったわ。村のお祭りを思い出しちゃった。皆、元気かなぁ」

ふふ、と笑うマディカの言葉に、マシュウは一瞬身体の痛みを忘れ、ザカリアのことを思い出す。欲しいものを「故郷」と言った彼を――。

しかし、マシュウにはどういう意味か分からない。マシュウにとっても、それが無ければ彼らと共にいることの全てが無駄骨という事態に陥ってしまうのだが、その心配は杞憂にすぎないだろう。マディカの口ぶりから、彼らにはどこかに残して来た故郷が確かに存在するはずだということが分かるからだ。

――だとしたら一体？

本人に確認しようにも、あまり深く追求されたくない雰囲気であったために、それも叶わず今に至る。

（露骨に嫌な顔されたしなぁ）

その「露骨に嫌な顔」を思い出し、マシュウも思わず眉間に皺を寄せる。無言で目を眇（すが）め、真一文字に結ばれた口。元々が優しげな顔立ちだけに、逆に妙な凄みがあったように思う。

昨夜のその疑問を二人にそれとなく、しかしザカリアのことは告げずに訊ねる上手い言い方を思案していたのだが。

「マシュウの故郷は、どんな所なんだ？」

予想外にスライに先に訊かれ、一瞬、間が抜けた表情をしてしまう。

「あ？　ああ、俺の出身はロセロって言う、ものすごい貧しい村だ」
「もう一人旅は長いのか？」
「そうだなぁ、単独で商売をするようになってからは四年くらいになるか。ロセロを出たのは、もっと前だ。そこじゃあ稼ぐって言ってもろくな仕事がなくてさ。皆、毎日を生きてくだけで精一杯で」

何とか身体を起こし、積んである荷を背にして続ける。

「俺は他の町へ出て、そこで会った行商人に商売の仕方を教わったんだ。しばらくはその人と一緒にいたけど、自分の力でも何とかやっていける自信が付いた頃に別れて、独り立ちした」

スライもマディカも、無言で先を促す。

「それからはずっと一人だった。でも、別にそれも悪くはないけどな。気楽で、縛られるものも何もなくて。それに目標があるから、頑張れる」
「目標って、前に話してた、行動範囲を広げるってことね？」
「まぁそれも小さな一歩だな。俺は故郷に何か誇れる特産品を持たせて、新たな交易路を拓きたいと思ってる。それができれば村も豊かになる。そのために今稼いで、それから、何かあの村に合うものがないかを探してる。技術でも、品物でも」

そこで言葉を切る。馬車の揺れに、痛みを思い出したからだ。

「それは素晴らしい目標ね」

「いやぁ、そんな褒められると照れるなぁ」
素直な称賛に大袈裟に笑い、頭を掻く。
「そんで最終的には大きな行商隊を率いて、その特産品を運んで大儲け！　ってのが俺の夢だな」
「きっとできるわ。ね、スライ？」
マディカに同意を求められ、スライは首をめぐらし、背後を見やる。その口元は、穏やかに笑っている。
「そうだな。何事も強い意志があればきっと可能になる。頑張れよ」
他人事ではなく、身内のことであるかのように二人に温かい言葉を貰い、マシュウは無言でただ、はにかんだ。
数日前に会ったばかりの彼らが、もう何年も前から知っている友人さながらに接してくれるのが若干くすぐったく感じ、もぞ、と底が擦り減った革製の靴の足を動かす。
それと同時に心の底に、罪悪感がじわりと広がるのを抑えられずにいた。それはこぼした一滴のインクの染みに似ている。気にすればするほど、大きくなっていく錯覚すらしてしまう、不快なものだ。
ふと、後方から風に乗って流れてくる音に気付く。今日はカーチスが手綱を操っている。その背後でザカリアがオラを弾いているらしい。通した曲として成り立っていない不規則な、試すような軽い爪弾きだ。それに耳を澄ませ、目を閉じた。
これ以上、心の染みが広がらぬようにと努めながら。

第2章　港街アトレス……　（1）

潮の匂いを、海を渡る風が運んで行く。
どこまでも果てなく続くように錯覚してしまうほど青い空と海の間を、うっすらと白く光る一本の水平線が隔てていた。
海上を、真白い帆をかけた船が、波をかきわけ白い水の飛沫をその巨体に纏いながら進む。
その上空を、真白い翼を翻した水鳥が漂う。
彼らが次に目にした街並みは、大規模な港街だった。

「港街アトレス」

涼やかな心地よい風に赤毛を撫でられ、肺いっぱいに潮を含んだ空気を満たして、マシュウは呟いた。
馬車から身を乗り出して、マディカは行き交う人々の波に圧倒されている。

「すごいたくさんの人ね」
「この国の首都だからな。ここに王宮もあるし、各ギルドの本部もあるんだ。だから半端じゃない人が常に溢れてるってわけ」
「王宮？　この国の一番偉い人がいるところなの？」

マディカが、マシュウの説明に振り返った。

「その人には、会えるの？」
「うーん、よっぽど偉い身分の人間じゃないと普通は難しいかな」

会いたいのだろうか、とマシュウが疑問に思った時には、少女は再び外の景色に気を取られていた。

街に巡らされた石畳の道の中でも特に広い大通り。左右にはズラリと各国の珍しい品物を集めた店が軒を連ねている。
どこからか、鼻腔をくすぐる香ばしいパンや焼き菓子の匂いが漂ってきた。

「ここなら、たくさんの客が集まりそうだな」

人の波を避け、器用に手綱を操りながら、スライも嬉しそうに辺りを眺めている。

「いつも着いたらさっそく始めるのか？」

マシュウはそう訊ねながらも、どこか落ちつかない様子だ。それもそのはず、未だに曲どころか、まともに演奏すらできる状態ではなかったからだ。
もしそれでもいいから出ろ、などと無茶を言われたら、本当にどうして良いのか分からない。

「ん～、いや、すぐにではないな。まずは場所を探したり、そこで演奏をしても問題なさそうか様子を見たりして、それからだな。だからマシュウ」

そこで言葉を区切られ名を呼ばれ、思わずびくっと肩を震わす。

「商売を済ませて来るか？　リウノで仕入れた品物があるんだろう？」

そう言われ、我に返る。

（そうか、俺は、商人だった……）

馬車二台が停まる余裕のある町外れの広場で、彼らは一時別れることにした。貴重な楽器類などを積んだ幌馬車に旅芸人一座が、もう一台の荷馬車に取引の為の品物である木箱を二つ積み、マシュウが乗り込む。

「じゃあ、それぞれの用事が済んだ頃にまたここで」

「ああ」

スライの確認に、マシュウはこの黒毛の馬をちゃんと操れるだろうか、と若干の不安を覚えながら頷いた。

それに気付いたのか、マディカが明るく声をかける。

「大丈夫よ、ネグロは大人しくて賢いから、ちゃんと言うことをきくわ」

馬のがっしりした太い首から隣の馬車に視線を上げると、いつもの微笑みがあった。

「品物、いい値段で売れるといいわね」

「うん、ありがとう、そっちもいい場所が見つかるといいな」

長い間一人で行動していたマシュウは、そんなやり取りに何となく照れくささを感じながらも礼を言い、幌馬車を見送った。

それから一つ、大きな溜息をつき、独りごちる。

「なんか調子が狂うんだよなぁ」

恐る恐る、手綱を振るい合図を出す。ガクンと衝撃があった後、馬車は心地よい低音を立てて走り出した。なるほど、マディカの言

うとおりネグロは初めて手綱を握る相手でも問題なく従ってくれるようだ。

幾度となく目にして馴染んだ街並みを、慣れた道を選んで目的の場を目指す。交易所だ。そこで取引された品物の多くが、先程通った大通りの店の軒下に並ぶ。

広い港を通り抜け、その近くにある大きなレンガ作りの赤い建物が見えてくると、マシュウは無意識にぐっと腹に力を入れる。

これからが勝負だ。

馬車を建物の前に停め、広く開け放たれた木製の扉に手を置く。そこから中を見渡すと、装飾品などない殺風景な部屋に、これでもかとばかりに積まれた品物の壁ができている。そしてその隙間のわずかな空間に、数人の、交渉中の商人の姿。

彼らの相手をしているのは皆、マシュウの知らぬ顔だった。目を凝らし、一人を探していると、ふいに背後から肩を叩かれる。

「マシュウじゃないか」

「デレク！」

振り返ると、やせぎすの黒髪の男が立っていた。背もかなり高く、マシュウを見下ろす顔はだいぶ日焼けしている。どことなく船乗りを髣髴とさせるその顔に人懐こい笑みを浮かべ、悪びれずに大きな手でマシュウの頭を豪快にかき回した。

「相っ変わらず小せぇなー、お前は」

「う、うるさいっ、お前がやたらとでか過ぎるんだ！」

手を払いのけ、乱された髪を軽く首を振ることによって整える。

「で、今日は何を仕入れて来たんだ？」

マシュウが探していたのは、このデレクなる人物だった。アトレスに訪れると、必ずデレクの元で商売をしていた。同じ人物と懇意にしている方が何かと都合が良いからだ。それなりに打ち解けてくれば、良い品物の情報をもらえる時すらある。

彼とマシュウは歳の差も三年ほどしか離れていないせいか、自然と友人のような会話をする間柄になっていた。

「リウノの織物だ」

「へぇ、リウノのか。どれ、さっそく見ようか」

荷馬車へとデレクを促し、木箱の蓋を開ける。

中に折りたたんで重ねてあった一枚を、デレクへと手渡した。薄く軽い物であるが、手触りは良く、色も鮮やかで美しい。

「ああ、こりゃいい物だな。これで婦人の服でも作れば、さぞ人目を惹くこと間違いなしだろうな。しかし、リウノの織物というのは初めてだ」

「あそこの交易所では扱っていないんだ。街で偶然に見つけて、特別に頼んで売ってもらった。どうだ？」

今度はマシュウがにかっと笑う番だった。デレクは何やらブツブツと呟き考えていたが、思いきったように答えた。

「そうだな、前例がなく相場が分からない以上、値を付けるのが難しいんだが……。一箱で、赤銅貨を五枚でどうだ」

「五だって？　そんなんじゃ、ひと月の宿代の半分にも及ばないじゃないか。だめだ、売れないね。これ織るのには、相当な熟練した

技術が必要なんだぜ？　そこらじゃなかなかそんな織り手も見つからないだろうな」
「しかしな……分かった、特別だ、六」
「熟練の織り手が、通常の三倍は時間かけて織った逸品だ、八」
「おま、それは欲張り過ぎだ、七！」
「八と青銅貨を五！」
「って、おい、フツーそこって値上げするとこか！？　分かったよ、八で手を打とう！」
「毎度」

満面の笑みで、マシュウは右手をデレクに差し出した。その手を握り、交渉成立の握手をしながらデレクは深々と息を吐く。

「まったく、お前には負けるよ」
「それだけ選んだ品物に自信があるってことさ」

荷を降ろし、デレクはふとその馬車がいつもと違うことに気付く。

「馬を代えたのか？　ずいぶん力が有りそうで良い馬じゃないか、これも売らないか？　個人的に」

冗談と言うよりも半ば本気に聞こえ、マシュウは慌てた。

「いや、この馬はだめだ、借り物なんだよ」
「借り物？　自分のはどうした」
「……まぁ、色々と」

デレクの前では饒舌なマシュウだが、この時ばかりは口をつぐんだ。商売相手には、言わないほうが良いことも多々あるものだ。

「どこかの女にでも騙されて盗まれたか」

軽く笑いながらの冗談にも、ただ苦笑いを返す。己の魅力にものを言わせてカモにしようとしている相手に、見るからに行商用の、実用的なだけの馬車なんかをねだる女がいるのだろうか、と疑問に思いながら。

「女と言えば、マシュウ、お前そろそろいい相手は見つかったか」
「なんだよそれ、突然？」
「お前のことだから、まだ初恋のアンガラードさんを忘れられてないんじゃないかと思ってな～」

にやにやしながらのデレクの思わぬ科白に、派手に転びそうになってしまう。

「馬鹿！　違う、そんなんじゃないって。アンガラードは俺の恩師で、尊敬してる。それだけだ」
「まーたまたそんな嘘を」

取引に必要な書類などを袋から取り出すために御者台に登っていたマシュウは、高い位置から軽くデレクの肩を小突こうと、拳を伸ばす。それを余裕の動作でかわし、デレクは軽々と荷を広い肩に乗せる。

「そうそう、風の噂で聞いたんだけどな、お前の兄弟子……バートレットつったっけか？　どこかの大地主の令嬢を上手いこと射止めて、今や大金持ちらしいぜ。なんとも羨ましい話だよなぁ。お前にもそれくらいの甲斐性があればいいのにな……って、おっと」

二度目の拳もひょいと身軽に避け、デレクは笑いながら荷を建物

へと運んで行った。
その後ろ姿を眺めるマシュウの脳裏に、かつて師と崇めた人物と、共に学んだ兄弟子が鮮明に浮かぶ。
「じゃあバートレットは今頃きっと、幸せにやってるんだろうな。いつか会えたら、おめでとうを言わないと」
自分よりも八つ年上だった兄弟子は、師である女性、アンガラードとほぼ同い年であった。師についた当時、十を一つ越えただけだったマシュウには、二人は随分と大人に見えたものだ。
逞しく男らしい容貌だが、どこかおどけたような愛嬌のある瞳を持つバートレット。
実際の年齢よりも大人びて美しく、しかし、気風のいい男勝りな性格だったアンガラード。
「……師匠は、俺を赦してくれないかもしれない」
そんなマシュウの独白をその場で唯一耳にしたのは、黒毛の馬だけだった。

……（2）

取引の成果は上々だった。必要な手続きを慣れた様子で迅速に済ませると、リウノの品の代わりに仕入れた調味料を載せた馬車を並足で走らせた。

いつ次の街に移動するかも分からない上に、馬車のわずかな場所を借りている以上、仕入れられる品は「かさばらなくて日持ちのする物」に限られてしまうが、わがままは言えない。

真っ直ぐ約束の場に行くべきか迷ったが、この広い街だ、すぐには相手も戻りはしないだろうと判断し、品定めも兼ねて大通りの店をいくつか回った。

その後は、特別な用事があるわけではなかったが、港を通った時にふと手綱を強く引いていた。馬車がゆるりと止まる。

そこには、大小様々な船が停泊していた。その中でも一番大きな船を見上げる。数人の船乗り達が高いマストに登り、たたまれた白い帆を張る準備をしている。出航が間近なようだ。

それをぼんやりと眺めながらも、マシュウの意識はそこにはなかった。先程のデレクとの何気ない会話から、つい考え事ばかりをしてしまう。

遠くに残してきた故郷、師と兄弟子、これまで巡った街、そして現在の同行者達。

「！」

突然、それまで大人しかったネグロが首を大きく振った。耳を神経質に立て、一点を気にしている。勝手に歩き出しそうな様子に、我に返り、とっさに姿勢を正して手綱を握り直した。

「おい、どうしたんだよ、腹でも減ったか？」

腰が御者台から半分浮くほど強い力で手綱を引かれる。何か馬が好きな食べ物でも落ちているのかと、その視線の先を追うと。

「あれ、マディカ？」

その場からははっきりと確信は持てなかったが、それらしき少女の姿があった。手綱を緩め、ネグロの思うようにさせてやると、軽快な早足で進んだ。

「！　ネグロ」

背後から甘える仕草で鼻先を押し当てられ、少女は愛馬の名を呼んだ。それから優しくその額を撫でる。

「マシュウ、もうお仕事は終わったの？」

「うん、おかげで良い取引ができたよ。マディカこそ一人でどうしたんだ？　こんな大きな街を一人で歩くなんて」

「危険？」

マシュウの言わんとしていることを鋭く察して、マディカは先にその続きを継いだ。そして、きれいな声で朗らかに笑う。

「大丈夫よ、私だってもう子供じゃないもの。皆にずっと守られてなくても平気。私達も良さそうな場所を見つけたの。でも、これだけ広いから他も一応見て来るって、スライがね」

ネグロを撫でていた手を止めて、目前に広がる大海原へ身体を向

ける。その拍子に、質素なリネンの服の上に唯一飾りらしく巻きつけた青いショールが、緩やかな曲線を描いて腰の辺りに踊った。
そんなさり気ない仕草ですら優雅に見え、マシュウの脳裏に、初めて彼女を見た時の光景が浮かんだ。

「……それでその間は、街の中を見て来ていいって言ってくれたの。だから私はここに来て。これって、海って言うんでしょう？　初めて見るわ。大きな湖みたいね」
「湖よりも、もっと広くて深いよ。それにしょっぱくて飲めない」
馬車から降りマディカの隣に並び、同じく遠くを見やる。なんて気のきかない間の抜けた答えだろう、と思いながら。

「涙みたいに？　飲めない水なんて、不思議だわ」
それでも感心したように彼女は声を上げた。まるで目に映るもの全てが珍しいとでもいった様子だ。

「マディカってほんといつも楽しそうだなぁ」
眉根を軽く寄せて、口元を緩め、からかう口調でマシュウ。

「それって褒めてるの？」
「褒めてるよ」
「ん、それならいいわ」
それに対してマディカも冗談めかして笑い、風に吹かれた長い小麦色の髪を押さえる。

「だって、マシュウは楽しいと思わない？　色々な新しいことを知

るって。新しい街、新しい景色、新しい音、新しい服、新しい食べ物、新しい人」
「うーん、そういうふうに考えたことってなかったかも。何も感じないって言うか、それが当たり前みたいな」

その時、近くで大きな掛け声や慌しい物音が始まった。先程の船がいよいよ碇を上げたらしい。太く巨大な碇綱が巻かれ、しぶきを散らしながら唸る。
甲板上を荒々しく駆け巡る船乗り達の姿。縄や威勢のいい声が飛び交う。巨大な帆に悠々と風を孕ませ、ゆっくりと岸を離れて行く。
「この大きな乗り物は、海の上を走るのね。海の果てってどうなってるの？」
「それはまだ誰にもわかってないんだ。噂じゃ、ずっと行くと世界の端は巨大な滝になってて落ちてしまうとか、光に飲み込まれてどこかへ忽然と消えてしまうとか、色々あるけど」

そこでマディカが驚いて目を丸くしたので、簡単に付け足した。
「この船は民間の定期船みたいだし、たぶん陸地からそんなに離れない所を行くと思うよ。だから心配しないで平気だって」
「そう、良かった」

心底安心したように胸に手を置く。表情が驚くほどよく変わる少女だ。こんなにたくさんの、それでいて一風変わった質問をされたのは初めてだ。
返答に戸惑うこともたまにはあるものの、不思議と不快ではなかった。マディカの目を通して、自分までもが新たな視線で世界を見ている気がしてしまう。

そしてその目から見た自分は、一体どのように――。

「そろそろ戻ったほうがいいかもな。随分と日が移動した」

マシュウの言葉に、マディカは素直に頷いた。その青い瞳に、同じく青い風景を名残惜しそうに映したままだった。

……（3）

海を見渡すことができる街の高台、円形の大きな広場。

そこに、軽快な音楽が響き渡る。それにぴたりと呼吸を合わせ、一瞬たりとも音とはずれることもなく、少女が裸足でステップを踏む。

マシュウにとって、彼らのこの姿を見るのは二度目だった。やはりカドスの宿での演奏よりも完成度は高いような気がするが、彼らにとって音楽はこうして人に一方的に聴かせるのではなく、皆で楽しむものという意識があるらしい。

――それと言うのも。

「はい、そこの兄さん！」

とうとう来た、とマシュウの全身を緊張が駆け抜ける。思わずその場で背後を振り返り、脱兎の如く走り出したくなる衝動をどうにか堪える。

これもみな全て、あの土地を見つけるためなのだから、と自分に強く言い聞かせて。

「次の一曲、簡単な演奏でぜひ参加を」

ヴィエントを片手にスライがマシュウを選んだ。否、選ぶ振りをしたのだ。

今日もかなりの人数が集まっている。その視線が一気に自分に集中し、突き刺さるようで痛い。

――それはつまり、こういうことだった。

未だマシュウは彼らに混ざってきちんと演奏について行くことは不可能で。それならば、観客の一人として、一曲だけでも参加するというものだ。

その状況であれば例え上手くできなかったとしても不自然ではない。それに思わぬところで素人が飛び入り参加することで、観客を驚かせることもできる。

更にはマシュウ本人にとっても、初めから完全に演奏側として立つよりも多少は気が楽なのではないか、という話ではあったのだが。

「いやぁ……、その、こう見えても忙しい身なので」

熱いほどの周囲の期待に満ちた眼差しに、わけのわからぬ受け答えをしてしまう。

「そこを何とか、お手間は取らせません」

観客の目は、マシュウからスライ、そしてまたマシュウへとせわしなく移動した。やがて盛大な拍手に加え指笛まで聞こえ、幾本もの人々の腕によって前面に押し出されてしまった。

マディカがその前に立ち、微笑む。そして太鼓、トルエノを打つ木製の太いスティックを一本だけ手渡した。頑張って、と、唇が形だけ成して囁く。

「では今日は太鼓――トルエノをお願いしましょう」

マシュウのほうではなく、観客に向かってスライが芝居の一幕さながらに両手を大きく広げて見せる。

その間、選ばれた一人は、カーチスにリズムの指導を手短に受けていた。もちろん事前に多少の練習はしてあったが、今は今で、また真剣に聞いていた。何度指導を受けようとも、不安が消え去ることはない。

その指導とは、ずっと一定の間隔で打つという説明としてはごく単純なものだった。しかし曲のリズムを司るのがこのトルエノの役目なだけに、実際はそう簡単なものではない。それが乱れれば結果として、全てが乱れることになってしまう。

あまりに緊張した面持ちだったのか、ふと、カーチスが吹き出した。

「……顔。そんなにガチガチに緊張しないで、楽しむつもりで。大丈夫、できるから」

めったに笑わないカーチスに笑われ、一瞬あっけに取られたマシュウだったが、そのおかげでわずかながら肩の力が抜けた。そんなに変な顔をしていたのかと、自分でもおかしくなり頬を緩めた。

そしてありがとう、とカーチスに言う。

そのカーチスがマシュウの傍を離れ、もう一本のヴィエントを手に取る。それを確認してからスライとザカリアが準備を整え、マシュウに目をやる。

一・二・三、と視線で合図を送り。

演奏が始まった――。

「あ、あ、あ、ちょっと待ッ！」

始まった、と思ったその矢先。マシュウが声を上げた。どうやら、

入るタイミングを掴み損ねたらしい。

――失敗だ。

慌てて大きく手を振るマシュウにすぐ気付き、ザカリアが弦を掻き鳴らす手を止めて、スライとカーチスに一度やり直しをするよう促す。演奏を中断されたにも関わらず、その表情には気分を害した様子はなかった。

周りを幾重にも取り囲んでいる観客からも穏やかな笑い声、そして激励の掛け声が飛ぶ。

演奏としては失敗だったが、観客の気持ちを掴む方法としては成功だった。マシュウが意図してそれをやったというわけではないにしろ。

「どうやら緊張されてるようですな。では、もう一度」

マシュウにとっては意味深な笑みを目に如実に表したスライが、再び合図を送る。

一・二・三……！

二度目は成功だった。

さほど長い曲ではなかったが、最後までやり通して深く安堵の息を吐いた時には、不思議な爽快感があった。身体の重みを失った感覚に近いかもしれない。

スライがマシュウのほうに手をかざし、何かを観客に向かって言うと、惜しみない盛大な拍手が起こった。

これでもう出番は終わりだ。ほっと胸を撫で下ろし、人々の輪の

中に戻る。観客側から旅芸人達に目をやると、皆一様に微笑んだ。観客の一人に向ける愛想としてのものではなく、仲間に向ける本心からの笑顔。カーチスなどは、そっとマシュウに頷いて見せたほどだ。良い出来だった、という意味だろう。

そのまま最前列に留まっているのも何となく気恥ずかしく、後列へと身を滑り込ませた。遠くまでよく通るスライの掛け声に最後の演奏が始まり、マディカが紅蓮の炎を思わせる布を空に翳した時。

「ここで何してる！？」

人垣を押し退けて二つに割り、三人の大柄な男が大股で無遠慮に前に進み出た。突き飛ばされた子供が尻餅をつき、泣き声を上げるのにもお構いなしだ。足元に投げ出されたその小さな女の子を、マディカが助けようと身を屈める。

マシュウには、この突然現れた不躾な客がどういう輩（やから）かすぐ想像が付いた。このような大きな街には必ずいるであろう、暴力にものを言わせて、我が物顔でやりたい放題する低俗な者達。

「誰がここで商売をしていいって言った！」

その中でも特に柄の悪そうな男が吼えた。

こういった場合、だいたいは「ここは自分達の場だ」などと言って、法外な代金を請求してくるのが常だ。

あまりに使い古された手で、あまりに陳腐だとしか言いようがない、とマシュウは心底うんざりし渋面になる。ならば土地所有の証明書でも何でも構わない、一度でもいいから証拠を見せてみろ、と、その場で悪態をつく。そのような物が存在するのであれば、の話だが。

しかしどんなに古風なやり口で陳腐だったとしても、それを上手くかわすのは至難の業であるのもまた事実であって。

「誰にも了解は取っていないが、問題でもあるのか？　もしそうなら、すぐに了解を取るようにしよう」

突然の騒ぎに臆することもなく、落ち着いた口調でスライが対処している。相手の目をしっかりと見据えて。

どうなるのか、と息を詰めて見守る観客達。

「ほーう、随分と物分かりが良くて助かるぜぇ？　了解は俺達に取れ。そしてそれには金貨五百を寄越すんだな」

――金貨五百！

それだけあれば、贅沢さえしなければ数年は食うには困らない生活ができるだろう金額だ。ぼったくりにも程がある。

「それは相当な大金だな。生憎と持ち合わせがないんでね。仕方ない、この場は諦めよう」

スライが肩を竦め、立ち去ろうと仲間を促す。

「おい、今までの分をちゃんと払ってからじゃねぇと、どこへも行かせねぇ」

何が何でも言い掛かりを付けて、絞れるだけ絞り取ろうという魂胆なのもお約束か。

「だが、最後までやっていなくて観客から代金も貰っていない。そしてそのまま立ち去ると言っている。それなら商売したということにはならないだろう？」

スライの正当な言い分にはもちろん耳など貸さない。金を払えの一点張りだ。金を払え、そんな大金は持っていない、と、無意味な言い合いがしばし続き平行線を辿る。

「金がないなら、代わりに何か置いて行けよ。何ならこの娘でも構わないぜ、ちっとまだガキだが、いい金蔓になりそうだ」

どこまでもマシュウの予想通りに、男の一人が屈んでいるマディカに手を伸ばし、髪を一すじ乱暴に引っ張り上げた。少女は痛みに思わず悲鳴を上げる。

「……んのやろ！」

かっとなったマシュウが人を掻き分けて進むよりも、スライが止めるよりも早く。

「マディカに触るな」

それまでスライと同じく冷静だったザカリアが素早く男の手を払い、二人の間に立った。その声は静かだが、底知れぬ怒りを含んでいる。

穏便には済まされなさそうな成り行きに、周りを取り囲んでいた群衆は一人また一人と後退りし、そしてそれにつられて全員が一斉に逃げ出した。

……（4）

押し寄せる人々の波にマシュウは流されそうになった。それに抗い、一人、前へ進もうともがく。

視界も遮られ、様子が全く分からない。怒号が聞こえたような気がした。どう考えても良い方向には進んでいなことは確かだ。

やっとで人の群れの中から騒ぎの中心へと転がり込む。

肩で息をしながら見渡すと、スライが一番体格の大きな男と対峙していた。相手の手には鈍く光る刃。その背後で、スライに背中を預けたカーチスがもう一人と応戦しているが、防戦一方のようだ。

素早く視線を左右に走らせると、幌馬車の後方にあと二人の姿を見つけた。ザカリアがマディカを馬車の中へと押し上げ、背後に立った三人目の男が太い腕を振り上げているという、まさにその瞬間だった。それは先程マディカに絡んだ男だ。

「危ない！」

咄嗟に叫ぶ。その声が届いたのか、ザカリアは踵を返し、持ち前の身軽さでそれを軽々と避けた。したたかに拳を馬車に打ちつけた男は呻き声を上げる。

「くそったれがぁ！」

どうやら相当頭に血が上っているらしい、自分の後方へと回った標的を口汚く罵る。

旅芸人達に比べ力は相当なものに見える男達だったが、動きはかなりぞんざいで隙だらけだ。それは喧嘩沙汰などとはほぼ無縁の商

売のマシュウから見ても明らかだった。

しかしそれでもいつまでも防ぎきれるものではないだろう。自分にも扱えそうな物は何かないか、と辺りを窺う。

蹴散らされて転がる楽器類、踏み荒らされて汚れた踊り用の布、広場の端にある幌馬車に荷馬車。

その存在に気付き、一瞬の躊躇もなく荷馬車へと駆け寄って飛び乗る。間髪入れずに先程仕入れた調味料の箱を、蓋を開けることすらもどかしく石畳に叩きつける。ぎっしりと中身の詰まった灰色の小袋が、辺り一面に散らばった。口を留める紐が緩み、中身が零れ落ちている一つを雑に掴み。

「ザカリア！　目ぇ閉じろ！」

執念深く彼を追い詰めていた男の顔面を目掛けて、力いっぱい投げつける。運良く命中したその袋から大量に溢れ出たのは、焼けるように真っ赤な粉だ。しばしの後、喉も破れんばかりに発した声と共に、男は両目を押さえて悶え苦しむ。

その隙にザカリアは動きを止めることなく、カーチスの元へと走っていた。対峙している相手に近い体格のスライは、上手く刃物を避けつつも時には素手で反撃を試みている。しかし、その背後にほぼ隠れてしまうカーチスはどう見ても暴力沙汰には向いていない。繰り出される拳を交差した腕で全て避けきれているかどうかも不安なほどだ。

憂さ晴らしをするには打って付けの相手を余裕の動作でいたぶっていた男は、背後に迫ったもう一人には全く気付かなかったらしい。

その気配に振り返った時には、全身の重みをかけた肘が鳩尾に食い込んでいた。いくらザカリアが相手よりも背も低く細身だったとしても、これには相当の衝撃があるはずだった。予想外の出来事によろめいた隙に、カーチスが身を低くして足払いをかけると、あっけないほどあっさりと頭から倒れ込む。受け身を取る暇もなく、そのまま意識を失った。

簡単に捻り上げられると思っていた相手に二人も倒され、残りの一人が逆上する。

「てめぇら、よくも！」

最早、金を奪うことよりも、彼らを打ちのめすほうに目的を変えたらしい。怒りに燃えた形相で、標的を変えて襲い掛かる。突然現れ、旅芸人達に肩入れした赤毛の男へと。

「逃げろ、マシュウ！」

それを抑えきれずにスライが叫ぶ。一番遠く離れていた自分へと向かってくるとは予想していなかったマシュウは、一呼吸分、動くのが遅かった。

身を硬くし息を詰まらせる。目前に迫り来る刃の冷たい光に、背筋が凍りついた刹那。

「だめ！」

聞きなれた少女の声が頭上から降ってきたかと思うと、マシュウと男の間に巨大な赤い影が割り込んだ。後ろ足で石畳を激しく踏み鳴らし、いななく。

それは、いつも引いている幌馬車から解放されたロホだった。

その逞しい首にしがみついているのはマディカだ。力を籠めた細い腕に、踊りの衣装の白いレースが跳ねる。彼女が手綱を引き絞る度に、ロホは何度も前足を宙に蹴り上げ、長いたてがみを振り乱し、苛立たしげな甲高い叫びを繰り返す。

ただでさえ大きく体格の良い馬だ、それが後方の二本足で立ち上がると相当な威圧感がある。その硬い蹄に踏み倒されれば、大の大人でも骨の一本や二本では済まないであろうことは簡単に窺える。

男が怯んだ間を逃さず、追い付いたスライがその手のナイフを蹴り飛ばした。痺れる腕を庇い、辺りに一瞥くれて、己の不利な立場に気付き。

「畜生！」

短く吐き棄て、そのまま身を翻して逃げ出した。

「おい！　仲間を置いて行くな！」

スライの声が後を追う。と、呻き声がしたかと思うと、気を失っていた男がよろめきながらも立ち上がった。その場にリーダー格の者がいないと感付くやいなや、目を押さえて喚いている仲間の肩に腕をかけ、慌てて退散して行った。

「は……、なんとかなったみたい、だな」

一気に全身の力が抜け、マシュウはその場に座り込む。まさか旅芸人達が勝るとは思ってもいなかった。かと言って、負ける結果などは想像したくもなかったが。

怪我を心配されたカーチスも、腕に多少の痣を負ったものの無事

のようだ。

「あーもう、酷い有様だなこりゃ」

呆れた様子でスライが溜息を洩らす。

辺りには、彼らにとっての貴重品が散らばっていた。中でも一番被害が大きいのは、革の緩んだトルエノ、弦の切れたオラだろう。

そして、マシュウがばら撒いた赤い粉。石畳に大きく広がり、鮮やかな模様を描いている。

「マシュウもよくやったな。しかしあれは何なんだ？」

スライが顎でそれを示す。

「ああ、あれね。さっき仕入れた、激辛調味料。目に入るとどうなるかは、さっき見ての通りだ」

無傷だった袋を拾い、中身を差し出す。それを一口舐めたスライは鼻に皺を寄せ、なるほどな、と、あまりの辛さに苦笑いした。

ふと言い争うような会話が聞こえた。反射的に振り返ると、ザカリアが何事かをマディカに強く言い含め、それをカーチスが宥めている最中だった。

「……怪我はなかったわ」

「今回は運が良かった。けど、もしもってことだってある！　それなのにお前は」

「皆が危ないかもしれないのに、一人だけ安全に隠れてるなんてできない！　ザカリアだってそんなことはできないでしょう！？」

「えーと、そのぅ、皆揃って無事だったんだから……喧嘩はそれくらいに」

聞こえてくる内容から、馬車に避難していたはずのマディカがロホに乗り、騒ぎの渦中に飛び出したことを揉めているらしいことが分かった。

やれやれと肩を竦めたスライがカーチス側に付く。

「まぁまぁ、ザカリアそう怒るな、マディカも落ち着いてな。ザカリア、マディカだってもう常に守られなきゃ何もできない子供じゃない。少しは意志を尊重してやれ」

「しかし！」

「いいか、お前にとってマディカや仲間が大切なように、マディカにとってもお前や仲間が大切なんだよ。そこは分かってやれるよな？　それからマディカもな、行動するなとは言わない、だが、まずは自分の身の安全を考えて無茶は控えること。誰かを守りたければ、なおさらだ。これから助けに向かおうって時に自分が怪我して動けなくなったらどうなる？　下手したら怪我したお前を庇って、二人揃って共倒れすることだってあるかもしれない」

説得力のあるスライの言葉に、二人はお互いに視線を逸らし、口をつぐむ。意固地な二人を順に見比べ、スライはわざと低い声音でぼそりと呟いた。

「仲直りしなけりゃ夕飯抜きか、暗い幌馬車に一晩中閉じ込めっちまうぞ？」

「ス、スライ！　またそんなことを」

まるで幼子扱いだ。明らかなからかいの意図を持つその科白に、ザカリアは渋面になり、マディカは唇を引き結んで頬を赤くした。

そんな二人の肩を同時に、それも少々強めに二度叩いてから、スライはその場を離れた。カーチスもそれに倣う。

残されたザカリアとマディカは、ぎこちなくお互いをそろりと見やった。

「……マディカの気持ちも考えないで、悪かった」

「いいの。私も、もう無茶はしないわ。ごめんなさい」

瞬く間に巧みにその場を収めてしまったスライを、マシュウは驚きの表情で迎えた。

「こんなことは日常茶飯事だ。ザカリアはいつもは頼れる奴なんだが、こういうこととなると冷静でいられなくてな」

「俺がちゃんと逃げてればマディカが飛び出すこともなかったかもしれないのに……」

「マシュウのせいじゃない、気にするな」

弦の切れたオラを拾い上げたザカリアと、ふと目が合った。先程の失態を見られていたのを恥ずかしく思ったのか、一瞬、困惑した表情を浮かべる。そのまま背を向けるものと思ったのだが、予想に反して早足でこちらへと向かって来た。

もしかしたら責められるかもしれない、と、マシュウは身構える。しかし。

「大人気ないところを見せたな……。マシュウにも助けられた。ありがとう、礼を言う」

掛けられたのは、感謝の言葉だった。

……（5）

辺りに散乱した物を掻き集めて馬車に載せた頃には、街はすっかり夕焼けに染まっていた。商売道具を破損し、新たな場で再び公演をうつことも叶わず、一行は宿に向かった。

数日前に泊まったカドスのような規模の町だったとしたら、あのような騒動を起こしてしまっては、一晩留まることすらできなかっただろう。

しかしここアトレスほどの規模の街では、多少の騒ぎなどそう珍しいことでもないらしい。特にこれと言って人々の話題に上ることもなく、そのため宿も簡単に見つかった。

部屋に入ると、すぐに彼らは楽器の痛み具合を調べ始めた。ランプの明りに翳し、丹念に目を通す。一通り済んで、ザカリアが安堵の溜息をついた。

「オラは弦を張り直せばいいだけだ。トルエノは？」

「大丈夫、こっちもこれならすぐ元に戻せる」

床に胡坐（あぐら）をかいた体勢で樽型のそれを手にしたカーチスも、安心顔で頷いた。丈夫な木を刳り貫いて作られているヴィエントは、全くの無傷であった。

「じゃあ、修繕道具を馬車から取って来よう」

スライが寄りかかっていた壁から身を離す。

「俺も手伝うよ」

自分にはできることもなく、様子を見守っていたマシュウもスライに続いた。マディカも名乗り出たが、カーチスが誰かに手を借りたいと言ったので、その場に残った。

持ち運び用のランプを一つ掲げて、薄暗い裏庭の幌馬車を目指す。そこには何台か馬車が並んでいた。全て宿に泊まっている客の物だ。暗闇の中、小さな明りに浮かび上がる見慣れた幌馬車。

そこに近付いた時。

「！」

黒い人影がその中から飛び出した。その拍子に勢い余ってマシュウとぶつかる。予想外の唐突な出来事に相手をかわすこともできず、マシュウは隣の馬車に背中を勢いよく打ちつけた。

その何者かは、何も言わずにその場を走り去った。顔を確認する暇も与えずに。

「痛っつ～、何だよ、今のは！？」

「自分の馬車と間違えたにしては焦ってたようだな。まさか」

連れの安否を確認してからスライは手の中の明りを馬車に向ける。すると、見るも無残な有様になった内部が眼前に晒された。

木箱は壊され破片が当たりに散らばり、わずかばかりの生活必需品や何もかもが一緒になって床一面に山となっている。足の踏み場すらない状況だった。

「くそっ、やられた！」

スライが悔しそうにギリ、と歯軋りする。

「まさか、昼間の奴らか！？」

マシュウの脳裏にすぐさま浮かんだのは、三人の大男達。あの仕返しに、後を付けて来ていたのかもしれない。

「分からんな……物盗りかもしれない。とにかく、失くなった物がないか確認しないと。マシュウ、できたらもういくつか明りを借りてきてくれないか？」

「もちろん。待ってろ、すぐに戻る」

飛ぶように戻り、宿の主人にランプを更に余分に貸して欲しいと頼む。自分の管轄下での出来事に主人は驚くことも慌てる様子もなく、ゆっくりとした動作で芯に火を灯す。あまりに緩慢な動作に内心イライラしつつも、礼を言い、渡されたランプ二つを引っ掴んで走った。物盗りなども、ちょっとした騒ぎ同様よくあることなのかもしれない。

馬車に戻り、荒らされた内部を片付け始める。全てが床に投げ出されてはいるが、例によって貴重品は運び出してあったために、最悪の事態は免れたらしい。細かな物を一つずつ拾い、定位置に戻していく。

その作業途中、あまりに戻りが遅い二人の様子を見に来たザカリアも加わった。

「これは……何があったんだ！？」

その有様を見て、愕然とする。それが正常な反応だろう、と先程の主人の様子を目の当たりにしていたマシュウは思った。

全て片付け終えた結果、失くなった物は皆無だということが判明

した。
部屋にひとまず戻りマディカとカーチスにもそのことを告げると、マディカは首を傾げた。
「じゃあ、やっぱりお金が目当てだったのかしら？」
「うーん、何も無くなってなかったところを見るとそうかもしれない」
確信は持てないものの、他に思いつくこともなくマシュウは頷く。
「でももし昼間の奴らだったとしたら、また来たりしてな」
マシュウの心配に、スライはふむ、と顎に手をかけて思案する。
「念のため今日は俺が馬車で寝ることにしよう。例え何も取られなくても、またああ色々と引っ掻き回されるのも困りものだ」
真剣な面持ちで手の中の弦楽器を見据えながら深く考え事をしていたザカリアは、その一言に弾かれたように顔を上げた。
「スライ、一人では何かあった時に困るだろう。わたしも行こう」
それからカーチスにオラを手渡す。
「これを頼む」
カーチスは一言短く返事をし、それを受け取った。切れた弦を引っ張り、様子を窺う。
「お前達は部屋の鍵を忘れるんじゃないぞ」

それだけ言い残して二人は出て行き、マディカも自分の部屋へと一人戻って行った。

マシュウは開け放された両開きの窓を閉めようと、扉に手を掛けた。波が浜へと打ち寄せる心地よい響きが、湿った夜風に乗って届く。

ふと、遥か彼方に目をやった。手を伸ばせば触れられそうなほど深い闇の中を、船に灯された明りがいくつも蛍火の如く漂っていた。

第3章　神の家　……　（1）

車輪の音がする。身体が振動に揺れる。馬車の上だ。

いつの間に出発したのだろうと目を開くと、そこには揃いの小麦色の髪を持つ四人はいなかった。自分を見下ろしていたのは、懐かしい顔だった。

美しい曲線を描いた頬を縁取る、波打つ漆黒の髪。澄んだ翡翠の瞳。柔らかく微笑む、形の良い唇。

アンガラード。

「マシュウってば、寝惚けてるの？」

慌てて身を起こしたマシュウを、目を細めて笑う。

「マシュウは本当に朝が苦手だよなぁ」

同じく懐かしい声に振り返ると、馬車を操っているのは兄弟子のバートレットだった。

均衡の取れた逞しい体に、どこか人を惹き付ける深い眼差し。

独り立ちを決意して別れた四年前と全く変わらない二人。気付くと、自分も十五の頃の姿に戻っている。

「これからどこへ向かうんですか？」

マシュウが問うと、アンガラードがそれに答える。

「シクアトロよ。マシュウも行くでしょ？」
「……いいえ」
次の瞬間にはマシュウは一人馬車を降り、離れた位置に立ってそれを見送っていた。遠くに去って行く懐かしい姿。温かさと寂しさと不安、そして罪悪感。全ての感情が入り混じり、全身に渦巻く。
「俺は、あの土地を探しに行きます……ごめんなさい」
刹那、辺りに広がったのは、眩い光に包まれた黄金色の溢れる大地。目を瞠る。
しかしそれは触れる前に掻き消え、何も掴めなかった手の先にあるのは、先程よりも遠ざかった馬車だった。
アンガラードがこちらを振り向いた。その口が、今や青年になったマシュウに何かを訴えて動く。何度も、何度も、何度も。
しかし、それは届かない――。

＊＊＊＊＊

「……ウ、マシュウ、起きて」
呼びかけに再び目を開けると、日の光に煌く髪が流れ落ちた。
「んぁ、あ、あれ？」
そこにいたのは、黒髪の女性ではなかった。心配そうに眉根を寄せ、屈みこんでいたのはマディカだ。

「大丈夫？　ずっと、ごめんなさいってうなされてたわ」
「え……っと、そうか、夢」
先程の懐かしい二人は現実ではなかったことに気付く。身を起こして見回すと、辺りはすっかり明るくなり、隣のベッドにはカーチスの姿はなかった。
「もう皆、準備が済んでるの。カーチスもスライもマシュウを起こそうとしたらしいんだけど……きっと疲れてたのね。昨日は色々あったから」
「え！？　そんなに寝坊したのか？」
慌てて毛布を跳ね除け、蹴躓きながら靴を履く。
「でね、昨日の夜のこともあるし、もうこの街を出ようってことになったのよ」
慌しいマシュウの支度に手を貸しながら、マディカが先程の話し合いの報告をする。
「ここの主人に訊いたら、最寄はシクアトロってところなんですって。けどその街は教会の総本山だっていうから、そこでの演奏はできないかもしれないわ。それでも更に先のところへ行くには、シクアトロを通過するのが一番近道らしいの」
シクアトロ。
偶然ではあるが、夢で聞いたばかりの名に一瞬動作を止める。しかし、だからと言って何かがあるというわけではないだろうと、頭

から先程の夢を追いやった。
そこでふと疑問に思い、深い意味も無くそのことを口にした。
「なぁ、そう言えばマディカ達はどこを目指してるんだ？」
今度はマディカが動きを止める。
「どこって……」
ぎゅっと手に力を籠め、膝の上でスカートを固く握り締めている。手の甲が普段よりも更に白くなっている。
「決まってないわ……。ただ私達は、人を捜してるだけ」
そこで勢いよく扉が開き、スライが様子を見に入ってきた。必然と、会話もそこで途切れてしまった。
両腕でなくとも抱えられる程のわずかな荷を持ち、再び馬車に乗り込む。昨夜は二度目の襲来は無かったらしい。やはり単なる物盗りと考えるのが妥当なのかもしれない。
遥か後方に遠く離れて行く港街。そこでマシュウは四年前に師であるアンガラードとバートレットの元を独り離れたことを思い出す。
いつか機会があれば、二人をまた捜したいと考えた。一人は、話に聞いた結婚の祝いを言うために、そして一人は、頭を下げるために。
マディカ達が捜しているという人物も、過去に彼らと深い縁があった者なのかもしれない。自分と師と兄弟子のように。それならば、早く見つかるといいと心から願った。

……（2）

荘厳な鐘の音が響き渡る。

シクアトロは、全体としてはとても小さな町だった。徒歩でぐるりと一周したとしても、半日もかからないだろう。

しかし他と違う顕著な特色は、町全体が一つの巨大な教会である、ということだ。

雲ひとつ無い青空が、中央の真っ白い、神の住む建物の美しさを際立たせている。その周囲の所々に、神に関わる聖人達の像が立っている。

さすがに聖なる領域に堂々と店を構えることはできないようだが、建物まで伸びた広い道の左右には簡単な台を商品棚代わりにした露店がいくつも並んでいた。

売っている品々は、小さな神の像や首に掛けられるように細工された護符、有り難い言葉を集めた書、それに小腹を満たす簡単な食べ物類などだ。

町には遥か遠くから参拝に来た巡礼者や旅の途中に立ち寄った者が集まり、活気に満ちている。しかしそれは賑やかな街の喧騒とは違い、神聖な空気に包まれた厳粛なさざめきだ。

ここを訪れたそれぞれが様々な願いをし、そして満ち足りた心を抱いて去って行くのだろう。

「さて」

その町の入口に馬車を一度停め、スライが後方の連れを振り返っ

た。

「せっかくだから、見物でもして来るか？」

相変わらず口調も表情も愉(たの)しそうだ。

「見物って、聖地を観光ってのも何か違うような」

苦笑いしながらマシュウ。

「俺達には俺達の神ってのがいてな。だからと言って、それ以外を認めないわけじゃない。もちろん他の神にだって敬意は示すさ。しかし以前そのことを口にしたら、異教徒だと罵倒されちまったこともあるが……」

そう言えば、ザカリアもそのようなことを言っていた、とマシュウは思い出す。

「だが、町を見て周るくらいは楽しみとしても罰は当たらないだろう？　ここの神だって、それくらい笑って許してくれると思うんだがなぁ」

通常であれば、見た目は穏やかなれど恐れ多い敬うべき偉大な神、と人々は認識しているのに、スライは神のことを身近な人物のように語る。それが彼らにとっての神という存在の有り方なのかもしれない。常に傍にいて、気軽に話しかけることができる温かな、かけがえのない存在。

神が笑って許す、と聞いてマシュウも思わず笑っていた。確かにそのようなことを敬虔な信者が耳にしたら嵐にも勝る勢いで説教す

ることだろう。その様子がありありと脳裏に浮かぶ。

「いいよ、行ってみようか」

馬車を降りて、マディカに手を貸そうと伸ばす。しかし。

「私はここに残るわ。何となく疲れてる感じがするの。それに、誰かが残って見ていたほうがいいでしょう？」

いつもなら新しい街に一番興味を持ちそうなマディカが、珍しく乗り気ではなかった。疲れているという言葉通り、心なしか顔色も悪く見える。

「でも一人じゃ、また何かあったら」

「わたしも残るから大丈夫だ」

高い位置からの声に振り返ると、荷馬車の御者台のザカリアだった。

「カーチスも一緒に三人で行って来るといい。ここで待ってる」

「そうか。じゃあマディカと馬車を頼んだぞ」

スライがそれに同意すると、マディカは心配させまいと口角を上げて笑顔を作って見せた。いつも快活な少女のその変化に、マシュウは心配になる。何か悪い病気にでもなったのではないか。

馬車を離れ、町の中へ足を踏み入れる。スライもカーチスも前方の建物に気を取られているが、マシュウは後方の様子が気になり歩きながらも肩越しに馬車を見やった。

マディカとザカリアが並んで幌馬車の御者台に座っていた。何やら話している。と、少女が頷き、隣の青年の肩に頭を預けた。二人の距離は今、とても近い。

その様子に急に胸を掴まれた感じがして、慌ててマシュウは目を背け、前方の二人を早足で追った。

マディカとザカリアが良い仲だとしても、おかしいことなど一つも無い。ずっと行動を共にしてきたのだろうし、マディカは明るく可愛らしい少女だ。ザカリアもなかなか、いや、かなり整った顔立ちをしている。公演中のあの二人に目を奪われる客も多いことだろう。お互いに惹かれるのも当然と言えば当然か。それにザカリアは誰よりも先に、あの時マディカを庇った。後に彼女を叱り付けたのも、それだけ大切に思っているからこその証ではないのか。

――何を馬鹿なことを考えてるんだ。

自分で自分を嘲笑する。今すべきこと、考えるべきことは他にある、と。

大股で歩いていた連れに追い付くと、二人は巨大な建物を見上げていた。ドーム型の屋根から太陽の鋭い光が射している。目が痛くなるほどの明るさに、手を翳して眩しさを和らげる。

「これは凄いな」

お世辞ではなく、率直な感想をスライが洩らす。

「神の家だ」

隣に立ち、マシュウが呟いた。

人の背丈の三倍はあろうかという扉は大きく開け放たれて、仄暗い内部がそこから一望できた。外観の通り、高い天井。鮮やかなステンドグラスから一直線に伸びる色が、石造りの床に幻想的な紋様を描く。

その中央、高い位置に安置された神像。人々を見下ろすその眼差しは、幼い子供を見守る親のそれに似た温かさに溢れている。

そしてその前方には、几帳面に乱れなく並べられた木製の長椅子。そこに座り、頭を垂れて長い祈りを捧げる者達。

外の通りとその建物内を、たくさんの人々が厳かな面持ちで行き来している。鮮やかな色彩のステンドグラスや神像よりも、彼らの多くが首から提げている物にカーチスは興味があるようだ。ずっとそれらを目で追っている。

大きさやデザインに多少の違いはあれど、見慣れない者からしたらそれは全て揃いの物に見えることだろう。そして偶然居合わせた人々が皆それを持っているということが、不思議な光景に映るのかもしれない。

その視線を追い、代わりにスライがマシュウに訊ねた。

「皆が首から提げている装飾品のような物、あれは何だ？」

「ああ、あれ？　護符って言ったらいいのかな。神の姿が描かれてるんだ。あれを身に着けていればいつでも神に守られているってことになる。でも、こういう場に祭られている神体そのものほど強い意味があるものでもないんだけどね。その証拠に、ほら」

そう言って、道の端に並ぶ露店を示す。

「至るところで手に入る。興味あるなら見てみるか？」

マシュウに促され、二人はそこに並ぶ品物に興味深げに見入った。その中の一つ、掌に楽に納まる大きさの物をカーチスは手に取った。楕円の薄い護符。一見、金細工と思わせる色合いだが、よく見るとそれよりも価値の低い素材の物だった。

マシュウはそれを覗き込みながらも、つい頭の中で値踏みしてしまう。これはどれ程の価値があるのだろうか、と。

こういった心の寄りべとなる品物をそう捉えるのは不躾だな、と思いつつも、身に染み付いた習慣はそう簡単に抜けるものでもない。

「それ、気に入ったのかい？」

あまりに熱心に品定めする彼らに、露店の年老いた女主人が、目元の皺を更に深くして微笑んだ。

「おや、あんた達は誰も護符を身に着けていないんだね？　あたしはいつでもこうやって着けてるよ」

そう言って、誇らしげに自分の胸元に骨の目立つ手をやる。

「恵まれていることに、毎日、こうやって神様のお膝元で仕事させて貰っているけどね。それでも、この護符を一日たりとも忘れたことなんかないんだよ。神様が常に一緒にいて下さるって、本当に安心だからねぇ。常に善良な行いをするように、見守って下さる」

心から満ち足りている様子が窺えるその言葉に、スライが穏やかに目を細める。

「……そうだな。そうであってほしい」

自分の半分も生きていないだろう相手の同意にすっかり気を良くしたのか、彼女は何度も満足げに頷いた。

「そうだ、良かったらそれ、あげるよ。誰も持っていないんじゃ、帰りの道中も心細いだろうからね。いいよ、お金はいらないよ。特別だよ」

女主人は、せめて少しでも払おうと硬貨を取り出したスライの手を軽く握って優しく押しやった。せっかくの好意を無駄にするのは失礼に値すると思ったのか、カーチスは素直に礼を述べる。それから、露店を離れた所でマシュウを呼び止めた。

「……これ」

差し出されたのは、先程の護符だ。

「僕が持っているよりも、きっとマシュウが持っているほうがいいから」

おそらく自分達の神のことを考えたのだろう。マシュウはそれをくみ取り、遠慮せずに受け取った。

「神、か」

手の中のそれをぼんやりと眺める。

「常に善良な行いをするように」

誰にも聞こえない声で女主人の言葉を反芻する。

「けど一方にとっては善良な行いでも、一方にとってはそうではなかったら？」

自分の行いのことを考え、疑問に思う。

ロセロと黄金郷――。

神は人に理不尽なことを求めたもんだな、と口の中で呟き、護符を肩に提げた袋に片手で捻じ込んだ。

再び鐘が頭上の空に鳴り響いた。

第４章　旅芸人達の理由…　（１）

最近は夢見が悪い、とマシュウは思う。

旅芸人達と行動を共にするようになり、幾日数えたことだろう。もうひと月ほどだろうか。

シクアトロを通過し、更にその先の町へ入って、そこで何度か公演をした。マシュウは、できる範囲で参加していた。時間を見つけては演奏の練習をすることも続けていた。

マディカもその後はいつもの様子を取り戻し、明るい笑顔で毎日踊りを披露している。その後、馬車を襲われたこともない。そして昨夜、こののどかな田舎町レセィスに着いたところだ。

一言で言えば、彼らの旅はしごく順調だった。

それなのに。

マシュウは一人、はぁ、と溜息をつく。宿の一階の食堂。朝も早く人影もまばらだ。あまりに早くから目が冴え、普段よりも早く起き出して来ていたのだ。

「……アンタ、ずいぶんげっそりしてるけど、大丈夫？」

頬杖をついて深々と息を吐き出した客に皿を出しながら訊ねたのは、宿の娘だ。娘、と言っても既に夫も子供もいる身で、てきぱきと仕事をこなす頼りがいのある女将といった貫禄が既に備わっている。長い前髪を全て後ろに流し、広い額を出しているのが印象的だ。

「ほら、これでも食べて元気出しなよ」

マシュウの前に、湯気の立つ手料理が並べられる。香草入りの豆のスープ、甘いジャムを添えた焼き立てのパン、野鳥の煮込み、大きく切り分けられた自家製のチーズ、摘みたてのイチジク。どれも朝から食べ切れる量ではない。

「うわ！　こんなに？」

「いい若いもんがこれくらいで何言ってるの！」

相手の憂鬱さえ払ってしまいそうな笑顔で叱責する。

「気分が沈んだ時はね、とにかく温かくて美味しい物をお腹いっぱいに詰め込むのが効果あるんだよ。そのうち嫌なことなんてどこか消えちまうからね」

軽く片目を瞑り奥へと引き下がった彼女の後ろ姿を見送る。それから改めて手元の料理に目を落とすと、香ばしい匂いが鼻孔をくすぐった。一口スープを掬って飲み込むと、みるみる食欲が湧いてくるのを感じる。なるほど、確かに食べ物の効果もあながち馬鹿にはできないかもしれない。続けて何度もスープを口に運ぶ。

ここ数日、立て続けに夢をよく見た。師と兄弟子といた頃の夢から始まり、捜し求めている黄金の地を見つけては掴めずに消える夢、そして生まれ育った故郷の夢。

全てが悪夢というわけではないかもしれない。けれど、それぞれが心に拭いきれない感情を残し、目覚めると落ち着かない気分になるのだった。

自分の選択に迷いはないはずだった。そのために今、行動している。しかし。

――ああ、また、しかしだ。

夢を見始めてからというもの、自問自答の繰り返しだ。自分の意志を何度も何度も確かめて、それが正しいと自分で自分に言い聞かせて。

旅芸人達と会うまではこんなことはなかったのに、と、半眼でパンに齧りつく。

何やら事情がありそうな同行者達だが、それはお互い様だった。気にならないと言えば嘘になる。

マディカが言っていた捜し人、そしてザカリアの欲するものは故郷であるということ。

この二つに接点があるようにも思えない。もし無理やりこじつけるとすれば、ザカリアの出身が仲間の三人とは違う土地で、その同郷者を捜している……といったところか。確証はないが。

本当のところを知りたいという気持ちはあるのだが、それと同時に知らない方が良いという気もしていた。ただでさえ馴染めば馴染むほど迷いが多くなる。意志を貫き通す自信が崩れてゆく。

――なぜなら、自分は、彼らを利用しているから。

だからこそ、知るべきではないことかもしれない。何よりも、自分にそのような権利はない。

またしても例の罪悪感が頭をもたげ、慌ててパンの大きな塊を飲み下す。すると。

「今日はずいぶんと早いな」

件(くだん)の人物、ザカリアがいつの間にやら背後に来ていた。驚き、パ

ンが喉に詰まりそうになり、水を一気に煽った。

「っくりした～。全然、気付かなかった」

大きく息を吐き出したマシュウに、ザカリアはすまないと短く謝った。向かいの席の椅子を引き、そこに落ち着く。

マシュウが旅芸人達に加わった当初は、彼に一番警戒心を抱いている接し方をしていたザカリアだったが、今は違った。日々を共にし、マシュウも演奏に加わったことで、意識が変わってきたようだ。

しかし困ったことに、それに比例してマシュウの罪悪感は徐々に膨れていっているのだが。

「またあまり寝てないのか？」

マシュウの顔を正面から見るや否や、ザカリアは尋ねた。どうやら相当ひどい隈でもできているらしい。

「どうも最近、夢ばかり見てさ。すぐに目が覚めるんだよな」

「夢？」

警戒心が薄れているのは自分も同じだ、とマシュウは感じていた。本来なら話す必要のないことまで話してみようという気になるからだ。このままではいつかヘマをしかねないと危惧しつつも。

「うん。今日は、故郷の夢を見た」

それでも、聞き手がいるというのは悪くないものだ、と思ってしまう。

「故郷の……。それは悪い夢なのか？」

ザカリアは、軽く首を傾げる。相変わらずマシュウの目元を気にしたまま。それに気付いて、マシュウは雑に顔を擦った。

「あー…、そんなに酷い顔してるかな」

おそらく顔だけではなく髪も酷い有様だろう、と想像が付く。

「いや、別にうなされるほどの悪夢とかってわけじゃないんだ。ただ……時々不安になる。本当に俺は、故郷を守れるのかって」

「守る？　マシュウの故郷は今は」

「ああ、あるよ、ちゃんとね。でも、身も蓋もない言い方をすれば、貧乏のどん底ってわけ。そんな酷い所だけど、どうしても見捨てられなくて」

「生まれ育った土地なら、そう簡単に見切りは付けられないだろう」

ザカリアの同意に、小さく頷く。

「そうだな、それもあるし、何よりそこに住む人を見捨てられないのかもしれない。だから、何とかして力になりたいと思って今」

そこで言葉を呑み込んだ。不自然なほど、はっきりと。そして頭の中で続ける、あの地を探していると。

「今、こうして行商で金を稼いでさ。けど見ての通りの状況だ。だから時々不安になるし、自信がなくなるってわけ」

口から音になって伝わったことも、全てが嘘というわけではない。

「不安になる気持ちは分かる。けど、今は及ばないと思っても、そ

の積み重ねがきっと大きな力になる時は来るはずだ。……諦めたら負けだ」

マシュウを励ますその口調は柔らかなものだが、それに反して強い意志が籠められている。きっと彼自身にも諦められない何かがあるのだろう。そう思わせる声音だった。

「で、積み重ねと言えば、ヴィエントの調子は？　昨日ずいぶんと頑張ってたみたいだが」

先ほどとは打って変わった様子で問われ、マシュウは我に返った。昨夜も遅くまで一人幌馬車の中で奮闘していた。まさかそれを聴かれていたとは思いも寄らなかった。

「えーと……その、まぁまぁかな。何とか音は出るようになったけど、スライが吹くような澄んだ音にはならなくて。こんな機会がなきゃ楽器なんて触ることもなかっただろうけど、意外と大変なんだなぁ。ほんと皆を尊敬するよ」

「わたし達は物心付いた頃から当たり前にやっていたことだからね。そんな特別に思われるようなことじゃない」

決して謙遜などではなく本音で言っていることが、穏やかに細められた目に如実に表れていた。髪の小麦色と同じく、彼ら揃いの青い目だ。

その色に、マシュウは思わずマディカの大きく表情豊かなそれを重ねていた。彼女は、この自分と同じ色の優しい眼差しに惹かれているのだろうか。それとも――？

そこで先ほどの女が、マシュウの前に並べた物と同じ皿の数々を新たな客に出すために盆に載せてやってきた。しかも並べられるそ

れは、明らかにマシュウの時よりも大盛りである。　これにはザカリアも当然、困惑の一言を発した。

「あの、この量を朝からはちょっと……」

「だから、いい若いもんがこれくらいで音を上げないの！」

更には二人分にしては倍はあろうかという蜂蜜酒の甕を中央にどんと音を立てて置いた。この辺りでは軽い飲み物として毎食出されるものだった。

マシュウは椅子から少し腰を浮かせて、高い位置の甕の口を覗いた。その名の通り、薄い蜂蜜色の液体がこぼれそうなほどなみなみと湛えられている。

そこで二人は思い出した、この宿はとにかく食事が名物だから、と熱心に勧められたことを。

「これ、どう見ても二人で全部は無理だよなぁ」

恐る恐るというマシュウの科白に、ザカリアが提案した。

「半分はスライに任せよう。大丈夫、スライなら飲み切れるはずだ」

……（2）

スライの胃は底無しだったようだ。
あの後、スライ本人用にと追加された分に加え、マシュウ達が限界を訴えて残したものまで彼は顔色一つ変えずに引き受けた。

「仕事前には少しくらい酔ってたほうが調子がいいってもんだ」

本気とも冗談とも取れることをさらりと言い、笑う。

「でも飲み過ぎはよくないわ」

空になった甕を手に取り、その大きさに、マディカは小さく息を吐いた。

「大丈夫だって。俺が一度でも酔い潰れたことがあるか？」
「それはないけど……」

いくらさほど強くない酒とは言え、朝からよくこれだけの量を……と、スライの顔を窺うが、確かに普段と変わりない。

「今日はこの町で演奏をするのか？」

ざっと周りを見回して、マシュウが訊ねた。
と言うのも、ここはかなりの田舎で、通常であれば賑わっているであろう宿の食堂ですら、満席にはなっていない。それでも半分は埋まっているだけ、まだ人がいるほうなのかもしれないが。
要は、ここはそれだけ人が少ないということだ。そうなると、見込める収入も低くなるわけで。

「そうだなぁ、そのつもりではいるんだが、場所も問題だな」
「人が集まりやすい都合のいい所があるかどうか……」
ザカリアの言葉に、カーチスも思案顔で頷く。
「一見、そんなに広い町でもなさそうだもんなぁ」
そう言いながら、窓の方へとマシュウは視線を走らせる。そこから覗くのは、のどかな畑とその奥に山が連なる景色だ。
刹那。窓の付近、部屋の隅に座っていた客の一人と目が合ったような気がして瞬いた。しかし、次の瞬間にはその客は手元の料理を平らげるのに集中していて、こちらを気にする所ではない雰囲気だった。
気のせいか、と、再び意識を同行者達の会話へと向ける。
「……じゃあ、ちょっと行って来るか」
「私も行くわ」
スライが腰を上げ、それにマディカが続く。どうやら二人で辺りを見に行くということになったらしい。
「マシュウも行く？」
隣りに立ち、マディカが微笑んだ。断る理由もなく、宿に残るよりは気分転換にもなるだろうと、すぐさま二つ返事をして席を立つ。
それから、やはり何か引っかかるものがあり、先ほどの窓際の人物を軽く見やる。相変わらず、料理を口に運ぶのに熱中している。
なぜここまで気になるのか自分でも分からなかった。寝不足で過

敏になっているのかもしれない、と溜息をつき、店の入口に向かった二人を追った。

宿を離れ、町の中を散策する。

所々に散らばる農家風の家屋に、栄養分を豊富に含んだ黒土の畑。その間を縫って細い小川が音もなく流れている。

わずか離れた距離の小高い丘に、風車が見えた。小川沿いに歩き、そこまで向かった。

着いてみると、それは大きな物だった。風を受ける翼は遥か上空にあるようにさえ見える。

あの翼一枚を張るのにも、一体、どれほどの人手が必要なのだろう。

「きっとこの風車は、この町の自慢なんだろうな。相当手入れが行き届いてるし」

一定の速さで回転するそれを見上げて、マシュウがスライとマディカに話しかけた時、その風車小屋の扉が開いた。そこから出てきたのは、逞しい中年の男だ。よく日に焼けた赤い顔をしている。

「珍しいな、観光かい？」

風車を見上げていた見慣れない三人に気付き、嬉しそうに声を掛ける。

「観光とは違うんだが……この町で、演奏をしても差し支えない場所を探していてね」

「演奏？」

スライの言葉に、男は首を傾げる。
そこで簡単にマディカが説明を加えた。自分達は旅芸人であること、公演をする場所が必要だということ。それを聞き、男はゆっくりと頷く。

「そうか、じゃあ、この風車の前の広場を使うといいよ。けど、昼間は無駄だなぁ。皆、畑に出ちまってて集まれないだろうから」
「と言うことは夜に？」

日も落ちれば、この辺りはすっかり暗闇になってしまうのではないかと、マシュウは思ったのだ。

「まぁ心配しなさんな。明りなら用意できる。楽しみに待ってなって」

そのもっともな疑問を察し、顔をくしゃりと皺だらけにして笑う。

「ついでに知り合いにも言っておくからさ。いやぁ、この町じゃ見ての通り娯楽が少ないからね、きっと皆も喜ぶよ」

その言葉通り、知り合いに夜の公演のことを伝えてくれたらしい。それが人から人へ伝わったのだろう、マシュウ達がそこへ再び出向いた頃には、かなりの人数で広場は埋まっていた。この小さな町のどこにこれほどの人数がいるのか、と思えてしまう。

心配した明りも、広場に山と集められたランプや蝋燭で柔らかな光に包まれており、全く問題はなかった。あちらこちらに、形も大きさも様々な灯火が揺れている。それに巨大な風車が照らされ、星空の下に淡く浮かび上がり、幻想的な光景を作り上げている。マディカが思わず感嘆の声を上げたほどだ。

その隣りで、マシュウは落ち着かずにいた。演奏前はいつもそうだ。何度経験しても、人前に出る緊張には慣れない。しかも今は、着慣れない服装でいることも手伝ってか、なおさら違和感があった。

それは宿を出る少し前。

共に立つのに一人だけ普段着なのも逆に目立ってしまうから、と、背丈がほぼ同じであるカーチスから手渡されたのは、彼らの故郷の衣服だった。

上下ともくすみのない真っ白い生地に、同じく白い糸で細かな刺繍が襟や袖に施されている。丈の長いシャツを留めるように、とマディカが選んで渡したのは、それもまた見事な模様に織り込まれた、鮮やかな青の帯だ。

「マシュウの髪と目の色にすごく合うと思うの」

マディカが見立てた帯をマシュウが結ぶと、彼女はその姿を、一歩離れた位置から満足気に眺めた。

「うん、やっぱり思った通りね。その格好も似合ってるわ。……マシュウは髪は伸ばさないの？」

「えっ？」

最近は寝癖が激しく付くからまた切らなければ、と思っていたところだった。

「いやぁ……たぶん、似合わないと思うから」

伸びてきて目にかかりそうな前髪を引っ張りながら、笑う。考えたこともなかった。

旅芸人達は皆、髪が長い。おそらく、そういう風習なのだろう。マディカの問いも、だからこそ自然に出た疑問なのかもしれない。似合わないという言葉に、そんなこともないと思うけど、と、彼女は首を軽く傾けたのだった。

そして今。広場に足を踏み入れると、集まった人々の期待に満ちた視線が彼らを迎えた。思わず怯むマシュウを、スライが軽く肘でつつく。

「ほれ、もっと背筋伸ばして」
「分かってるけど、人に見られてるとどうもこう、ムズムズする感じで」
「見られるのも仕事のうちだ。なんせ目立ってなんぼの商売だからなぁ」
「俺がずっとしてきたのは、どっちかって言うと値切ってなんぼの商売なんだけど」

冗談雑じりのスライの言葉に、マシュウも冗談で返す。お互いに、口角を上げて笑みを交わし。

「よし、それだけ余裕があるなら大丈夫だな、いくぞ」

いつもの通り、スライの掛け声で賑やかな音楽が始まる。

……（3）

マシュウは相変わらず、自分の演奏の技術には全く自信は無かった。けれどヴィエントを吹くのは四人のうちで二人ということもあり、少しは安心感があるのが救いになっていた。

音量も音質も申し分ない、スライの頼もしいそれに合わせる。時折、音を外してしまうこともあるが、そこで焦って止めてしまわないように全神経を集中する。掌にじわりと汗が滲む。

観客から一斉に声が上がった。目の端に、炎に照らされた赤が引っかかる。マディカだ。布を翳した腕を大きく振り上げ、広場の中央へ躍り出たのだ。トルエノとオラのリズムが速くなったその時に、先走ることも遅れることもなく、絶妙のタイミングで。

つま先立ちで、細い肢体を軽やかに弾ませる。真っ直ぐな小麦色の髪が、仄暗い空間に幾度も広がる。

いつもよりも大人びた雰囲気を湛えた笑みを、観客、そして時には奏者にも絶やさず向ける。

普段は可愛らしいという言葉が似合う彼女だが、踊りの時は違った。優雅でしなやかな動き、力強さを感じる瞳、人を惹きつける表情。その全てを一言で表すとしたら「美しい」と言っても過言ではないかもしれない。

珍しい音楽に踊り、観客はそれらにすっかり魅了されている。おのおので持ち込んでいた蜂蜜酒や菓子類を片手に、しかし口を付けることも忘れているようだ。素朴な楽器類から紡がれる音に合わせ、歓声に指笛、手拍子が星空のもと木霊する。

一曲が終わっても、間を開けずに次を始める。マシュウは三曲終わったところで外れた。これから先は、まだ自分にはできない曲が続く。

今日も役目を無事に果たし、安堵の息をつく。その途端、周りに集まった人々に、激励の言葉を次々と投げ掛けられ、気恥ずかしさにはにかんだ。

「お疲れさん！　良かったよ、なかなかやるね、あんたも」

背中を何度か強く叩かれ、顔を上げると昼間の男だった。持っていた酒の器をずいとマシュウに突き出し、片目を瞑る。口が酷く渇いていたマシュウはそれを有り難く受け取った。

それから広場の端に沿って立てられた柵に、脱力した身体を預けた。その場から、演奏を続けるスライ達を、改めて観客の立場で眺める。

（初めて見た時には、まさか自分もあの中に立つなんて想像もしなかったのになぁ）

そのことがもうだいぶ昔のように感じ、無意識に目元を緩めていた。あの頃にはまるで他人だった彼らが、今は違った。仲間、と言ってもいいのだろうか？

否。

心に湧いた不思議な感情を、理性が否定する。

自分は仲間ではない。いくら彼らと行動を共にし、同じ舞台に立ち、同じ衣服で身を包もうとも。仲間になど、なれるはずもない。

演奏の緊張感と、それから解放されたことで昂っていた感情が一気に冷める。

――俺は一体、どうしたんだ？　しっかりしろ、あの土地を見つけるんだろう？

自問自答し、首を軽く振ったところで、また、それに気付いてしまった。

朝、食堂の隅にいた男。

マシュウとは反対側の柵に寄りかかり、中央の旅芸人達の方に顔を向けていた。この場にいること自体は別に何も不思議はない。町人の口から、宿の宿泊客にまで話が伝わっていても当然だからだ。

しかしその男は一人、無表情だった。かと言って、旅芸人達に興味がないといった様子でもなく。彼らに向けられる視線はどこか探るような、卑下するような、不快なもので。

言いようのない気味の悪さを本能的に感じ、マシュウは不安を覚えた。男の視線を辿って旅芸人達に目をやり、再び柵のほうへ意識を向けた時には、その男の姿は消えていた。

＊＊＊＊＊＊

「もうマシュウもすっかり私達の一員よね」

宿に戻り、慣れた服に着替えてベッドに伸びたところで入ってきたマディカの言葉がそれだった。

「本当に上手になったと思うわ」
「そうかな？　ありがとう」
少女の心からの賛辞に、若干、照れながらも礼を言う。弾む声で話すマディカに相槌を打ちながらも、マシュウの意識は、あの男のことでいっぱいだった。
スライ達にも話すべきだろうかとも思ったが、実際に何かがあったというわけではない。ただ気になる存在だというだけで。
明日の様子を見てまた考えよう。
そう結論付けた時。
「マディカ、マシュウ、今すぐここを出るんだ」
部屋に戻ってからと言うもの、ずっと開け放たれた窓の外を気にしていたザカリアが硬い声音で言った。
「え？　どうして」
マディカはその唐突な一言に当然の疑問を持つ。対してマシュウは、嫌な予感が当たったのか、とすぐさま身を起こし、窓へと駆け寄った。
宿から漏れる明りに浮かび上がった光景、それは。
窓からやっとで見える位置に置かれた彼らの馬車の周りを、何者かが取り巻いている。この場から確認できるのは、七人ほどだ。中に入っていた人物が顔を出し、何やらを外の者達に伝え、手を大き

く振って彼らに指示を出している。それに応えた者が向かったのは、おそらく宿の入口――

「いいから行くんだ。早く裏口へ、それから厩へ！」

静かだが有無を言わせない口調で、マディカを急かす。その時、二つの足音がして、その場にいた三人は表情を強張らせた。しかし、入ってきたのはスライとカーチスだ。彼らも外の異変に気付いたらしい。

「すぐに逃げろ。さすがにあの人数じゃ多勢に無勢だ」

これまで見せたことのない、緊張した面持ちでスライが告げる。事の重大さを察したマディカは、その指示に機敏に反応した。マシュウも急いで貴重な品が入った袋のみを無造作に掴んで彼らに続いた。

なるべく足音を立てぬよう意識しながら、急いで裏口を目指す。扉の内側に渡された閂を外し、夜の闇に身を滑り込ませる。

厩は目の前だった。

しかし。

複数の足音がその近くから響いて来た。

「ロホとネグロを連れ出している暇はないな」

スライの呟きを合図に、すぐに全員揃って足音とは反対の方向へ駆け出す。背後に迫る声。

逃げながらも、マシュウは冷静だった。

なぜ？　と考え続ける。けれどもちろん答えなど出るはずもない。

「駄目だ、皆でまとまっていたらじきに追いつかれる！」

軽く息を切らしながらスライが一瞬、全員を止めた。

「二手に別れるんだ。明るくなるまで身を隠し、それからどこかで落ち合おう」

可能な限りの早口で指示を出す。

「行け！」

目の前にいたマシュウの背を、ぐいと前方の細い道へと押しやった。それから自分は反対側の、この町にしては大きな通りへと走り出す。カーチスがそれに続いた。

迷っている時間は無い。残った三人も、すぐにまた走り出した。ザカリアが右腕に何かを抱え、反対の手でマディカの手を引き、先頭を走る。マシュウは少女の後ろを。

時折、背後を目の端で注意しつつ、耳を澄ます。心なしか足音がだんだん近付いている感じがする。小さな建物の間の、細い道に響く足音。今追いかけて来ているのは、一体何人いるのだろうか？少なくとも、自分達よりは多いことは確かだ。

このままでは逃げ切れない！

そう感じていたのは、ザカリアも同じだったようだ。

「うわ！」

突如、建物の壁に寄り添って積み重ねられていた木箱の陰に押し込まれる。続けてマディカを同じ場に押しやりながら、ザカリアは抱えていた包みを彼女に渡す。

「マディカ、これを持ってマシュウと逃げるんだ」

マディカは、それを躊躇いながらも細い両腕に受け止めた。

「でも……でも、ザカリアは？」

固く胸にそれを抱きしめ、不安に満ちた目で彼を見上げる。

「マディカ……頼む、今これを失うわけにはいかないんだ。これを失うことがどういうことか、お前も分かっているはずだ。大丈夫、このまま先に行って奴らを撒いて、後からまた二人に追いつくから。マシュウ、マディカを守ってやってくれ」

止める間もなかった。踵を返し、駆け出す。

マシュウは木箱の端から頭を出し、その後ろ姿を捜したが、既に暗闇に呑まれてしまっていた。そして、反対方向から迫る足音――

慌てて頭を引っ込め、数歩奥に下がり、思わず息を止める。壁に背をぴたりとくっつけて、人影が通り過ぎるのを待った。慌しい足音が複数、数歩離れただけの位置を駆け抜けてゆく。建物と木箱の陰に身を潜めた二人に気付いた者はいなかった。

どくん、と波打つ心臓の辺りに手をやり、長い息を吐く。マディカはすぐさま木箱の端に飛びついた。身を乗り出し、ザカリアと追っ手が消えた方へ首を巡らす。足が一歩、前に出て――

「マディカ」

その腕を、マシュウは掴んだ。驚いて見開かれた青い瞳が、自分を映す。それを確認して、マシュウはゆっくりと首を横に振る。眉根を寄せて、唇を引き結んで。

それでも後を追うかと思われたマディカだったが、そうはしなかった。一瞬の間だけ逡巡したものの、腕に抱えた包みを胸に強く押し当て、意を決した面持ちでマシュウの前に立つ。

「分かってるわ、行っては駄目だって。ザカリアなら大丈夫よね。いつも約束をちゃんと守るもの」

どちらからともなく手を取り、共にまた夜の町を駆け出した。ザカリアが向かったのとは別の方向へ。

民家から漏れる微かな明かりと夜空の光を頼りに進む。マシュウは先ほどにも増して背後の物音に注意を傾ける。

追いかけて来る足音は、今はひとつもなかった。

……（4）

日がすっかり頭上に昇りきっている。
そろそろ朝食を済ませた町人達が、日々の営みを始める頃だろうか。

マシュウとマディカは、町の外れにあった納屋に身を隠していた。中はだいぶ荒れており、壊れた農作業の道具や藁のかたまりが散らばっていた。今は使われている様子がない。
マシュウが傾きかけた扉を薄く開き、外の様子を窺う。眼前に広がる畑には、まだ誰の姿もない。

「とにかくスライ達と合流しないと」

後ろを振り返ると、蒼白な表情で託された包みを抱いたまま、マディカは微かに頷いた。あの後、ザカリアは追いついては来なかった。

「マディカ？　どこか怪我でも……」
「ううん、大丈夫よ。ありがとう」

マシュウの心配の言葉に、やっとで淡く微笑んで見せる。

「皆を捜さないとね。それに、ロホとネグロも迎えに行かなくちゃ」

努めて明るい声を出す。座っていた藁から立ち上がり、扉に手をかけて。

「……ねぇ、マシュウ」

「うん？」
「大丈夫よね？　ザカリアは、私達とは反対の方へ行ったんだもの。戻ろうとした時には、もう離れ過ぎていて、私達を見失ったのかもしれないわよね？」
「ああ、きっとそうだ」

乾いた喉から、掠れた声が出る。

それ以外に、何と言えばよいのだろう？
そもそも、あの男達が何を目的に自分達を執拗に追い詰めたのかも分からないのだから。もし、あのまま追いつかれていたら一体どうなっていたのだろうか？

その時、外に人の気配を感じ、身体を強張らせた。慌てて扉の隙間から離れる。

「……誰かいるか？」
「！　スライ？」

聴こえたその声に、安堵の息をつき、すぐに扉を大きく開け放つ。そこには、昨夜別れたスライとカーチスの姿があった。
大柄なスライを見上げると、相手も安心した表情をし、口元を綻ばせた。

「マシュウ……マディカもいるな？　良かった、二人は無事だったんだな」
「そっちこそ」

ほっとして答えた直後。その言葉を反芻する。

「二人は、って……」

それに答えるより早く、外にいた二人も中に入り、扉を閉めた。

「スライ！　ザカリアはどこなの？」

その意味を読み取って、マディカは泣きそうに顔を歪め、スライに縋る。抱えていた包みが足元に転がったことも気付いていないのかもしれない。

「どこかへ連れて行かれたようだ。それから馬に馬車、部屋に残してあった荷も全部だ」

言葉を濁すことなく、はっきりと伝える。今ここで安心させようと曖昧な表現をしても、何も意味がないと判断してのことだろう。

「俺達はあの後、畑近くの藪の中に隠れていたんだが、お前達が逃げ切れたか心配で、一度俺だけ宿の近くへ戻ったんだ。そこで、ロホとネグロが繋がれた馬車を見た。それから、荷馬車にザカリアが乗せられていたのもな。どうにかして助けたかったが、周りには馬に乗った奴らも何人かいて、できなかった」

マシュウは「生きているのか」と訊きたかったが、言葉がつかえて出なかった。マディカはスライから身を引き、両手で口元を覆っている。嗚咽を堪えているのだろうか。

しかし、少女は気丈だった。ゆっくりと青ざめた顔を左右に振り、落ち着いた声で、マシュウが言えなかったことを口にした。

「その時、ザカリアは？」

「正直、あそこからじゃ分からなかった。少なくとも意識はない様子だったからな。だが、もし」

そこで一度、スライは顔をしかめて言葉を切った。マディカは、微動だにせず、続きを待つ。

「……もし、既に殺されていたのだとしたら、わざわざ連れてゆく必要もないだろう」

希望を持たせようとしての慰めの言葉よりも、冷静な判断での真実のほうが、時には効果的なものだ。

「そうよね、きっと大丈夫よね」

誰かに同意を求めるというよりも、自分自身に言い聞かせるためにマディカは呟いた。

「じゃあ、すぐに追いかけないと！」

マシュウが扉の外へ駆け出そうとするのを、スライは止めた。

「そうしたいのは山々なんだが、行き先が分からない上に、俺達は馬もなしだ。それに……マシュウ、先にお前さんに話さないといけないことがある」

その言葉を聞いて、マディカは慌てて足元の包みを拾い上げる。

「これのことよね？」

スライはそれを受け取ると、無言で頷いた。

その場の皆を促し、納屋の中央に座る。それから包みの、幾重にも巻かれた布を外す。やがて焦げ茶の胴体部分が見え、いくつも連なる糸巻きが端から姿を現した。
中にあったのは、マシュウも既に見慣れた弦楽器のオラだった。

「なぜこれを？」

マシュウはその理由が分からず、思わず口に出す。
演奏をする者にとって、指に馴染んだ楽器ほど大切な物はないだろう。しかし、だからと言って、自分の命すら危ぶまれる時に真っ先に救い出そうとするほどなのか。
そのもっともな疑問に答えることもなく、スライは意外な行動に出た。弦を緩め、外し始めたのだ。

「？」

何が起こるのか予想も付かず、固唾を呑んで見守る。
やがて全ての弦が外され、胴体部分にぽっかりと口を開いた穴が露わになった。音の出口だ。
そして、そこに指を潜らせ――

「！」

中から、更に小さな包みを取り出す。麻布の、薄い包み。粘着性のある樹脂か何かで内側に貼り付けてあったらしい。包みには黒い染みが残っている。

「これを、あいつらは探しているんだろう」

じっと見守っていたマシュウにそれを手渡す。掌の上で広げると、

中に大切に隠されていた物が明らかになった。
それは、純金製の護符だった。鎖に通し、首から下げられる小さな物だ。シクアトロで露店の女主人から貰った物に形がよく似ている。薄い卵形の表には、教会のシンボルである神の姿が彫られている。
指を使わず転がして裏に返すと、そこには紋が深く彫られていた。
そして、固くこびりついた、赤黒い物体――
「これ……！」
マシュウは驚愕した。その紋に、見覚えがあったのだ。しかしスライは、マシュウが別のことに声を上げたものと思い、眉をひそめた。
「そうだ、血だ」
「血？」
「殺された娘の手の中にあったんだ」

……（5）

「殺された、って？」

スライからマディカ、そしてカーチスを順に見やる。

マシュウと目が合うと、マディカとカーチスは、表情を曇らせた。

「俺達の村のことをまずは説明しないといけない」

スライが、落ち着いた低い声で淡々と続ける。

「俺達の村はどこにも属さず、昔から伝わっているやり方で生活を続けていたんだ。でもだからと言って、決して他を拒絶していたわけじゃない。来るものは拒まず、受け入れたことも何度かあった。それで上手くやっていた。とは言っても、街からはただでさえ離れているし、そこから来ようと思えば、高い山をいくつも越えなければいけない。だから、時々来るのは迷い込んだ旅人くらいだったけどな」

鈍く光る金のそれから目を逸らせずに、マシュウはじっと聞き入る。

「土地も豊かで、作物も豊富に採れるし、近くには河も流れてる。他との接触がなくても、何も不自由はない。だから、俺達はそんな生活に満足していた。ところが、だ。数年前に、一番近くの街の領主だと言う男がやって来た。そしてこう告げた。この地域一体は全て自分の領土となった。そうである以上、異端は認めない。しきたり、生活、宗教、全てを我らに従うように、と」

その時の様子が脳裏に浮かんだのだろう、スライはギリ、と歯軋りしたようだ。しかし一拍置いて、再び先程と変わらぬ口調で先を続けた。

「突然の有無を言わさぬ命令だ、俺達は戸惑った。するとその男はこうも言った。もし、それなりに見合う金を用意するなら、今の状況を維持することを赦すと。しかし、逆らえば……」

そう言い終えたスライの声音に、表現し難い感情が含まれる。恐らくそれは、押し殺した怒り。

「要は、金を払って自分達の村を買えと、そういうことなんだな？　さもなくば死か」

神妙に頷き、マシュウが呟いた。

「そうだ。だが、俺達の村には提示された額の金なんかなかった。そもそも、金なんて道具は、さほど必要がない代物だったからな。そこで、村の半数ほどが外へ稼ぎに行くことになった。皆で作る作物や織物、それから装飾品を売ったりな。俺達は、音楽だ。それで金を稼いだ」

硬貨ほどの大きさである金の塊を包みごと握り締め、じっと身動きせずにいたカーチスとマディカに目をやると、二人も真っ直ぐにマシュウに視線を返した。

「そもそもどうしてその条件を呑んだんだ？　抵抗するとか、何かそういう方法は」

素朴な疑問に、珍しくカーチスが答える。

「僕達には、戦う術(すべ)はないんだ」

言葉が少ないその答えを、マディカが補足する。

「もちろんそれも考えはした。けど私達は、長いこと争いを経験したことがないの。だから、もし攻め込まれればあっという間に村は潰される。村の話し合いで、それは避けようということになったのよ」

彼らにとっては賢明な判断だ、とマシュウは納得する。

例えば、目の前のスライのように大柄で体躯の整った者だったとしても、戦いの方法や武器の扱いを知らなければ、どうしようもない。力で押すことはできても、戦い慣れた相手に勝つことはおよそ不可能だろう。アトレスでの小競り合いなどとはわけが違う。

「それで、金は貯まったのか？」

「ああ、随分と時間はかかったけどな」

「じゃあ……」

一瞬、ほっと息を吐いて力を抜くが、そうしたのはマシュウだけだった。場に、更に重い空気が流れる。

「貯まった金を、その領主とやらに届けることになった。その役目を負ったのは、長とその娘だ。二人は金を持って村を出て行った。これでもう安心だと、村人は全員安堵して、二人の帰りを待った。だが、いくら待っても帰って来なかった」

「！」

そこで、護符についた血と話とが唐突に繋がった。捩れてバラバラだった細かい糸がまとまり、編まれ、一本の確かな紐を成すように。

「探しに後を追ったのは、俺とザカリアだ。そして見つけた、その領主が住む街の近く、道から外れた藪の中で。既に冷たくなった二人をな」

「そしてこれを、殺害者の証拠を、その娘が握り締めていたんだな」

固く閉じていた為に白くなった指先を、ゆっくりと開く。先程よりも、妙に生々しく赤黒い痕が目に焼きついた。

ずっとこれまでの経緯に耳を傾けていたマディカが、唐突に、ぽつりと囁く。沈痛な面持ちで。

「ザカリアの大切な人だったの」

弾かれたように顔を上げたマシュウに、悲しそうにそっと微笑む。

「二人は本当に誰もが羨むくらい仲が良くて、とても愛し合っていた。あんなことにならなければ、全てが上手く治まった後、皆に祝福されて良い夫婦になるはずだった」

「……俺は、その、てっきり、マディカとザカリアは」

「わ、私が？」

予想だにしなかったマシュウの言葉に目を丸くして、思わず上ずった声でマディカは叫ぶ。本気で驚いている様子だ。

「違うわ。もちろんザカリアのことは好きよ。でも、私にとって本当の兄さんみたいなものだわ。彼にしたってそう。私達は兄妹みたいに育ったから」

「そ、そうなのか」

はは、と、自分の失態を笑い、赤毛を掻く。それからごほんと咳払いをし、話を元に戻す。

「村の代表はこの持ち主に殺された。そして、金は？　どうしたんだ？」

その答えは、予想通りだ。スライは、無言でただ首を横に振る。目を細め、マシュウがその意味することを口にする。

「……奪われたんだな」

そして突然、片手を自分の首に回す。シャラと鎖の擦れる音と共に服の下から取り出したのは、指に嵌めるには不恰好な大きさの指輪だった。それに鎖を通し、首から提げている。

「これを見てほしい」

指輪の、本来なら宝石などが嵌めこまれている部分を示す。そこには石は何もなかった。輪の部分から全て同じ素材の金属で作られ、平たく、円形に延ばされた上部には、深く紋が掘り込まれている。

それは、あまりに似通った物。

マディカは息を呑み、カーチスは目を瞠る。スライでさえ、衝撃を受けて一度伸ばした手を引っ込めた。触ると火傷を負うとでも言わんばかりに。

「大丈夫、違うから。これはギルドに登録している商人なら誰でも

持つ物なんだ。ほら、ここに刻まれた印があるだろ？　これは、個人を特定する紋だ。重要な取引の際なんかにこれにインクを付けて調印する。必要なのはこの紋の部分で、指輪になっているのもあれば、こっちの護符のようなものもある。形には別に決まりはない」

紋が違うことに安堵し、スライが改めて手を伸ばした。マシュウが、証拠品と自分の物である指輪を首からはずして手渡すと、それらを注意深く交互に凝視する。

「この証拠を見つけた後、俺達も何もしなかったわけじゃない。誰が、ってことはもちろん、金を取り返すことも考えなければいけなかったしな。だから、俺達は巡業を続けながら、手がかりを探していた。紋よりも護符に、教会に何か関係があるのかと思っていたんだが……どうりで何も掴めないわけだな」

合点が行き、スライは大きな溜息をついた。

マシュウの中でも、様々なことがぴたりと当て嵌まった。

シクアトロで、なぜカーチスが護符に興味を持ったのか、そして露店の女主人の「常に善良な行いをするように」という言葉に、スライがどんな想いで答えていたのか。マディカがあの町に入りたがらなかった本当の理由も、今なら理解できる。

そして、彼らが捜していたという人物。それは、心通った旧友や知り合いなどではなく――

……（5）（後書き）

ものすごく中途半端な部分ですが、長くなるので一度切ります。今回は、二話続けてアップしました。

……（6）

マシュウがふと疑問に思ったことを問う。

「どうして俺を乗せてくれたんだ？　そんな大変なことを抱えている時に」

その声に、深い思案の底から唐突に現実に引き戻され、スライは細めていた目を一瞬見開く。それから何かを確認すべく仲間の二人に素早く視線を走らせた。

彼らは、押し黙ったままだった。だが、リーダーである彼に従う意思を、しっかりとその表情に如実に表している。

「なぁに、困っている奴を助けない手はないからな」

問い掛けた本人ではなく、仲間に向かって短く答えたように見えた。しかし、すぐさま真剣な面持ちで、マシュウへと向き直る。

「……と言うのは建前だ。本当は、お前さんを利用した。俺達は見ての通り、村から出てしまえばどこへ行っても余所者で、ましてや教会の関係者にとっては、あまり関わりたくない異端者扱いだ。そこで、そうではない人間がいれば、少しはやりやすくなるんじゃないかって思ったんだ。だが、こんなことに巻き込むべきじゃなかった。アトレスで馬車が荒らされた後にでも別れるべきだった。今は後悔している、すまない」

心からの侘びの言葉だ。マシュウの胸に、またあの罪悪感がぞわりと広がる。そして背筋を冷たいものが走る。

自分は彼らを利用している。

そう思っていたのは、驕りだった。

利用しようとしていたのは、お互い様だった。お互いに相手を欺き、己の為に近付き、そして受け入れた。そういうことだ。

それを悟った瞬間、カドスの教会でのザカリアの姿が脳裏をよぎる。

神像を真っ直ぐに捉えていた鋭い視線。

あの時は、自分達と異なる神や人々について思案しているのかとばかり思っていた。だが、そんなものではなかった。その心中にあったのは恐らく、愛しい者を奪われた深い悲しみと激しい憎悪。

だからこそ誰よりも、マディカを、それに仲間を大切に思って行動していたのだろう。時には過剰になるほどに。なぜなら、それを失うことの辛さを知っているから。

そして「欲しいものは？」というマシュウの問いに、故郷だと答えた。

その意味が今、ようやく分かった。

奪われた金（かね）を取り返さない限り、彼らの故郷は、彼らのものではないのだ。

「俺もだ、俺も、故郷のために……同じなんだな」

マシュウが震える声で独白する。

お互いにお互いを利用した、しかし皮肉にも、その目的は同じだった。

ただ一つのもの、そのために。

「マシュウ？」

俯いたままの彼に、そっと細い指がかけられた。マディカだ。

「謝らなきゃいけないのは俺もだ。皆を利用するつもりだったんだから」

自分を覗き込む少女に笑いかける。眉をひそめた、自虐的な笑み。

「俺の目的は、前も話した通りだ。故郷に、新たな交易路を開拓したい、そのためのものを探しているってアレだ。それは本当だ、誓ってもいい。ただ、それを当てもなく闇雲に探してたってわけじゃなく、目論見（もくろみ）があった。昔、師匠と仰いでいた人から、黄金（きん）の溢れる村の話を聞いたことがあってね。そこはまさに理想郷だったそうだ。で、そこなら、相当な価値のあるものが見つかるんじゃないかって思ったんだ。それこそ、莫大な利益をもたらす何かがね」

マシュウの言う「黄金（きん）の溢れる理想郷」というのが自分達の村を指している、ということを瞬時に理解し、スライはただ頷いた。先を促されたと判断し、マシュウは続ける。

「師匠からそこに住む人達の容姿や服装についても聞いていた。揃いの髪に目、服装。皆を見た時にすぐ分かったよ。馬車が盗まれたというのは嘘だ。一緒に行動できればその理想郷を見つけたも同じだからさ。そのためにわざと売って手放した」

そこで、視線を順に三人に巡らす。最後に、驚きとも悲しみとも取れる表情のまま無言でいるマディカへと。

「利用していたんだ。ごめん」

そのまま彼女が離れていくものと思っていたマシュウは、諦めて目を逸らす。しかし。

「ありがとう、話してくれて。それから私達こそ、ごめんなさい」

ふわり、と細い腕が首に回された。ほんの一瞬、ぎゅっと抱きしめられてから解放される。

「もうお互いに隠し事はなしだわ。これで私達、本当の友達になれたのよね？」

「友達じゃない、仲間だ。一座の立派な一員だ」

マディカの明るい言葉に、スライがいつもの調子で笑う。

「僕も、そう思う」

カーチスもマシュウを認め、微笑んだ。人の良さそうな温かい笑顔だ。

「だがマシュウ、お前さんはここで離れたほうがいい。これ以上危ない目に遭いたくはないだろう？　この一件に関しちゃお前さんは無関係だ」

思わぬ成り行きにしばし追い付けずにぽかんとしていたマシュウは、そこでやっとのことで我に返る。

「いや、待ってくれ、あながち無関係とも言い切れないんだ。俺はその血の付いた紋を知っている！　それはつまり」

早口に、しかし、はっきりと告げられたその事実に場が恐ろしいほど凍りつく。その空気を震わすほどの低い声で、スライがマシュウの後をゆっくりと、慎重に継いだ。

「その持ち主を……おそらく犯人を知っている。そういうことなんだな？」

第5章　それぞれの想い…　（1）

「彼」は、不思議と人を惹きつける人物だった。
見た目は逞しく、しかし決して無骨というわけではなく。
穏やかに笑う黒い瞳は深く、常に豊かな感情を湛えていて。
理智的で、それでいて、明るく人懐こくて。
「彼」と接した人物は皆、「彼」の人柄に好感を持った。
そんな「彼」だから、デレクから「どこかの金持ちの令嬢を射止めた」と聞いても当然だとさえ思った。

――バートレット。

それが、その紋の主の名だった。
マシュウがそれを伝えると、スライは驚愕に目を瞠った。なぜなら、彼らの故郷に関わっているという領主の名もまた、バートレットだったからだ。
だが、なぜ？

「マディカ、疲れてないか？」

レセィスで町人に頼み込んで売ってもらった馬をひたすら走らせながら、マシュウは後ろに乗せた少女に声を掛けた。

「私なら大丈夫。気にしないで進めて！」

マシュウの身体に両腕を回してしがみ付き、振り落とされまいとしながら、彼女は叫ぶ。馬蹄の音に、声が掻き消えないようにと意識して。
無言で、馬を止めないことによってそれに答えながら、マシュウ

は空を見据えた。

なぜ。

まだ分からないことばかりだ。

もし、村の代表を殺したのがその領主だとしたら、一体、何のために？　言われた通りの金を用意してきた彼らを殺す理由がどこにあると言うのか。

そして、もし、それがあの兄弟子のバートレットだとしたら――

それが一番、分からない。

スライの話を聞きながらその紋を手にしていた時でさえ、別人のことのようにしか思えなかった。その紋は、確かに彼を示す証拠だ。バートレットは信心深くもあり、常にあの紋を身に付けていた。それを手放すとは思えない。

だが、彼と言う人物を知っている自分には、人殺しの行為と、彼とを結び付けるのも難しくて。

けれども、今は感情で物事を判断している時ではない。ザカリアの、いや、下手すれば村一つ分の人々の命が懸かっている。悩んでいる暇はない。

「エシエテ――そこが、その人物が治めている街だ」

スライの言葉に従い、今、その地を目指して疾駆していた。

本来なら自分が向かうべきだと思う、と言い張る彼に、マシュウは頑なに首を横に振った。

「もしそのバートレットが兄弟子のバートレットなら、俺が行った

ほうが都合がいい。昔の顔なじみを訪ねたと言って、うまく探ることができるはずだから。それに、その領主に会ったことのあるスライが行くのは危ないだろうし」

それでもなおも譲らないスライに、マシュウは一つ、頼みごとをしたのだった。

「その代わり、アトレスのデレクという人物を訪ねてほしい。そしてこれを」

証拠であるバートレットの紋と、デレクを納得させる為に自分の紋をスライの大きな手に委ねた。

頼む、と言うマシュウの強張った声に、スライはしっかりと頷いた。

二手に別れて発つ直前。スライとカーチス、どちらの馬にも乗らずにいたマディカと視線が重なった。自分と行くのは危険かもしれない、と馬首を巡らし、背を向ける。けれど、彼女の意思は固かった。

マシュウは躊躇し、スライに助けを求める。すると意外にも、彼はマディカを支援した。

「連れて行ってやってくれ。危険だと言うならどちらも同じだ、証拠を持っているほうだってまた追われる可能性もあるだろう。むしろ、そのバートレットと旧知の仲であるお前さんといた方がまだ安全かもしれない。それに」

そこで、揶揄する口調に変える。

「マディカは、マシュウと離れたくないんだろうからな」

思わずマシュウが動きを止めたところで、スライは意地悪く続ける。

「一人にしておくのが、心配なんじゃないか？」

「……悪かったな、頼りなくて」

マシュウはそれにがっくりと肩を落とし、口の中で呟く。

「気をつけて」

カーチスのその言葉を最後に、三頭の馬は力強く地を蹴った。

そしてマシュウはマディカを連れ、ただひたすらエシエテを目指している。

旅人が集う広い街道を、彼らを蹄に掛けないようにと注意しながらも次々と追い抜いて行った。一陣の風が真横を吹き抜け、驚きに声を上げる者も時にはいるが、お構いなしだ。

その終着点は、もう目の前に迫っていた――

＊＊＊＊＊

腹部に激しい衝撃を受け、遠退いていた意識が微かに戻る。薄く目を開くと、瞼に遮断されていた光が一気に波となって押し寄せた。眩しさと痛みに、小さく呻く。

「起きろ」

どこか覚えのある低い声。手加減なく髪を掴み上げられ、上を向かされる。

「あれはどこだ、誰が持っている？」

有無を言わさぬ強い口調で問われる。恐ろしく深い闇色の双眸に、真っ直ぐに射抜かれる。

答えずにいると、こめかみに鈍い痛みが加わった。

「お前達の持ち物は全て調べた。虱潰しにな。だが、見つからない。と言うことは、逃げおおせた誰かが持っているのだろう？」

突き放すように手を離され、壁に背を打ち付けた身体が床に倒れこんだ。乾ききった喉を鳴らす。一目でそれと分かる高価な敷物。そこに散らばった自分の髪に、前に一つに括られた手が見える。頭にかかっていた霧が晴れ、やっとで記憶が戻ってきた。

走り抜けた暗い夜道、証拠を忍ばせたオラ、手を引いていた少女、そして彼女を託した青年。彼らは、無事なようだ。今、ここでこうして自分が問われているということは。

それを悟り安堵に口の端を上げると、苛立たし気に舌打ちする音が響いた。相手を覗き込む形で屈みこんでいた男は、やおら立ち上がり、贅を尽くされた部屋を横切る。そして壁に掛けられた太い刀剣をその手に取った。

「鞘は装飾品だが、刃は本物だ。手足を落とされたくなければ答えろ。あれは――　紋はどこだ」

彼はそれに怯まず、沈黙を貫く。問いに答える代わりに、静かな落ち着いた青い目で、その人物を見上げる。

物騒な物を持ったその男を、ザカリアは知っていた。自分達の村

に来た領主と名乗る男だった。理解できないその状況に、一瞬、口を開きかけたが言葉が見つからなかった。

再び舌が強く打ち鳴らされ、刀剣の先端が利き手の肘に食い込んだ。華美な入れ物から抜かれぬまま。骨が砕ける鈍い音がした。瞬間的に走った激痛にはさすがに堪えきれず、鋭い声を上げる。

「――次は鞘じゃないぞ」

低い唸り声。

それは脅しなどではなく、本気であることを表すには十分な重い響きを孕んでいた。

……（2）

マシュウとマディカがこの屋敷の敷地内に足を踏み入れたのは、その頃だった。

「本当に、ここ、なんだよな？」

やたらと広く煌びやかな一室に通され、マシュウは落ち着きなくベルベットのソファで身じろぎした。その空間をぐるりと、たっぷりと時間をかけて見渡す。

目の前には光沢のある重厚なテーブル、床や壁は石作りで質素ではあるが、そこに並べられているのは、扉にガラスがはめ込まれた書架だ。その中には、分厚い革の表紙の書が並ぶ。これらも恐らく貴重な品ばかりなのだろう。

大きく縁取られた明るい窓には、絹の薄い日除けが惜し気もなく下がっている。

「マシュウ、口が開いてる」

マシュウと同じく、やはり落ち着かない表情を浮かべたマディカが囁いた。

「えっ、あ……」

指摘され、マシュウは慌てて口元を緊張させる。隣りに座る黒髪の少女に目をやり、失笑した。そう、黒髪の少女だ。

この屋敷を訪れる前に、マシュウには気になることがあった。マ

ディカは、その領主なる男に会ったことはあるのだろうか、と。
そう訊ねると、マディカは首を横に振った。

「だから心配しないで」

そう言った少女の髪に目が留まった。彼らの特徴である、深い小麦色の髪。似たような、例えば蜂蜜色の髪などを持つ者も世の中には大勢いる。
けれど彼らのように、村人全てが色合いも明るさも揃っていることは珍しい。念には念を入れて、マシュウはその特徴的な髪を染めることを提案した。
今、マディカは長い黒髪を編み、それをぐるりと頭に巻き付けた髪型をしている。そうすると華奢な首が露わになり、少女と言うよりも、女性という呼び方が相応しくさえ思えた。

そうして準備を済ませ、堂々としたかまえの門を潜ると、広い庭にすぐに男が出てきた。屋敷を訪ねて来る者の馬を預かり、用件を主人に伝える役目の者らしい。自分の名を伝え、昔の兄弟子に会いに来たと述べると、しばらく待たされた後にこの部屋に通されたのだった。

「今まで見たことのない部屋だわ」

マシュウほどは大きく身を動かさず、しかしマディカも周りの品々に目を奪われているようだった。

「相当な値打ち物だろうなぁ。でも、ここまでたくさん並べてあると、どうもありがたみが失せると言うか」
「なんとなく、落ち着かないわよね」

ここに来るまでの間も、そして到着してからも、二人の頭を占めているのは部屋の装飾や調度品などの日常的なことなどでは、もちろん無かった。しかしそうでもしていなければ、息が詰まる思いだった。それに、どこで誰に話を聞かれているかも分からない以上、下手なことは口には出せない。

その時、背後で扉が開かれた。マシュウは振り返りざまに立ち上がる。そこにいたのは、忘れられない人物だ。

つのる不安が一瞬、頭から消え去る。
師と兄弟子と共にいた頃の記憶と懐かしさで胸が満たされる。
それは、兄弟子のバートレットにとっても同じだったようだ。立ち上がり、自分を真っ直ぐに捉える懐かしい面影に会い、すぐに顔を綻ばせる。

「マシュウか！　久しいな、元気だったか？」

両腕を大きく広げ、早歩きで彼の元へ進む。その目は嬉しさに輝き、再会を心から喜んでいるのが傍目にも分かるほどだ。

「バートレット……また会えて嬉しいよ」

兄弟子の固い右手を握り、その顔を正面からしっかりと見据える。
彼は、変わっていなかった。明るく愛嬌のある表情に、はっきりとした口調、堂々たる姿勢、そして同じ男である自分から見ても、男前だと思える容姿。

人好きされる性格に加えてその風貌で、彼はよく女性にもてていたことを思い出す。独り身ではなくなったはずの、二十半ばを過ぎた今でも、それは変わらないことだろう。

「その、デレクから結婚したことを聞いてさ。本当かどうか、確かめに来てみたんだ」

再会できた喜びの次には、重い現実が圧し掛かった。同一名の別人ではなく、あのバートレットがここにいる。その意味することは、つまり――

瞬間、感じた絶望に声が震える。しかし、それは気付かれなかったようだ。

「ああ、本当だとも。だから今、ここにいるってわけだな。だが妻は今、療養のために離れた町の別宅へ行っているんだ。……生来、身体が弱くてね」

そこでバートレットは初めて彼女に目を留めた。

「こちらの美人な娘さんは？」

「ああ、商売のパートナーなんだ」

「人生の、ではないのかな？」

普段のマシュウであれば、しどろもどろになり、慌てて否定したところだろう。しかし、今は演技をしなければならなかった。

「将来的にそうあって欲しいと思っているんだけど、なかなか良い返事をもらえないんだ。今の俺ではまだ認めてもらえないらしくてさ。バートレットからも言ってくれないかな？」

滑るように嘘が口を突いて出る。説得力のある表情やしぐさもお手の物だ。言いながら、軽く少女の肩に腕を回した。隣でマディカ

が白い頬を、かぁっと淡い朱に染める。

「そうか、マシュウの交渉術をもってしても難しいとはな」

微笑みながら二人を穏やかに眺める男は、実に柔和な雰囲気で、とても人殺しをするようには見えない。

「バートレット、今は仕事は？」

勧められるままに再び座り直し、濃厚な香りを放つ果実酒を手渡されながら、マシュウは訊ねた。

「商人としてのということなら、続けているよ。妻の父は、この街の領主だった。けれど私達の婚礼の後、すぐに亡くなってしまった。それで地位や財産は全て引き継いだけれどね」

手に持った酒をぐいと呷り、バートレットは饒舌に続ける。

「おかげで周りからは相当な変わり者と言われている。それでも、長年身を置いた世界からは離れ難いものだ。それに私は、商人である自分に誇りを抱いているのだよ。自分の力で得たものが多いからね。それはお前も同じだろう、マシュウ？」

「ああ、もちろん」

マシュウも酒で舌を湿らせ、更に続ける。

「俺がアトレスで抜けた後は、どうしてたんだ？　つまりその、師匠……アンガラードは今はどこに？」

「それは残念ながら、私にも分からない。お前と別れて、更に一年近く経った頃かな、私達も別の道を行くことになったんだ。アンガ

ラードは船に乗って、外洋へと出て行ったよ。新しい土地で新しい物を見つけるんだと息巻いてね。あの女性(ひと)は、商人と言うよりも根っからの冒険家だったよな」

その様子が脳裏に浮かんだのだろう、悪戯な子供を愛しんで笑うように、バートレットは目じりに皺を寄せた。

「外見に似合わず、ね」

マシュウもそれには同意し、苦笑する。

一見、穏やかに打解けた会話をする彼らと同じ部屋にいながら、マディカは緊張していた。意識して緩めようとしても頬が強張った。マシュウとバートレットの会話もなかなか耳に入らない様子だ。

マシュウがふと目の端でマディカを見た。少女は慌てて唇の端を上げてみせる。

それを旅の疲れと取ったらしいバートレットが、気遣いに溢れた申し出をした。

「お嬢さんはお疲れのようだね？　身体は大切にしないといけない。すぐに部屋を用意させよう。いいんだ、何も言うな。数日はゆっくりしていってくれなくては」

最後の言葉は、二人に向けてだ。

すぐに整えられた客室へと案内された。その部屋も、二人では持て余すほどの広さがあり、やはり一級品と思われる品々で豪華にまとめられていた。

屋敷の主人自ら部屋まで付き添い、よく休むようにとだけ言い残してバートレットは姿を消した。そのはっきりした足音が遠ざかり、部屋に静寂が満ちた頃、マシュウが大きな溜息をつく。

「ふー……、変に緊張したなぁ」
「マシュウはそんなふうには全然見えなかったわ」
広いベッドの端に遠慮がちに座り、マディカも肩の力を抜く。やっとで軽く微笑む余裕もできたようだ。
「でも、本当にあの人が？　そんな感じには見えなかった」
「俺も信じたくはないけど……でも、何としても確かめなきゃいけない」
実際、再会した今はなおさら信じたくない気持ちが勝っている。けれどここに、エシエテの領主という立場でバートレットがいるということは、紛れも無い事実であって――つまりは、マディカ達の故郷に関わっていることはもはや疑いの余地もないということだ。
そして彼は、今でも商人としての仕事を続けていると言っていた。なのにその首には、以前は常に身に付けていた、あの鈍く光る護符を提げている様子が見受けられなかった。
それを思い、気付かず唇を噛み締める。
「とにかく皆が寝静まってから、屋敷内を探ってみよう」
「そうね。本当に、ここにザカリアがいると思う？　それに」
マディカが一番心配しているそのことを、マシュウは痛いほど分っていた。だから、あえてそれを声に出して伝える。
「バートレットが犯人なら……そしてそれがここにいるなら、きっと同じ敷地内にいるはずだ。商人ってのはさ、最後の切り札は絶対手元に置くもんなんだ。大丈夫だ、ザカリアは生きてる。犯人の目

的は、紋を取り返すこと。それならザカリアに聞き出すか、それができないなら人質にして他の者に紋の在処を教えろと迫るはずだ。あいつがそう簡単に口を割るとは思えない。だとしたら人質になっている、絶対に」

……（3）

マシュウとマディカがエシエテに辿り着く、その数日前、港街アトレスの一角にある小さな家。

明りを吹き消し、寝床へ潜り込んでまどろんだところで、デレクは扉を激しく叩く音に起こされた。あまりにも常識外れなその訪問者を、口の中でブツブツとぼやきながらも迎える。

「まったく誰だよ、こんな夜中に大騒ぎして」

まだ完全に覚めきらない頭を掻きながら、扉を薄く開き、隙間から外を覗く。そこには、肩で息を切らせた見知らぬ男が立っていた。目をこらしてよく見ると、その背後にも、もう一人。

「……誰だ？」

見たこともないよな、と首を傾げると、背の高いほうの男が口を開いた。高いとは言っても、デレク自身もかなりの長身のため、頭の位置はほぼ同等のところにあった。

「デレクって、お前さんか？」

「そうだけど、あんたらは？」

訝しがる口調で返すと、突如、目の前に鎖に通された紋がぶら下がった。

「俺の名はスライ、こっちはカーチスだ。マシュウの知り合いだ」

とりあえずは物盗りなどではなさそうだと、デレクは扉を大きく開きながらも、念を押して確認する。

「マシュウって、あのマシュウ？　赤毛でチビで甲斐性なしの？」

この場に本人がいたら憤慨しそうな物言いだ。チビと言うのも、あくまでもデレク目線からに過ぎないのだが。

それを聞いて、スライは困ったように眉根を寄せる。

「お前さん達、友人じゃないのか？」

「あ、や、友人と言えばまぁそうだな。気にしないでくれ。こういう仲なんだよ。ああ、この紋は間違いないな、あいつのだ」

それを指先で摘んで確かめた後、二人を中へと招き入れる。

「明日になるまで待つべきだったんだが、とにかく事情が事情なものでね」

勧められた椅子に腰掛けるのももどかしく、スライは説明を始めた。必要最低限のことを、しかし、今彼らが置かれている状況が一刻も争うことを丁寧に伝える。話し終え、例の護符を静かにテーブルの上に置く。金色のそれが、鈍い光を放った。

眠りから完全に頭が覚醒していないこともあり、始めはまともに聴いていない様子のデレクだった。しかし、スライがもう一つの紋を木のテーブルに置いた時点で息を呑み、それを手に取り、矯めつ眇めつした。

「へえ、こりゃあ確かに……。どうやら作り話じゃなさそうだな」

顔を上げ、改めて目の前の二人を慎重に眺める。ずっと休まずに馬を飛ばして来たらしい、その姿は随分とくたびれていた。
もう一度、マシュウの紋を確認してからデレクは呆れたように鼻を鳴らした。

「しっかしなぁ、この紋は商人にとっては全財産と同じくらい貴重な物なんだぜ？　まともな奴なら、絶対に他人に貸与したりしないもんだ。あの馬鹿者が」
「マシュウは馬鹿じゃない」

その静かな一言は、カーチスだった。

これまで黙っていた人物からの思わぬ否定に、デレクは右の眉を上げ、肩をすくめて見せる。

「いいや、馬鹿だね。馬鹿が付くほどのお人好しだ。まぁ、よっぽどあんたらを信用してるってことか」

それから膝を大袈裟に叩いて立ち上がり、スライとカーチスに向き直り。

「よし、分かった、紋はオレに任せろ。あんたらはどうする？　また追われても何だし、どこかにしばらく隠れてるか？　あまり人が行かない交易所の倉庫を教えてやってもいいぜ」
「いや、好意は有り難いが、俺達もすぐにエシエテに向かおうと思う」
「これからまたすぐに？　今までずっと休まず来たんだろう？」
「ああ。だが俺達二人だけ安全なところでのんびりなんてしていられない。一座の団員を迎えに行く。……三人のな」

固い意志が含まれたその一言に、デレクは少し待ってろ、と言い残し、寝室へと向かった。それからすぐに、小振りの短剣を手に戻って来た。

「何も無いよりかはマシだろう、護身用に持っていけよ。以前、遠方に旅したって奴が、そこで物珍しさにつられて買ったってやつだ。その地はそういった類の品で有名だったらしくてね。確かに良い作りなんで受け取ったけど、オレには用の無いシロモノだからな」

スライが受け取ったそれを鞘から少しばかり抜くと、磨き上げられた刃物が鋭く光った。

「色々と礼を言う。できれば、これは使わずに返しに来たいところだが」

「いいって、やるよ。その代わり、全員を無事に連れて帰って来いよ。これがあいつの形見になるなんてことは、オレとしちゃごめんだぜ」

そう言ったデレクの手には、マシュウの紋が握られていた。

……（4）

人の動く気配がなくなった真夜中。
二人は、静かに部屋を出た。蝋燭一本のみを頼りに、暗い廊下へと踏み出す。

「どこを探すの？」

小声で少女が囁く。

「外だ。馬車がどこかにあるかもしれない」

それに、同じく囁き声で答え、マシュウは足音を忍ばせて階段を下りる。堂々と正面玄関から出るのも憚(はばか)られ、一階の奥にある食堂を通り、更にその奥、炊事場の勝手口から外に出た。

辺りは完全な暗闇で、しかも不気味なほどに静まり返っている。広大な敷地の屋敷全体が深い眠りに落ちている、そんな雰囲気だった。

自分達がここへ到着した時に、預けた馬が連れて行かれた方向を目指す。厩の近くで、もしかしたら何か見つけられるかもしれない、と思ったのだ。

「誰もいないのね。こんなに大きな家なのに」

マディカがそのことに違和感を覚え、不安気に辺りを見回した。
小さな石がしっかりと敷き詰められた広い庭の端を横切り、さらに少しばかり進む。すると、低い立ち木の林の奥に、それらしき小

屋が見えた。

「あった、厩だ。でも、馬車はなさそうだな」

その周りを一通り確認するが、求めている馬車の姿はなかった。いくぶん落胆しつつも、改めて厩に目をやり、それに気付く。微かだが、中から明りが漏れている。

「誰かいるのかしら？」

その意味することを、そしてその疑問を、マディカが口にした。半分は恐れ、半分は希望を含んだ声音で。

「俺が先に様子を見るから」

少女を背後に隠し、戸に手を掛ける。ほんの少しだけ押して、片目で中を覗く。傾斜のある天井から、ランプが一つ下がっているのが見えた。

その下には、本来あるべき馬の影はない。しかしその一番奥で、何かが動く気配がした。緊張に身体を強張らせる。更に目を凝らす。それが再び身動ぎした拍子に、見慣れた小麦色が揺らめいた。

「！」

それを認め、息を潜めていたことも忘れ、戸を大きく開け放つ。すぐさま駆け寄り、身を低くしてその安否を確かめる。

その人物は酷く憔悴している様子で、壁に寄り掛かる姿勢で座っていたが意識はあるようだった。

至るところに目立つ痣があり、左手で右腕を庇っている。相当痛めつけられたらしい。普段はしっかりと整えられている衣服も無造作に皺が寄り、束ねていた髪も解けて顔に濃い影を落としている。
マシュウはその変わり果てた姿に一瞬、言葉を失ったほどだ。

二人を見た彼は、複雑な表情を浮かばせた。眉が険しく寄せられる。しかしマディカはそれに構わず、足をもつらせながらも進み、その頭を必死に掻き抱いた。

「ザカリア、よかった、ザカリア……！」

喉から搾り出すように、やっとの思いで何度も名を呼ぶ。

「マディカ？」

普段と違う雰囲気の少女に、ザカリアは驚いたらしい。しかし、それも一瞬だった。すぐに彼女の肩を押しやり、早口に警告する。

「ここにいてはいけない、すぐに」

そこまでしかその言葉は続かなかった。
背後から手が伸びて少女の細い首を掴み、力任せに引き寄せたのだ。

そこに立っていたのは、バートレットだった。同じ日の夕刻に彼らを迎えた人物とは思えない、黒い影。あれほどまでに表情豊かだったその顔は、今や感情というものを全て拭い去ったかのようだ。歪んだ口が開かれる。

「私が気付いていないとでも思ったのか？　旅芸人達に加わった赤

毛の男のことは聞いていたが、本当にお前だったとはな、マシュウ」
「バートレット……！　マディカを離せ！」

その姿を認めるや否や、マシュウは声を荒げた。
手加減なく首を絞められ、声を上げることも叶わない少女の様子に、ザカリアは全身の痛みを忘れて立ち上がろうとし、顔を苦痛に歪める。

マシュウはとっさに服に隠し持っていたものを握りしめた。そしてそれを翳す。掌の上の物に繋がった鎖が軽い音を立てて、空(くう)に揺れた。

「あんたが探してる物なら、ここにある！　だから離すんだ！」

己に向かって前に突き出された物を、バートレットは一瞥する。一瞬、金色がランプの光を反射して煌いた。それをよく確認しようと身を乗り出すと、マシュウは素早い動作で手を引いた。

「マディカを離すのが先だ」
「……いいだろう。どこへ逃げるということもできないだろうしな」

緩慢な動作で手を離し、少女を前に突き飛ばす。それを受け止め、マシュウはひとまず安堵の息を吐いた。

「その男から紋の在処を聞き出そうとしている時に、お前達が来てな。もう少し遅ければ、今頃は五体満足ではいなかっただろうに、運が強いことだ」

愉しむ口調で言い、低い笑い声で喉を鳴らすかつての兄弟子に、マシュウは背筋が凍りつくのを感じた。

「バートレット……じゃあ、本当に……本当にあんたが、村の人達を殺したのか？」

ほぼ疑いの余地はないと確信しながらも、訊ねずにはいられなかった。たとえわずかながらの可能性であっても、否定して欲しいという希望をいまだ抱えていたのだ、心の隅に。

しかし、それはやはり無意味なものだった。光を全く通さない暗い闇の目でマシュウを冷ややかに見下ろすバートレット。その口から出た言葉は、はっきりとした肯定だった。

「ああ、殺した」

その短い一言が、全身の血を泡立たせた。感情がほとばしる。

「何のために！？　彼らは約束を守って金を渡したはずだ、なのにどうして！」

「そう、金だ。その金を見たとたん、虚しくなったんだよ。私はアンガラードから聞いた話を間違って解釈していたんだ。いや、おそらく、お前もだろう？　だから旅芸人達に近付いたのだろうからな」

そこでバートレットは、マシュウの背後の二人に目をやる。そして続ける。

「そこは、金になるものがあるような場所ではなかった。失望したよ、苦労して探し当てたのにな。それで思いついたのが、金を納めさせるって方法だった。都合よく言い寄ってきていたここの一人娘と結婚して、領主にまでなってね。そうまでして手に入れられたのは、取るに足りない、わずかな金だよ」

微かに溜息を吐き、首を軽く振る。
マシュウ達は、無言のままだ。

「自分は一体、何のためにそこまでしているのかが分からなくなった。虚しくなった。どんなことをしても、望むものは手に入らない」
「望むもの……？　あんたは妻と地位と金、全て手に入れたじゃないか。まだ何が足りないって言うんだ？」
「簡単だよ、一つだけだ、私が望んだのは、アンガラード。ただそれだけだ」

「……！」

マシュウの脳裏に、その姿がはっきりと浮かぶ。
出会った当初、まだ年端も行かない子供だった自分から見ても美しいと思えたその女性。しかし、彼女が求めていたのは、誰かのものとなり家庭に落ち着くような生活ではなかった。自分には自由が性に合っていると言って、いつか微笑んだのを覚えている。

「だが、それだけは手に入らなかった。それ以降、私はその埋め合わせに様々な物を求め続けた。金、名声、人々の羨望。何をどれだけ得ても、満足することは無かった。しかし、その金を届けに来た二人は、これで村が自分達の手に戻ると言って、実に幸せそうだった。私が手に入れているもののうちの一つも持っていない二人がだ。信じられなかったよ、あんな小さな何も無い村での生活、それだけなのになぜ……ってね。そして娘は、髪や目の色は違えど、勝気な面差しがどことなく似ていた、彼女に」

ザカリアが声に出さずに何かを呟く。それは恐らく、最も愛した娘の名。

「だから私は、今度こそは手に入れようと思った。力ずくでも。邪魔をしようとした父親を黙らせ、娘を……。だが彼女は頑なに拒絶し、そして叫んだんだ、私ではなく他の男の名を！」

マディカは両手で口元を覆い、声を押し殺して泣いている。その娘が男の力に抗いながらも必死に助けを求めた相手は、分かりきっている。届くはずの無い声。それでも、叫ばずにはいられなかった。

「そんな勝手な理由で二人を！」

ザカリアが噛み締めた歯の隙間から、苦悶の呻きを上げる。自分の名を呼ぶ悲痛な声が今にも聞こえるようだった。

バートレットは相変わらず無感情な暗い目でザカリアを見下ろす。まるで興味がないと言いたげに。

「それで気付いた、これは私のアンガラードではない、と。だから殺した。また、手に入れられなかったんだ。この哀しみがいかほどだったか、お前達には解るまい？」

それから冷ややかにせせら笑うと、マシュウへと手を差し伸べた。

「さぁ、これで知りたいことは全て話しただろう？　その紋を返してもらおうか。あの時、紋を奪われたことに気付かなかったのは我ながら愚かだったよ。それだけは本当に悔やまれる」

その場の全員の視線が、マシュウに集まった。厳密に言えば、その握り締められた手に。ことの全てを知り、虚ろな赤い目が、ザカリアとマディカを捉える。二人も真っ直ぐに視線を返す。そしてマディカは無言で瞳を長い睫毛に隠し、ザカリアは否定するように首を、力なく横に振った。しかし――

「わかった」

再びバートレットに向き直り、ゆっくりと前に進み、手の中のそれを渡した。金色に光る小さな護符を、引きつった笑みで確かめたバートレットの顔が愕然となる。

「これは……違う！　紋じゃない！」

マシュウが持っていたもの、それは形も大きさも酷似こそしているものの、素材は安物で、裏には何も彫られていない単なる護符だった。シクアトロで手に入れた、あの護符だ。

「あんたの紋はここにはないよ。今頃、ギルド本部へあんたのしたことと共に届いてるはずだ。全てが世間に曝され、ギルドからは除名される。これまで築き上げてきた商人としてのあんたはこれで終わりだ。それに、当然ここにも居られなくなるだろうな」

ゆっくりと護符から上げられた顔は、絶望、恐怖、そして憤怒に染まっている。

「俺も殺すか？　バートレット」

感情を含まない、低い静かな声音でマシュウが問う。今にも自分に飛び掛かりそうな形相の相手を前に、不思議と気持ちは落ち着いていた。

これでかつての兄弟子の全てが終わった。そして旅芸人達の旅も。彼らは、彼らの手に戻った故郷に帰れる。

けれど、自分は？　自分には何も残らないかもしれない。

それでも構わないと思った。これまで行動を共にした仲間達の苦しみが終わるなら。

自分を睨め付ける、憎悪の鋭い眼差しを真っ直ぐに押し返した、その時。

突如、外から騒がしい物音が響いた。

……（5）

何事かと、開け放たれた戸に素早く視線を走らせる。断続的な、馬の蹄が地を駆ける音に、くぐもった叫び声が何度か入り交じった。バートレットが入口に駆け寄るのと、伸びた男が中に投げ込まれたのはほぼ同時だった。マシュウはその顔に見覚えがあった。

レセィスで見かけたあの男――

「これで全部か？」

手を叩きながら中に足を一歩踏み入れたのは。

「スライ！」

ここにいるはずのない人物の登場に、マシュウは思わず素っ頓狂な声を上げる。

「なんでここに！？」

「アトレスへ行って、すぐにこっちへ向かったんだ。リーダーが団員を放ってのんびりしてるわけにはいかないだろう？」

「この伸びてる奴は？　それにさっきの物音は？」

「この小屋の周りを数人が取り囲んでいてなぁ。すぐにピンと来たんだ、中にお前さん達がいるってな。だから、一人ずつ片付けたってわけさ。一気にまとまって来られちゃ敵わないが、一対一でなら引けは取らないってもんだ」

その背後に、カーチスも追いついた。その手には、鞘に納められた小型の剣が握られている。

「もう一人残ってたから……これで殴った」
「って、カーチスまで！？」

仲間の功績にひとつ頷いて見せた後、スライは真っ直ぐに、奥の二人の元へ向かった。バートレットには目もくれずに。

「スライ……」

いまだ目に涙を溜めたマディカの頭に安心させるように手をやる。それから数日振りに再会したザカリアの様子を片膝を付いて確かめ、表情を曇らせた。

「来るのが遅くなってすまなかったな」

その広い肩を貸し、彼を立たせ。そこで初めて、バートレットにしかと向き合う。

「おい、うちの団員を返してもらうぞ」

バートレットは、既に放心しているようだ。取り戻せると踏んでいた物は既に然るべき場所へと届けられ、身を守るはずだった者達の助けも期待できない。
頭上から呼びかけられ、その場に崩れ落ちたまま、無言で声の主を見上げた。

スライが戸に向かって進み、カーチスの隣りを過ぎた時。それまで大人しく従っていたザカリアが、突如カーチスの手から短剣を奪い取った。

渦巻いた激しい憎しみに突き動かされる。折れた腕の痛みすら構わず素早くそれを抜き放ち、仇の頭上に左腕で翳した。躊躇なく一気に振り下ろされるだろうと思われたそれは、しかし、対象を貫くことなく動きを止める。あとわずかでその皮膚を破ろうかという位置で。

「……殺すなら殺せ。こうなってはもう、生きている意味もない」

自分に向けられたそれを虚ろな目で眺め、物静かな口調でバートレットは呟いた。剣を持つザカリアの手がびくりと震えた。歯を食いしばり、再び、遣い慣れない腕に力を籠める。

マディカは息を殺し、スライは止めることなく成り行きを静かに見守っている。カーチスも然りだ。
マシュウはその中でただ一人、ザカリアではなくバートレットに目を向けていた。

――己の私欲の為に、順風満帆だった人生を踏み外した男。

同情の余地はない。しかし、それでも哀れみを感じずにはいられなかった。それは全てを失ったことでも、命を奪われることでもない。歪んだやり方でしか人を愛せなかったことに対しての哀れみだ。

「……っ！」

ザカリアの口から声にならない呻きが漏れ、俯いた頬に、幾筋もの涙が伝う。やがてゆっくりと、振り上げた腕が下ろされた。指先から、鋭い光が零れ落ちる。

「殺せ、だと？　ああ、何度殺してやっても足りないくらいだ！

けれど……死んだ者は何をしても戻らない」

噛み締めた歯の奥で唸る。

「貴様は生きている価値も無い人間だ。だが死んで何もかもが楽に終わるなんて思うな、死んで逃げるなんて赦さない！　それよりも重荷を背負ったまま這いつくばって生きて、罪を贖え！」

そう一気に吐き捨て、ザカリアは虚ろな足取りで闇に姿を消した。その目には、周りのものの何も映っていなかった。慌てて呼びかけようとしたマディカを、スライが前に立って止める。

「少しそっとしておいてやれ。俺達が支えてやらなきゃならないが、今はただ、気持ちを整理する時間を与えてやるべきだ。カーチス、無意識にどこかに行かないようにだけ気をつけてやってくれ。今はきっと、何も見えてないんだろうからな」

スライの言葉に微かに頷いて応え、カーチスはすぐにザカリアの後に続いた。

その背中を見送り、マシュウは、バートレットの傍らに落ちた短剣を拾い上げた。スライを振り返る。それを手渡すと、彼は受け取ったそれを音もなく鞘に納めた。マシュウはもう一度、足元にうずくまったその人物を見下ろす。

「バートレット」

静かに呼びかけると、肩が微かに震えた。

「俺達は、あんたを殺さない。それをすれば、あんたと変わらないからだ。けどあんたのやったことは、絶対に赦されることじゃない。

それを忘れるな」

一言一言を噛み締めて、ゆっくりと告げる。

そしてそれに対する返答を待つことなく、その場を後にした。一瞬、低い嗚咽が風に乗って聴こえたような気がした。

マシュウは唐突に頬が軽く濡れるのを感じ、それを乱暴に掌で拭った。

第6章　不可触の黄金……（1）

「お前、二度とこんな馬鹿するんじゃねぇ！」

デレクの家を訪れたマシュウに対しての家主の第一声は、それだった。目の前に突き出された自分の紋を、マシュウは渋い表情で受け取った。

「こっちも必死だったんだよ」

紋の鎖を首にかける。久しぶりに戻ったそれを服の上から軽く撫でると、じわりと安心感が広がった。

「ったく……。でも、無事でよかったよ。オレの顧客が一人減るかと思って、心配してたんだぜ」

「顧客って言っても、それが減ったところで別に仕事に支障はないだろ？　給金に違いが出るわけでもなし」

「まぁな、そりゃそうだ」

「仮にそうだとしても、俺がいなくなったくらいじゃ、せいぜい朝食のチーズが一切れ減るくらいじゃないか？」

「いやフツーそれを自分で言うか？」

いつもの軽口を叩き、二人はどっと吹きだした。これまでの緊張が一気に緩み、目尻に涙が浮かぶほど笑い合う。

それが落ち着いた頃、デレクは改めて、当然の疑問を口にした。

「しかしお前、なんでまた旅芸人と一緒にいたんだよ？　荷馬車なくしたところで、新しく買えばいいだけの話じゃないか」

その質問に、マシュウは軽く肩をすくめて見せる。

「いやぁ、ちょっとした気分転換で」

「転職か？」

「は？」

「だって、あのデカいのが言ってたぜ、団員三人を迎えに行くってさ。それ、お前混みだよな？」

己の背の高さを棚に上げて言いながら、デレクはその人物を肩越しに親指で示した。

「え、まさか」

マシュウはそれを辿り、窓の外に目を向ける。そこから覗く、家の脇を走る路地。そこには、取り戻した馬と馬車の手入れをするスライの姿があった。マディカが隣りでそれを手伝っている。

穏やかな表情を交わす二人に、マシュウも心底安心して、一人微笑む。

「その場のノリでそう言ったんじゃないか？」

「ノリって何。いやいや、そんな冗談言うようなごきげんな状況でもなかったぜ？」

デレクは納得のいかない様子で口をへの字に曲げる。

「ところでデレク。ギルドへ紋を届けてくれたんだよな、ありがとう」

ふとそのことを思い出し、マシュウは真面目な口調で礼を述べた。それにデレクも、はっきりと頷いて見せる。

「ああ、預かってから朝一で。ギルドの主人も驚いてたよ。まさかあのバートレットがってね」

それを聞いてマシュウは、俯き床に目を落とした。

バートレットは、商人としての腕もかなり立ち、仲間内でもその名は有名だった。傍から見れば、彼の人生は文句のつけようがないほど恵まれたものであったはずなのに。

静かに物思いに耽る友人に、デレクが再び軽い様子で訊ねた。

「お前はこれからどうするんだ？　冗談抜きで転職するのか？」

「なわけないって。また交易の繰り返しの、代わり映えのしない毎日に戻るよ」

マシュウもそれに合わせ、ふざけた調子で返した。

黄金（きん）の溢れる理想郷を見つけてロセロを発展させる、という計画は失敗に終わった。しかし、それで落胆はしていなかった。また元の状況に戻っただけだ。これからも行商を続けながら、故郷のためになる何かを探せばいい。それを諦めてはいない。

もう一度窓の外に視線を走らせる。

それからデレクをその場に残し、自分も馬車の具合を確認しに表に出た。

見上げると、破れていた幌も直され、すっかり元通りになっている。

「もうすぐにでも出発できそうだな。準備は万端なのか？」

そこから目を離さずに訊ねる。

「ザカリアとカーチスが戻り次第だな」

それに答えたのはスライだ。見渡すと、そこにいるのは二人だけだった。荷馬車とそれを牽く黒馬の姿もない。

「今、旅するのに足りない物を探しに行ってるの」

マシュウが辺りを見回した意味を素早く悟り、マディカがスライの答えに添えた。ブラシで愛馬のたてがみを梳いている最中だったようだ。ロホはその太い首の力を抜き、気持ち良さそうにうっとりと目を閉じている。邪魔されたのを快く思わなかったのか、尻尾を大きく揺らし、それがぴしりとマシュウの腕を打った。それを手で払いながら言う。

「この街は大きいから、大抵の物は揃うよ。すぐに見つけて帰って来るはずだな」

「おっと、まだ足りない物があったな。よかったら二人で買いに行って来てくれないか？」

幌馬車の中を、最終的な確認のために見回していたスライが、二つ三つほど簡単な物を挙げた。それらも旅に必要な日用品の類だ。快諾したマシュウはマディカを伴い、緩やかな下り坂を市場目指して降りて行った。

あのエシエテでの晩から、早くも十回ほど朝を数えていた。あの後、しばらくはほとんど口を開かなかったザカリアも、ようやく仲間の呼び掛けに応えるようになっていた。それでもまだ、言葉数は極めて少なめではあったが。それに、いまだ笑顔を見せることもない。

心配したマシュウにスライは言う。誰も他人の傷を代わりに背負うことはできない、本人の力を信じるしかない、と。けれど見守って、必要な時には手を差し伸べて助けることはできる、そして自分達はそれを惜しみはしない、とも。

「あいつは長と娘が亡くなってからというもの苦しみのあまり、一度も泣くことすらできなかった。それがやっとできたんだ。あと必要なのは、十分な時間だ」

そう呟いてスライは、目を細めた。

「この街で初めて一緒に公演したわよね」

マディカの声に、ふと、我に返る。

「そうだったな。なんだかもう、ずいぶん前のことに感じるよ」

「私も。不思議よね」

以前に泊まった宿の前を通る。そこを通り過ぎながら見上げて、マディカは何かを思い出したようだ。考え込む表情で言葉を切る。そして、おずおずと言った口調で、そっとマシュウに訊ねた。

「聞いてもいい？　マシュウが前に寝言でごめんなさいってずっと言っていたのは、どうして？」

その思わぬ質問に、虚を突かれる。

「覚えてたのか、それ」

「うん。あまりにも真剣なかんじだったから。でも、言えないこと

ならいいの。ただ少し、気になっただけ」

遠慮がちに足元に目を落としたマディカに、マシュウは夢のことを思い出しながら答えた。

「師匠にさ、謝ってたんだ」

夢に見た、遠く離れてゆく馬車上のアンガラードがはっきりと脳裏に浮かぶ。

「マディカ達の故郷のことを、師匠から聞いたってのは言ったよな。一度だけ、師匠が珍しく酒に酔った時にその話を聞いただけだったんだけど。師匠はそこを黄金（きん）の溢れる理想郷だと言っていた。なぜそう呼んだのか、今となっては分からないけどさ。何はともあれ、言葉通りに取ったわけだ。俺も、それにその、バートレットもね」

その名を出す時、わずかに口ごもった。マディカはそれに動揺することもなく、じっと聞き入っている。

マシュウは続ける。

「ただ、師匠はこうも言っていたんだ。そこには絶対に手を出してはいけない、そこを壊してはいけないって。その口調は真剣だった。本当に冗談じゃなく、抗い難い雰囲気でさ。俺は、師匠を本当に尊敬してたんだ。だから、その意志に反することはしちゃいけないと思ってた。なのに、それを破った。そのことをずっと謝りたかった。俺は、焦ってたんだ。毎日毎日仕事をこなしても、目標までは程遠くて」

「そうだったの」

マシュウが抱えていた罪悪感の理由を知り、マディカは小さく頷

いた。

「そう言えばスライから聞いたことあるわ、前に村に来たっていう女の人のこと。私はまだ本当に子供だったから、覚えてないけど……。それがもしかしたらマシュウのお師匠様なのかしら？　黒髪で、とてもきれいな人だったみたい」

スライの言葉をなるべく正確に思い出そうとしているのか、マディカはそこで一度、上目遣いに空を仰ぐ。

「その人は私達の村をとても気に入って、しばらくは一緒に生活していたんですって。大きな街にあるような技術や発展はないけれど、そういうところの人達が忘れかけている大切なものがあるって言って。それに、実った麦畑や、私達の髪の色をまるで黄金のようだっていつも褒めていたそうよ」

「……！」

そういうことだったのか、と、隣りを歩く少女の髪を振り返った。一時的に黒く染めていたそれは、今はもうすっかりもとの明るさを取り戻していた。

「はは、あの人らしい例え方だ」

彼女の言葉で、全てが解けた。

黄金、理想郷、そして、そこに手を出すなという言葉の意味。

バートレットが言ったように、そこはきっと、金になるものがあるような村ではないのだろう。

しかし、そこには昔から脈々と伝えられ、守られている独自の文

化や思想があった。そして何よりも尊重すべきは、争いや戦うことを知らない平和な人々の存在で――だからこそ、そこを守るべきだとアンガラードは考えたに違いない。

その村は本当に素晴らしいところだった、という彼女の声がいつまでも忘れられなかった。ずっとそれを違う意味で捉えていた。

しかし今後その声を思い出す時には、溢れる黄金（きん）などの光景は浮かばないはずだ。そこに住む人々の優しい面影に取って代わることだろう。

……（2）

街の名物でもある大通りの賑やかな市場に着き、スライに言われた物を調達する。そしてそれを抱え、来たばかりの道を辿った。

そろそろ馬車の元に帰り着くという頃、マシュウは、軽やかな足取りで隣りを行くマディカに目をやった。

言わなくては、と思う一言があった。それは別れの言葉だ。

彼らのために自分がすべきことは、もう金輪際、彼らには関わらないことだと感じていた。そして、彼らと彼らの住む村のことを、一切、口にしないことだと。

準備が完全に整い次第、皆はすぐに懐かしい故郷へと発つ。そして村の存続を脅かすものが無くなった今は、もう旅回りをする必要もないはずだ。以前と変わらず、満ち足りた毎日を送ることに違いない。

坂の上に、見慣れた荷馬車の姿が覗いた。どうやらこれで全員が揃ったらしい。

元気で――

月並みな別れの挨拶だが、それが一番だろうと考えた。さようならと言うのは、どうもその場が湿っぽくなってしまいそうで良くない。できることなら、笑って別れたい。それが今生の別れであっても。

「お疲れさん」

戻った二人を迎え、スライは片手を上げた。

「さぁ、乗った乗った。日が高いうちに出たほうがいい」

それにマディカはすぐに従った。幌馬車に乗り、その場から動かないマシュウに気付くと、不思議そうに首を傾けた。

「マシュウ？　どうしたの、乗って」

「俺はここに残るよ」

一歩下がって、馬車が通れるように道を開ける。

元気で。

いよいよその一言を声に出そうとした時。

「何言ってるんだ、お前さん、まだ自分の馬車がないんだろう？　どうやって商売するんだ。いいから乗れって」

スライがさも当然だと言わんばかりに促す。全てを明かし、マシュウが馬車を簡単に工面できることを彼は知っているはずなのに。

驚いて御者台のその顔を仰ぎ見ると、例の、人をからかう笑みとぶつかった。

「いや、でも、俺は……！」

たじろぐと、今度は背後の荷馬車から声が掛けられた。カーチスだ。

「マシュウは、僕達の故郷を探していたんだろう？　……なら、来ればいい」
「来ればいいって、けど！　俺は自分の都合で利用しようとしてたわけで」
「あ～、なんだそのことか。言っただろう。それはお互い様だって」
膝に肘を付き、手で顎を支えた緩い姿勢で、スライが軽くさらりと言う。今さら負目を感じるようなことでもなしに、とその表情は語っている。
「それはそうだけど、でも、それはそうとして何と言うか！」
いつまでも反論しそうなマシュウを、それまで黙っていたザカリアが遮った。
「マシュウ、もしできるならもう少し、わたし達につきあってくれないか？　わたしの腕が治るまではオラも弾けなくて、人手が足りなくなる」
これからは寄り道もせずに帰郷するはずだ。人手不足というのももちろん口実に過ぎない。
だが彼はそう言って、いまだ自由にならない利き腕を示し、淡く口元を緩めて見せた。あの日以来、初めてのことだ。
呆気に取られていると、マディカがそっと手を伸ばした。
「そうよ、お願い。だから一緒に来て。それに私達の故郷を見て欲しいわ。あなたのお師匠様が褒めてくれたところだもの」
差し出された手と、その笑顔を順に見比べ。困ったような、驚いたような、様々な感情が入り混じった顔をし。

「分かった、つきあうよ。一緒に行こう」
微笑み、顔を上げて、少女の手を取った。
マシュウがしっかりと乗り込んだのを確認し、スライが手綱を大きく振るって合図する。
「よし、これで全員揃ったな。帰ろう、懐かしい我が家……ティエラへ！」

＊＊＊＊＊

それは長い旅路だった。
いくつもの山を登り、そして下り、時には馬車が通れる道を求めて大きく迂回した。それでも、二頭の馬の足取りは軽快で、疲れる様子すら見えない。本能的に、これが懐かしい地への帰り道だということを察しているのかもしれない。
始めは行き違う旅人と出会うことも多かったが、徐々にそれも少なくなり、最終的にはほぼ皆無になった。
ひときわ高く連なる山の裾をぐるりと回ることによって越えた時。なだらかな土地が、突如目前に広がった。背後には越えてきた山が立ちはだかり、そして地平線の遥か彼方には、白銀に光る広い河が横たわっている。
そんな中に、その村はあった。天然の要塞に守られた地だ。そのために、繰り返されてきた長い年月の間というもの、人目に付くことがほとんど無かったのだろう。

「帰って来たわ、マシュウ、あれが私達の故郷よ！」

馬車から身を乗り出し、マディカが弾む声で告げる。

「えっ、どこ！」

マディカの背後から、彼女が顔を向ける方向へ視線を送る。

夕暮れの薄い朱の色に染まり、その村は幻想的に見えた。石造りの小さな家々の屋根は藁で葺いてあり、それが日の光を浴びて、一面の赤銅色を作り上げている。

建物が規則的に並ぶその中央は、村の広場となっているらしく、そこにいくつかの人影が見えた。こちらを指差し、慌てて家の中へと飛び込む。警戒されているのかと一瞬思ってしまったが、そうではなかった。その人物らに知らされたのだろう、馬車が村に乗り入れる頃には、広場にはたくさんの村人が集まっていた。皆、似たような衣服を纏っている。マシュウも一度袖を通したあの伝統の服だ。

「やっと帰って来たんだね！」

「お帰り！」

「皆無事なの？」

どっと人々が馬車に押し掛け、矢継ぎ早の質問が飛ぶ。スライがそれに一つずつ答えながら、馬車を降りた。途端に周りを取り囲まれてしまう。彼の背が人よりも高くなければ、きっと埋もれてしまったに違いない。

「お姉ちゃん！」

一際高い声が遠くから聞こえた。それにマディカが反応する。
遠くから人の波を掻き分けてやってきたのは、小さな女の子だ。まだ十歳にも満たないだろう。

「お帰りなさい！　ずっと待ってたんだよ！」

マディカが馬車を降りたところで、その腰に縋りつく。どうやら妹らしい、どことなく顔立ちも似ている。マディカも身を低くし、その子供を強く抱きしめた。
その後ろに、わずかに歳を重ねた様子の女が立った。不思議な空気を身に漂わせ、その立ち姿は気品に溢れている。
口元に優しい笑みを湛えるその人物にマディカは気付き、再会を喜び合う。何か言葉を交わすが、声が小さく、周りの歓声に掻き消された。
マディカが頷き、一瞬、マシュウのほうへと目を向けた。しかしすぐにまた目の前の女へと向き直る。
マシュウがふと背後にも注意を向けると、同じく、荷馬車の二人も人々の歓迎を受けているところだった。

長い道のりを経て、やっとで踏みしめた故郷の土に肩の力を抜いたカーチスの元へ、一人の若い娘が駆け寄った。広い額に、意志の強さを感じられる眉。その姿を認めるやいなや、カーチスも腕を大きく広げて、彼女を抱きとめる。
その光景をどこか寂しげに、しかし穏やかな目で眺めるザカリアの隣りにマシュウは立った。

「なぁ、あれってカーチスの」
「ああ、妻だ」
「はいぃ！？」

予想していなかったことに、思わず変な声を上げてしまう。

「カーチスって妻帯者だったのか！？」

「そんな驚くことでもないと思うが」

「ってか、なんで教えてくれないんだよ？」

「訊かれなかったから」

「……」

渋い顔でザカリアを見やった時、件のカーチスが妻なる女性を連れてやってきた。

「マシュウ、フィオナだ」

しかし、フィオナと紹介された彼女はマシュウを見て、一歩後ろへと引き下がった。再会の喜びに赤みを帯びていた頬が、瞬間さっと白くなる。

「カーチス、彼は外の人ね？」

声も強張る。

「マシュウは大丈夫、僕達を助けてくれた」

バートレットの一件があるために、村人達はどうやら外部の人間に対して、今は強い警戒心を抱いてるらしい。それも無理はない、とマシュウは胸中で頷いた。怯えさせないようにと細心の注意を払いながら挨拶をする。

カーチスやザカリアがマシュウに対して親しく接するのを目の当たりにし、フィオナも多少は安心したようだ。恐る恐る、手を差し出した。

「カーチス達がお世話になったのね。ようこそ、ティエラへ」
それから彼女は他の女性に呼ばれ、その場を一度離れた。
「すぐにうちに帰って来てね。村の皆が離してくれたらだけど」
マシュウに対してのものと反して、温かい声で夫に囁き、身を翻す。
その姿が人の中に紛れてから、マシュウはカーチスにも率直に感想を述べる。
「まさか妻のいる身だなんて思いもしなかったから驚いたよ。前もって知らせてくれればよかったのに」
「訊かれなかったから……」
どこかで聞いたことのあるその答えに、マシュウは額に手をあてがい、空を仰いだのだった。

……（3）

一同はまず荷を解く前に、村の長（おさ）という人物の家へ赴いた。

殺された長の後を継いだのは、村人達に選ばれた、年は五十ほどの壮健な男だった。血筋で代々選ばれているのかと思っていたマシュウは、そのやり方が進歩的だと感服した。皆の上に立つ人物は、血ではなく、その人物の持つ器量によって決められるのだ。それも時によっては女が選ばれることもあるという。

スライが淡々と事の成り行きを話して聞かせた。長は、それに時々相槌を打ちながらも口を挟むことなく、静かに聞き入った。全ての説明が終わると、そうか、と短く呟いた。

「お前達には、苦労をかけたな。だが、これで村は救われたわけだ」

長い安堵の息を吐き、その場の全員を見渡す。

そこには、これまで旅巡りをしていた五人と長にその妻、そして先ほどマディカを迎えた女がいた。彼女が長の妻なのだろうか、と初めマシュウは思ったが、そうでもないらしい。マシュウ達がここを訪れてすぐ、奥の部屋から人数分の茶を用意してきたもう一人の女が、長の隣りに落ち着いたからだ。

「まだ色々と訊きたいことも多いが、今日はとにかく休みたいだろう。久々に帰って来たのだからな。お客人も、遠慮なくゆっくりなさるといい」

長のその言葉に、それぞれが思い思いの場に向かおうとした時。

「マディカ」

あの女と連れ立ち、外へ出るところだった少女を長が呼んだ。

「はい」

立ち止まり、呼び止めた人物をマディカは見上げた。自然と他の者の足もそこで止まり、二人の会話を待つ。

「せっかくだから、お客人に村の案内でもして差し上げなさい」

「でも、長」

それに何やら反論しようとしたのは、マディカではなく、その隣に立つ女だ。それを黙って制し、彼は、もう一度少女に向き直る。

「いいから、行きなさい」

それに素直に応え、マディカはマシュウを連れて外に出た。

「長、できることならもうあの子には」

二人を見送った女が、渋い表情で柳眉を下げる。

「分かってる。だが、同じ村の者なら事情も分かるだろうが、彼は何も知らないはずだ。せめて別れを言う機会くらい与えてやるべきだろう？」

それを聞いていたスライは、周りには窺い知れぬ程度に、眉間に皺を寄せた。

外に出てからも何やら考え込んでいたが、前を行く馴染みの二人、

ザカリアとカーチスに声を掛けて止める。

「なぁ、お前達は、マディカとマシュウをどう思う？」

しばらく黙り込んでいたと思ったら突然の質問だ。呼びかけられた二人はその意図が分からず、顔を見合わせた。

「どう……って？」

「マディカがここに帰って来てからどうなるかは、俺達は知っていた。だが、マシュウはそうじゃない。それに、マディカも、今となってはあの誓いを守るのは辛いんじゃないかと思えてな」

いつになく真剣なその口調に、二人も悩みつつも、同意して頷く。

「でも、一度立てた誓いを破ることなんて……」

「問題はそこだ。今さら反故にはできないだろうな」

もっともなカーチスの意見に、スライも神妙な面持ちをする。それに反論はできないまま、少しの間考えていたザカリアが、躊躇いながらも切り出した。

「今度のことは、誰の助けで村が守られたと思う？」

試すようなその問い掛けに、スライが自信を持って言い切る。

「そりゃ、マシュウだろう。あいつの助けがなければ、どうにもならなかった」

「そうだ。そしてマディカの誓いの条件は、もし神の力によって全てが解決したなら、だった」

「！」

その意味に気付き、今度はスライとカーチスが顔を見合わせた。
二人が理解したと、そのことから瞬時に悟り、ザカリアが続ける。

「そしてマシュウは」

その短い一言を、カーチスが継ぐ。

「……神じゃない」
「なるほどな！　かなり強引な話にはなるが、何とかできるかもしれないな」
「――と、思ったんだが、やはり無理な気もする」

自分の発案ながらも、口に出すとかなり滑稽で無謀なことに聴こえ、ザカリアが呻いた。
しかしそれに反し、スライは乗り気だ。

「とにかくやれるだけやってみよう。あとはそれに加えて、本心からのことを長に言って交渉するさ。マシュウには世話になりっぱなしで、何も返していない。あいつの目的も達成するまでは、まだ全てが終わったわけじゃないってな。それを見届けるまで、マディカも同行したっていいはずだよな？」

＊＊＊＊＊＊

翌日、村の広場はお祭り騒ぎとなっていた。
その広場の様子を、いつかどこかで見た光景に似ている、とマシ

ュウは思った。そしてそれが何だったか気付いた。皆と出会ったばかりの頃、カドスの宿屋での夜。あの騒ぎだ。

「ねぇねぇ、外ってどんなところ？」
「なんで髪の色とか皆と違うのー？」
「空飛べるんでしょ？　やって見せて！」
「おじさん、おでこに目ないね」

「……」

微妙な質問を次々と投げ掛けてくるのは、村の子供達だ。
初めはかなりマシュウに対して警戒心丸出しだったのが、一晩でこの変わりようだった。やはり子供は未知のものや人に対して、強い興味を覚えるらしい。

しかし、外のことについてや髪の色などについての疑問はともかくとして、他のは一体どういうことなのか。

「あのな、質問するなら一人ずつ！　それに空飛べるとか、目が額にあるとか、それはどこから出た話なんだ？　それからこれ重要、俺、一応まだ十代だから！　おっさん言うな！　俺がおっさんならスライなんて棺桶に片足突っ込んでるからッ！」

マシュウは決して年よりも老けて見えるというわけではないのだが、子供とは時に残酷なことを言うものだ。しかしそれに対しての返答も、負けず劣らずだいぶ大人気ない。

けれども、周りに群がった子供達はそれくらいではへこたれなかった。背中にぶら下がるわ、腕は引っ張られるわ、彼らにとっては珍しい服や髪に遠慮なく手を伸ばすわで、落ち着いて座っているこ

とすらままならない。

「んーとね、スライが言ってたの。外の人は空が飛べたり、目が三つあったりするんだって～」

「それは騙されてるんだよ。ってか何その嘘。子供騙しじゃないかって、あれ？　それなら大成功しちゃってるし」

溜息を吐き、持って行かれそうになった靴を取り返す。こちらとしては本気で追いかけているのだが、子供達は無邪気なもので、弾ける笑顔に歓声を上げ走り回る。このままでは何もかも根こそぎ持っていかれるかもしれない、と危惧した時。

「大人気だなぁ、マシュウ」

先ほどまで離れた位置でヴィエントを吹いていたスライが背後に立った。そしてその場の子供達に少し離れるように、と身振りで促す。驚くことに、彼らはそれに素直に従った。

「変な作り話で、いたいけな子供を騙すなよ」

取り戻した靴を履き直しながら、背後の人物を肩越しに見上げる。

「子供には夢のある話をしてやったほうが楽しいだろう？」

「目が三つあるとか、どんな夢だよ」

賑やかな子供達から解放され、ぐったりとした面持ちでマシュウはぼやく。それからやっとのことで落ち着いて、その場の全員に振舞われていた料理にありつけた。

何かの穀物の粉で焼き上げた薄いパンや、河で獲れた魚に手を加えたもの、それに瑞々しい果物や麦を使った菓子など、マシュウに

とっては珍しい料理がたくさん用意されていた。

「ところでスライ」

それらに手を伸ばしつつもマシュウは気になっていることを訊ねた。

「今日は朝からマディカを見かけないんだけど、どこにいるんだ？」

いつも近くにいた少女の笑顔がないと、どうも落ち着かない。

昨日は長の言葉通りに、マディカはマシュウを連れて、村を案内して周った。しかしその時の彼女は、どことなくいつもと様子が違っていた。歩きながらも、時々、マシュウの顔を何か言いたげにじっと眺めた。それにマシュウが気付くと、慌てて目を逸らして俯く。そんなことが何度かあった。

そして一番気になるのは別れ際、また明日、と言ったマシュウの言葉には返事をせず、小さな声で告げた一言だった。

さようなら、と。

どういう意味かと訊ねようとした時には、もう背を向けて駆け出していた。

彼女の姿は今、ほとんどの村人が集まっているであろうこの場にも見当たらない。

ざっと見て、数百人はいる中から探そうとすれば見つからないこともあるかもしれない。しかも皆揃って似た容姿で、服装まで似ているのだから。

しかしそれに反して、今のマシュウはかなり目立つ存在だ。こちらが気付かなくても、マディカが気付かないということはないだろ

う。現に、こうしてスライも難なく彼を見つけている。

「あー、そのことなんだがなぁ」

珍しく、歯切れ悪くスライが言葉を濁す。

「俺達の神のことは、まだ話してなかったよな？」

「うん？」

それがマディカの居場所と何の関係があるのか、と首を傾げながらも続きを待つ。

「俺達は、身の周りのあらゆるものに神が宿ると信じている。空に地、河に樹木。その中で頂点に立つのは、太陽の神だ。シクアトロで見たほどの大きなものではないが、この村にもその神を祭る場があってな。ほら、あの高台の建物だ」

スライが示す先には、他の家よりは若干大きな建物があった。場所は、村の奥の緩やかな坂を登りきった小高い丘の上だ。昨日、マディカにも案内してもらったが、神聖な場だということで、中にまでは立ち入らなかった。

「太陽の神には、代々、女達が仕えているんだ。その女達は、巫女として日々をあの中で過ごす。昨日マディカの隣りにいたのは、その一番位の高い者だ」

「と言うことはつまり、マディカもその一人だと？」

「まぁ、そんなところだな」

「そんなところって、どういうことだ？」

「マディカは特殊でな。今回のことで、神と約束を交わした。もしその力によって全てが解決し、村が皆の手に戻ったら、己の身を捧

げると。昔からある伝統でな。村が何らかの危機に直面すると行われる契約だ。その役目を負う娘を神の娘と言うんだが、それに選ばれる条件は、踊りだ。それが上手い未婚の娘が選ばれる」
「ちょっと待て、身を捧げるって、それは……どういう」
「言葉の通りだよ。己の全てを、命を捧げる」

「！」

スライの平然とした言葉に、殴られたような衝撃を感じた。舌が一気に乾き、言葉が喉に引っかかる。

「それは……それはつまり」

――命を奪われる、ということなのか？　それも、親しい村人達の手によって。

なぜ止めないのか、と言いそうになったが、寸でのところで口を閉ざした。
それが伝統で、神に関わる儀式なら、それに選ばれるのはむしろ名誉なことなのかもしれない。そしてそのことを疑問に思う人物は、おそらくは皆無だろう。外の世界を広く目にしてきたスライでさえも、こうして当然のように話しているではないか。

「それは、いつ？」

声が震えているかもしれないと思ったが、大した問題ではなかった。

「今夜だ」
「そんな急な……！」

さようなら、という言葉は、そういう意味だったのか。
あの明るい少女に、もう会えないなどとは信じられなかった。それどころか、彼女が明日の朝を迎えることもないなんて。今、一体どこで、どんな想いでいるのだろう？

いてもたってもいられない様子のマシュウに、スライが例の笑みを向けた。マシュウはそれにわずかながらも冷静さを取り戻す。なぜなら、これまでの経験で分かったことがあるからだ。それは、この顔は何かを企んでいる、ということだ。

「そこでだ、一つ提案があるんだが。どうだ、乗るか？」

……（4）

建物の隙間から漏れる薄明りの中。暗い部屋の隅に置かれた長椅子に、身を預ける少女が見えた。
既にマシュウもよく見慣れた彼らの村の伝統の衣装を纏っている。よく手入れされ梳かれた長い髪が、わずかな光に一際明るく輝く。
太陽の光をいっぱいに浴びた小麦色、彼らの村を黄金（きん）の溢れる理想郷と言わしめた色に。

「マディカ……マディカ！」

部屋に彼女が一人きりであるらしいことを確認してから、マシュウは息を潜めた囁き声で呼びかける。
その部屋では聞こえるはずのない声に、呼ばれた少女は閉じていた目を開いた。身を起こし、辺りをゆっくりと見回し――

「マ、マシュウ！」

藁を積んで作られた屋根の一部を掻き分けて覗くその顔に愕然とする。傾斜のある屋根の下方、部屋の床に近い部分とは言え、そこは地面からは絶対に人の手が届く場所ではない。

「そんな所で何をしているの！？　それにここ……二階なのに！」

身を捩り、這うようにしているマシュウにマディカは思わず手を差し出す。落ちては大変だと、何よりもそれがまず頭に浮かんだ。
その細い手を取り助けられ、マシュウはやっとのことで部屋の中への潜入が成功した。
全身を細かい藁くずだらけにしたまま肩で大きく息をつき、すぐ

近くでまっすぐに自分を捉える青い目に合うと困ったように笑う。
「外にあった梯子を使ったんだけど、いやぁ、あそこで身体半分が引っかかるなんて計算外だった」
「それより、ここは巫女以外、誰も来てはいけないのよ？　見つかったら大変だわ、早く外へ」
押し殺した声で早口に告げるマディカに、刹那、マシュウは真剣な面持ちになり。す、と目の前の少女の頬に両手の平を差し伸べる。
そのあまりに突然な予想すらしなかった行動に、マディカは息を止めた。無意識に。
「マシュウ？」
「俺はマディカ達のやり方に口を挟む権利はない。でも、自分の気持ちを伝える権利くらいはあるはずだ」
一度、言葉を区切る。マディカは大きな目を更に大きく見開いて、マシュウを見つめている。
「だから頼む、身を差し出すなんて止めてくれ」
「……」
「神聖な儀式だってことは分かってる、それはきっと栄誉なことなんだろうとも。でも、それでも……俺は、マディカに生きてて欲しい。もっとこれからも色んなものを見せてやりたいし、この村のことを教えて欲しい」
「……マシュウ、ありがとう。でも」
頬に置かれたままの手に、小さな手が添えられる。
「きっと誤解してるわ。身を差し出すとは言っても、命までではな

いのよ？」
「……は？」
「昔はそういうこともあったみたいだけど、今は違う。神の娘として受け入れられた者は、一生ずっと神に仕えるの。命ではなく生涯を捧げるのよ。意義のあることだわ」
そっと柔らかく微笑み、軽くマシュウの手を握る。その表情には不安や迷いは一切ない。しかし。そこには、馬車の旅でいつも見せていた、屈託のない明るい笑顔もなかった。
「でも、それじゃあ、二度と村の外には行けなくなるんだろう？」
マシュウの言葉に、静かに瞼を半分伏せる。どことなくいつもの彼女らしくない理由がそこではっきりとする。今その顔に微かに浮かぶのは、人が何かを手放す時に見せる喪失感、そして虚無だ。
「神の娘は、村のお祭りとか特別な時には皆の前に出ることも許されるけれど、儀式の一環として舞うだけ。そして例え身内でも、男性に会うことは許されなくなる。他の巫女とは違ってね。だから、スライともザカリアともカーチスとも、皆とお別れだわ。それに」
最後の名は音にならずに、唇からこぼれた。
――マシュウとも。
「旅の間はずっとそのことを考えてた。気持ちの整理をしたかったから、それに自分が住むこの村を外の世界から見つめてみたかったから、一緒に行ったの」
握られていたマシュウの手が、小さな白い手からそっと解放され

る。

「大変なことも辛いこともあった。でも嬉しかった、マシュウと会えて。色んな話もできて、楽しかった。だけど、もう……さようならを言わなくちゃ」

静かに身を引き、少女は告げる。

「だから行って。これ以上話していると」

「マディカ」

離れていく彼女の手を逃がさないように再び捉え、マシュウは強い口調で遮った。

「俺は、マディカを失いたくない」

「……！」

言葉を無くし、複雑な表情をし。

青い目が苦痛に歪む。

「俺の我儘だし、こんなことを言って困らせるのも十分承知している。けど、それでも」

目の前から今にも消えてしまうのを阻止しようとでもするかのように、マシュウは手に力を込める。

そしてもう一度、繰り返す。ただその一言を、万感の想いを込めて。

「マディカを失いたくない」

歪んだままの瞳から堪えきれずに涙が零れた。数個の粒が頬を伝

い、顎から落ちる。
マシュウはそれに動揺も狼狽もせず、ただじっと答えを待った。
赤い目の中にひたと、少女の青い目を捉えて。

「……マシュウってば本当に我儘だわ」

やがてマディカがぽつりと洩らした。大粒の涙を拭うこともせず、唇をぎゅっと引き結ぶ。
その口調やしぐさは喧嘩をした子供が拗ねている様子を彷彿とさせるものだった。先程までの、抗えない使命に身を委ね、凛とした、しかし全てを諦めた空っぽの彼女はそこにはいない。
これまでマシュウが見てきたままの本当のマディカの姿があった。まだ若干のあどけなさを残す、大人になりかけの希望に満ち溢れた明るい少女。

「でも、私はもっと我儘ね。自分の気持ちに嘘をつけずに、昔からの伝統に逆らおうというのだもの！」

……（4）（後書き）

あとエピローグで終了だったので、一気にアップしました。

エピローグ

日の白い光が、小さな村の全てを包む。
一面の麦穂の上を、風が渡っている。
ざざ、と、黄金色の波が静かに流れるように走る。
その奥に横たわる河。水面に光が反射し、一面が白銀色に染まっている。

見慣れた景色を、村を一望できる高台から眺めて、スライは眩しさに目を細めた。

「あいつ、本当に大丈夫だろうなぁ？」

背後の木の幹に背を預け、誰へということもなしに独りごちる。
馬車の御者台に寝転んでいるカーチスは、不安を含んだ声に、片眉をわずかに上げる。
荷台に腰掛けているザカリアは、スライと同じ方向を注意深く見やった。

「二人を信じて待つしかない」

まだ自由が利かない右腕を庇いつつ、更に遠くを確認しようと身を乗り出す。発言は強気だが、スライと同じく落ち着かない様子だ。

規則正しく並ぶ、藁葺きの屋根。その周りに広がる、黄金色の海。
その集落から伸びる細い道。
遠くからも一際目立つ赤い髪の持ち主は、まだどこにも姿を現さない。

二人が睨みつけるような表情のまま無言で遠くを凝視していると、カーチスが身を起こした。それも、二人とは全く別の、背後に広がる森を向いて。

「……！」

茂る藪を踏み分けて現れたのは、彼らの待ち人達だった。

軽く息を弾ませ、マディカの小さな手を取ったマシュウ。一歩遅れて、マシュウの手をしっかりと握り返し、頬を微かに上気させたマディカ。

突然目の前に現れた三人と馬車に驚いている少女をその場に、マシュウはすぐさまスライに詰め寄った。

「スライ！　てめぇ嘘付いたなー！」

「何のことだ？」

自分よりも頭一つ分は低いマシュウに胸座を掴まれたところで、痛くも痒くもないと言うように、しれっと言い切るスライ。

「神の娘って、命を捧げるって言ってたじゃないか！　けど、実際はそんなことないって」

「そんなこと言ったっけか？」

白々しい科白を、いつもの緩い笑顔を浮かべて吐く。悪気など全く感じていない。むしろ、してやったりという表情だ。

「言ったよ！　おかげでかなり焦ったんだからな！？」

「まぁまぁ、ああでも言わなきゃ、お前さん本気になって動かなかっただろう？」

ガクガクと揺さぶられながらも満面の笑みはそのままだ。
「とにかく、マディカをうまく連れ出せてよかった」
それを止める意味合いも含め、ザカリアがマシュウに向かって話しかけた。そこでマシュウは我に返り、とたんに、あることが脳裏を掠める。
「そう言えば、こんなことして余所者の俺はともかく、皆は大丈夫なのか？」
「理屈としては大丈夫か、とも思ったんだが」
理屈と言うよりも屁理屈に近いんだけどな、というスライの余計な一言は聞き流して、昨夜の話し合いのことを、ザカリアはマシュウに説明する。
「――それを巫女様にも話して交渉してみたが、箒で叩き出された」
「そんなことをするなんて無茶よ」
そのようなことが昨夜あったとは知らなかったマディカは、驚いた。彼女が知っている限りでは常識人のザカリアが、まさかそのような行動をするとは。
「うわ、そりゃ怪我人に対して有り得ない対応だなぁ。あの人も上品なわりに、案外やることが豪快なんだな」
スライの率直な感想に、ザカリアはただ苦笑した。
「それじゃあ、やっぱりこんなことしたら」

マシュウの不安に、今度はスライが答えた。
「大丈夫だ。長のほうは分かってくれた。巫女様も、長が説得してくれるはずだ。時間はかかるかもしれないけどな」
「そうか」
それにマシュウは安心し、口元を緩めた。自分のせいで彼らが故郷に帰れなくなってしまっては、面目が立たない。
「さて、じゃあ行くか」
おもむろにスライが皆に向かって呼びかける。それは、これまで何度も見た光景だ。
だが。
「行くかって、どこへ？　それにいいのか？　せっかく帰って来たばかりなのに」
そこで改めてそのことにマシュウは気付く。
よく見ると、スライもザカリアもカーチスも、旅回りの時と同じ準備を整えて二人を待っていたようだ。広場での集まりの時には皆と同じ故郷の衣服を着ていたが、今は他の街でもよく見かける旅人の軽装姿だ。
マディカを連れ出したらこの場所へ来いと指示された時は、そのことまでは気が回らなかったのだが。
「俺達はマシュウに助けられた。だから、これからは俺達が力を貸す番だ。ティエラにはお前さんが探してたようなものはないからな。代わりと言っちゃなんだが、それを探すのを手伝いたい」
「スライ……」

思わぬ申し出に、マシュウは言葉が見つからなかった。

「それに、お前さんは俺達の一員だからな。ザカリアがまたオラが弾けるようになるまで、頑張ってもらわなきゃならない」

「スライ！？　それやっぱり本気だったのか！？」

更に思いも寄らなかったその科白に、デレクの言っていた二文字が脳裏に浮かんだ。

転職。

それを本業にする予定はないが、掛け持ちをする生活はまだしばらく続きそうだ、と諦めの溜息を洩らし、口元を緩めた。

「でもカーチスまでいいのか？　奥さんをまた放っておいたりして。怒られるんじゃないか？」

スライの言葉は嬉しかったが、そこは気になるところだ。かなり個人的な意味合いの質問になってしまうが、やはりここは確認しておくべきだろう。

「……大丈夫。分かってくれた」

相変わらず口数が少ないその答えに、どのように分かってくれたのかが更に気になったが、それ以上は訊かないことにした。それだけ信頼しあっている……と、思っておくことにしよう、と自分を納得させる。とりあえずは。

「ザカリアは？」

やっとで元の様子を取り戻しつつある彼にも確認する。マシュウに問われ、ザカリアは眼下に広がる景色に目を落とした。

「今はしばらく村を離れていたい。あそこにいると、思い出すんだ」

「そうか、そうだよな……」

その視線を辿り、マシュウも静かに呟いた。そこから見る村は、確かに金色に輝いて見えた。

それは決して誰の掌にも乗せることのできない黄金(きん)。

ふと、手を軽く握られる感覚に振り向く。

柔らかな優しい風に、輝く髪を撫でられ、微笑むマディカの姿があった。

「マシュウ、これでまたみんな一緒にいられるわね」

昨日までは諦めていたもの全てがその手に戻り、少女は嬉しさに破顔する。

「ああ、一緒に」

その手を握り返し、マシュウも微笑んだ。

そして彼らの旅は、またここから始まる――

<END>

エピローグ（後書き）

まずは何よりも先に。
ここまでお付き合い下さった方、ありがとうございますっ（＾＾）

この作品を書いたのは一年ほど前でして、今から読み返すと、色々と至らない部分がちらほらと（汗）
何よりもストーリーのために書いてしまったものだったので、登場人物もそのためだけに黙々と動いている状態で、そこが一番の反省点です（＜＞）

それでも、この話を急に思いつき、そして「書きたい！」と思ったのがまた小説を始めるきっかけだったので（それまで長ーいこと離れてました）、自分にとっては意味のある作品でした。
これを書かなければたぶん、その後もずっと、書いていなかったと思います。

最近は、もう少し軽めのものを意識して書いているのですが、やっぱり時々、こういった雰囲気のいかにも中世！的なものも書きたくなります。
（ただせっかくのファンタジージャンルなので、もう少しそれっぽい設定とかはあってもいいかもしれない、とか思いますが　＾＾；）
宜しければ感想やご意見などを頂けると嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5347m/

彼らが求むは不可触の黄金

2010年10月9日19時41分発行